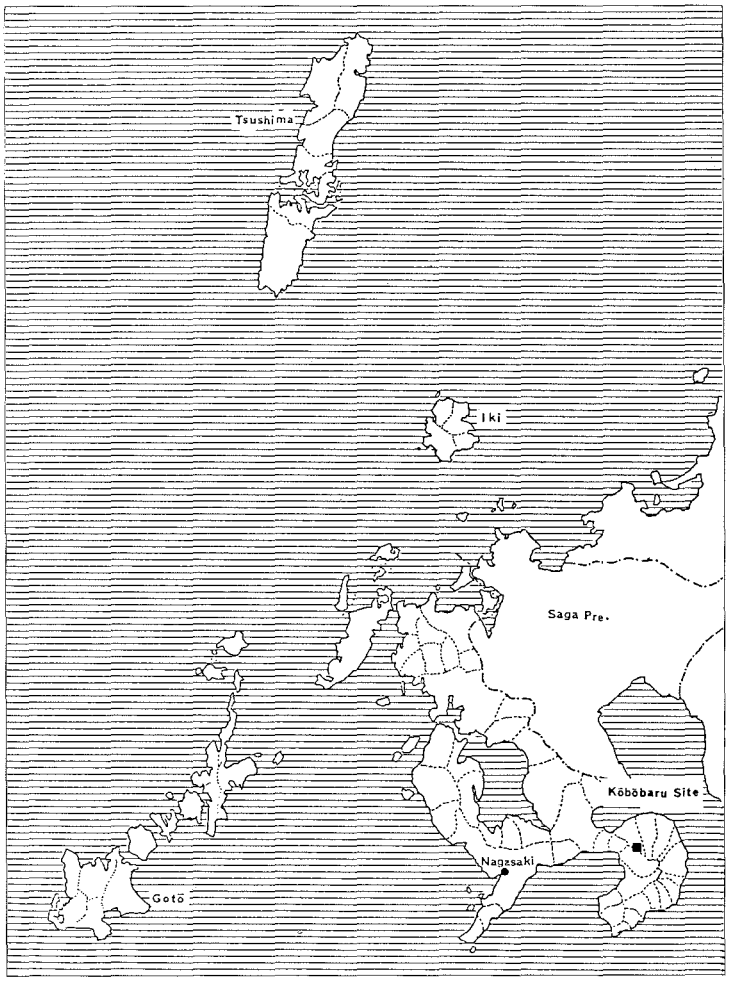
吾妻町の文化財13

弘法原遺跡

1992

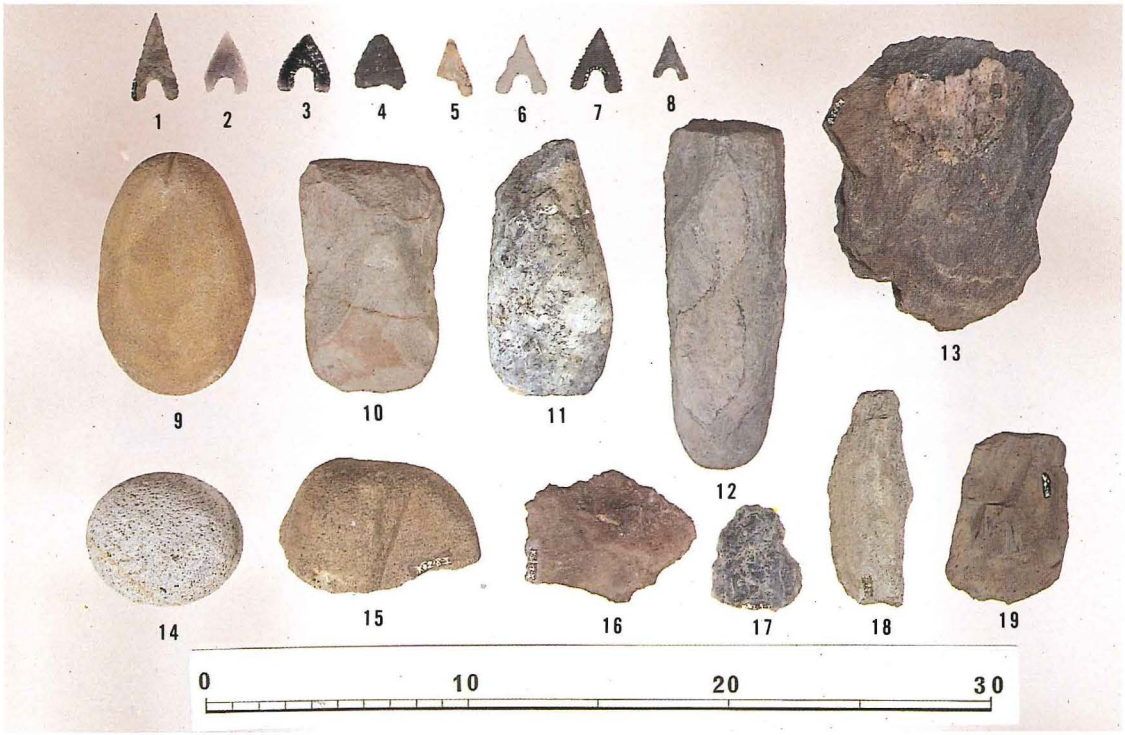
長崎県吾妻町教育委員会

弘法原遺跡



▲遺跡遠景

▼遺跡出土の多様な石材（石材名は次頁）



1；安山岩（サヌカイト質）　2；灰白色黒曜石　3；黒色黒曜石　4；安山岩
5；チャート　6；安山岩（在地）　7；灰青色黒曜石　8；チャート　9；砂岩
10；硬質砂岩　11；蛇紋岩　12；貢岩　13；結晶片岩　14；安山岩（在地）
15；砂岩　16；珪化岩類　17；チャート　18；絹雲母片岩
19；安山岩（サヌカイト質）

（第三章、一、に関連）

発刊にあたって

吾妻町は島原半島の首部近くに位置し、いにしえより、かなりの人々が定住してきた所であります。

それは、町内一円から、縄文時代・弥生時代の土器や石器等が数多く発見されていることからも判ります。

弘法原遺跡は昭和55年～57年の３ケ年にわたり、県文化課にお願いし発掘調査を実施した際、縄文早期の単純遺跡であるという報告をうけております。また、昭和63年度には、県の重要遺跡としての位置づけがなされております。

今回の弘法原遺跡発掘調査は、吾妻町牧野開発の公共牧野機能強化事業に伴うもので道路拡幅部分の680㎡を平成２年７月から９月にかけて調査をいたしました。

調査の結果、前回と同じように、縄文早期の土器・石器等が数多く出土し、先住民の生活の跡が偲ばれるとともに、先史時代の貴重な遺跡であることがわかります。

この調査にあたり、深い御理解と御協力下さった地権者の方々、ならびに猛暑の中、３ケ月の長期にわたり調査担当をいただいた県文化課の皆様の御労苦に対し、深甚の敬意を表する次第であります。

今後、この調査報告書が文化財保護や学術研究の資料として活用されることを祈りながら発刊のことばといたします。

平成４年３月31日

吾妻町教育委員会

教育長　島　田　　力

例　　言

1．本書は、平成２年度に実施した公共牧場機能強化事業にかかる緊急発掘調査報告書である。

2．調査は、国庫・県費の補助を得て吾妻町教育委員会が事業主体となり長崎県教育委員会文化課が担当した。

3．本書は分担執筆し、各項の執筆者は本文目次の項に記した。石器の実測、トレース、土器の拓本等については、川脇いつ子、黒川弘子、荒木美保、森洋子、渡辺洋子、斉藤いづみ、森崎京子、川崎奈津美、武次三枝、河村由紀、遺物の写真撮影を町田利幸が行い、渡辺由里子、徳永妙子の各氏に協力を得た。

4．第三章、一、石器群の石材利用については、渡辺康行氏の玉稿を得た。

5．本書関係遺物は、現在全て長崎県教育委員会文化課で保管している。

6．本書の編集は村川がおこなった。

本文目次

	頁	執筆者
第1章　序　説		
一、調査に至る経偉	1	高野晋司
二、調査経過	2	〃
三、遺跡の地理的歴史的環境	4	村川逸朗
第2章　遺跡の調査		
一、遺跡の層位	9	〃
二、遺構	9	〃
三、遺構の検出状況と遺物（石器）の出土状況	28	〃
四、出土遺物		
(1)　土器	31	高野晋司
(2)　石器		
a．石鏃、他	54	村川逸朗
b．磨石・凹石・敲石・砥石・石皿・台石	71	町田利幸
第3章　考　察		
一、石器群の石材利用について	84	渡辺康行
二、まとめ	91	村川逸朗

挿図目次

	頁
第1図　調査区位置図	3
第2図　吾妻町内の遺跡	5
第3図　周辺地形及び調査・遺跡範囲	7
第4図　土層図①1/80	10
第5図　土層図②1/80	11
第6図　土層図③1/80	12
第7図　土層図④1/80	13
第8図　土層図⑤1/80	14
第9図　II・III・IV層面の遺構検出状況	15
第10図　II層中面（4区）、III層上面（1区）1/80	17

第11図Ⅲ層上面（２、３、４区）1/80……18
第12図　Ⅲ層中面（５区）、Ⅲ層上面（６、７区）1/80 ……19
第13図　Ⅲ層上面（12、14区）、Ⅲ層下面（13区）1/80 ……20
第14図　Ⅳ層上面（１、２、３区）1/80……21
第15図　Ⅳ層上面（４、５、６区）1/80……22
第16図　Ⅳ層上面（10、11、12、13区）1/80……23
第17図　Ⅳ層上面（14、15、16区）1/80……24
第18図　Ⅳ層下面（17区）、Ⅳ層上面（18区）1/80 ……25
第19図　遺構検出層位概念図……25
第20図　１号土壙（KDI）1/20……26
第21図　集石土壙1/20……27
第22図　1970～1972及び1990年調査石器出土量図……28
第23図　各種石器出土内訳……29
第24図　調査区別土器出土状況……31
第25図　調査区別土器出土状況……32
第26図　1970～1971年調査遺物出土状況……33
第27図　深鉢形態分類図……34
第28図　Ⅰ—1A類（山形）実測図① ……38
第29図　Ⅰ—1A類（山形）実測図② ……39
第30図　Ⅰ—1A類（山形）実測図③ ……40
第31図　Ⅰ—１類（山形）実測図④……41
第32図　Ⅰ—1A類（山形）実測図⑤ ……43
第33図　Ⅰ—1B、1C類（山形）実測図⑥ ……44
第34図　Ⅰ—1D、1E、1F類実測図⑦ ……46
第35図　Ⅰ—２類（楕円）実測図⑧……47
第36図　Ⅰ—３類（格子目）実測図⑨……50
第37図　Ⅱ、Ⅲ類（無文・撚糸・縄文）実測図⑩……51
第38図　Ⅳ類（その他）土器実測図⑪……52
第39図　Ⅰ層出土の石器①1/2 ……55
第40図　Ⅰ層出土の石器②1/2 ……56
第41図　Ⅰ層出土の石器③1/3 ……57
第42図　Ⅱ層出土の石器①1/2 ……58
第43図　Ⅱ層出土の石器②1/2 ……59
第44図　Ⅱ層出土の石器③1/3 ……60

第45図　II層出土の石器④131、132は1/3、133～139は1/2……61
第46図　III層出土の石器①1/2 ……62
第47図　III層出土の石器②1/3 ……63
第48図　IV層及びKDI、その他出土の石器170～180は1/2、183は1/3 …64
第49図　Ⅰ、II層及び表面採集の石器1/3 ……65
第50図　地区別出土石器……71
第51図　出土石器（磨石・凹石）……73
第52図　出土石器（凹石・砥石）……74
第53図　出土石器（棒状磨石）……75
第45図　出土石器（石皿）……76
第55図　出土石器（石皿・台石）……77
第56図　地区別石器出土点数……78
第57図　重量別磨石・凹石グラフ……79

表　目　次

頁

第１表　出土土器統計表①……35
第２表　出土土器統計表②……36
第３表　石器計測表①……66
第４表　石器計測表②……67
第５表　石器計測表③……68
第６表　石器計測表④……69
第７表　石器計測表⑤……70
第８表　石器計測表⑥……79
第９表　石器計測表⑦……80
第10表　石器計測表⑧……81
第11表　石器計測表⑨……82
第12表　石器計測表⑩……83
第13表　主要花粉胞子化石ダイヤグラム……93

図 版 目 次

図版１　遺跡遠景・調査前の状況……97
図版２　調査地を西側から撮影・遺物出土状況……98
図版３　調査風景……99
図版４　２、４、５、６、12、17区土層 ……100
図版５　遺構検出状況 ……101
図版６　遺構検出状況 ……102
図版７　遺構検出状況 ……103
図版８　16区集石土壙 ……104
図版９　出土土器① ……105
図版10　出土土器② ……106
図版11　出土土器③ ……107
図版12　出土土器④ ……108
図版13　出土土器⑤ ……109
図版14　出土土器⑥ ……110
図版15　出土石器① ……111
図版16　出土石器② ……112
図版17　出土石器③ ……113
図版18　出土石器④ ……114
図版19　出土石器⑤ ……115
図版20　出土石器⑥ ……116
図版21　出土石器⑦ ……117
図版22　出土石器⑧ ……118
図版23　調査スナップ及び記念写真 ……119

第1章　序　　章

一　調査に至る経偉

吾妻町に牧野という牧場がある。標高は300m前後であるが、北に有明海、南に橘湾を見下ろし、東に雲仙岳を仰ぐ景勝地であるために、以前から地元の小中学校の格好の遠足場所になっていた。弘法原遺跡は、この牧野に至る途中の緩傾斜地に位置している。

昭和46年、この牧野までの遠足の際、当時地元の小学校に勤務していた先生が牧野付近の開墾地から古そうな土器と石器を採集されていた。弘法原遺跡発見の端緒である。

採集されていた資料は、土器は押型文を施すものが大部分で、石器には磨製石斧や尖頭状石器、鍬型鏃が多く含まれるなど、開墾地を含むその周辺が県内では珍しい縄文早期の単純遺跡である様相を示していたため、急ぎ新発見遺跡として遺跡地図に掲載するなど遺跡周知化の処置が取られることとなった。

弘法原遺跡は標高220m前後の山中にあり、特に開発らしきものも無かったことが幸いしてほぼ現状のまま保存されていたが、昭和55年、急拠当該地に肉牛肥育事業による畜舎建設が行われることが分かった。県文化課と町教育委員会による現地調査の結果、建設予定地は遺跡の中心部にあたる可能性が高いことが考えられたため、設計変更を含む協議が事業者との間に数回もたれることとなったが、協議は不調に終った。このため建設予定地内の緊急発掘調査が計画され、畜舎建設事業の年次計画に基づき、昭和55年から57年の3か年に分けて実施されることとなった。このときの調査結果については既に報告済み[註1]である。

その後平成元年に至り、今度は前述牧野を中心とした公共牧場機能強化事業が計画されることとなった。事業内容は、景勝地を生かしたキャンプ場作りや各種設備を整備して観光客を誘致するのが目的であり、そのために既存の幅3mの道路を倍に拡幅する計画がなされた。

弘法原遺跡は過去3回の調査の結果、その範囲は少なくとも東西100m、南北70mを越すことは確実であったが、いまだその範囲を特定するには至っていなかったため、今回のように南北に走る道路の場合は、特に遺跡の南北の範囲を限定する必要があった。このため、まず遺跡の範囲を特定するための試掘調査を実施することとし、その結果に基づいて改めて遺跡にかかる部分についてその保存のための協議をすることとした。

試掘調査の結果、遺跡の内、特に南北の範囲は当初の想像を越えて南北170mにも及ぶことが判明し、また出土する遺物の時期も限定されていたことからやはり有数の押型文遺跡として改めて認識されることになった。この結果に基づき、事業者である吾妻町企画課との間に保存のための協議がもたれたが、事業の遂行のためにはどうしても道路の拡幅は避けられず、遺跡の内道路にかかる部分の680m²について緊急発掘調査を行うことで合意することとなった。

註1　長崎県吾妻町教育委員会「弘法原遺跡」吾妻町の文化財7　1983

二　調査経過

今回報告する区域は、昭和55年から57年に調査した区域の東側にあたる(第１図)。調査は試掘調査と本調査の２回に分けて実施した。

試掘調査　平成２年６月４日～６月15日（９日間）

試掘調査は基本的に２ｍ×２ｍのグリッドを22か所設定した。最終調査面積は74㎡である。調査にあたっては、あらかじめ打ってあった道路中心杭を利用することとし、道路拡幅区域（TP. １～TP. 14）と駐車場建設予定区域（TP. 15～TP. 22）に分けて調査区を設定した。

調査の結果は、TP. １～TP. ７にかけて良好な遺物堆積状況が確認されたが、TP. ８～TP. 22では表土直下に安山岩の風化礫を含む粘土質の土壌が堆積しており、この中には遺物・遺構共に全く含まれないことが分かった。この事実から、弘法原遺跡の南北の範囲は約170ｍに限定されることが判明したため、本調査はこの区域に限定されることとなった。

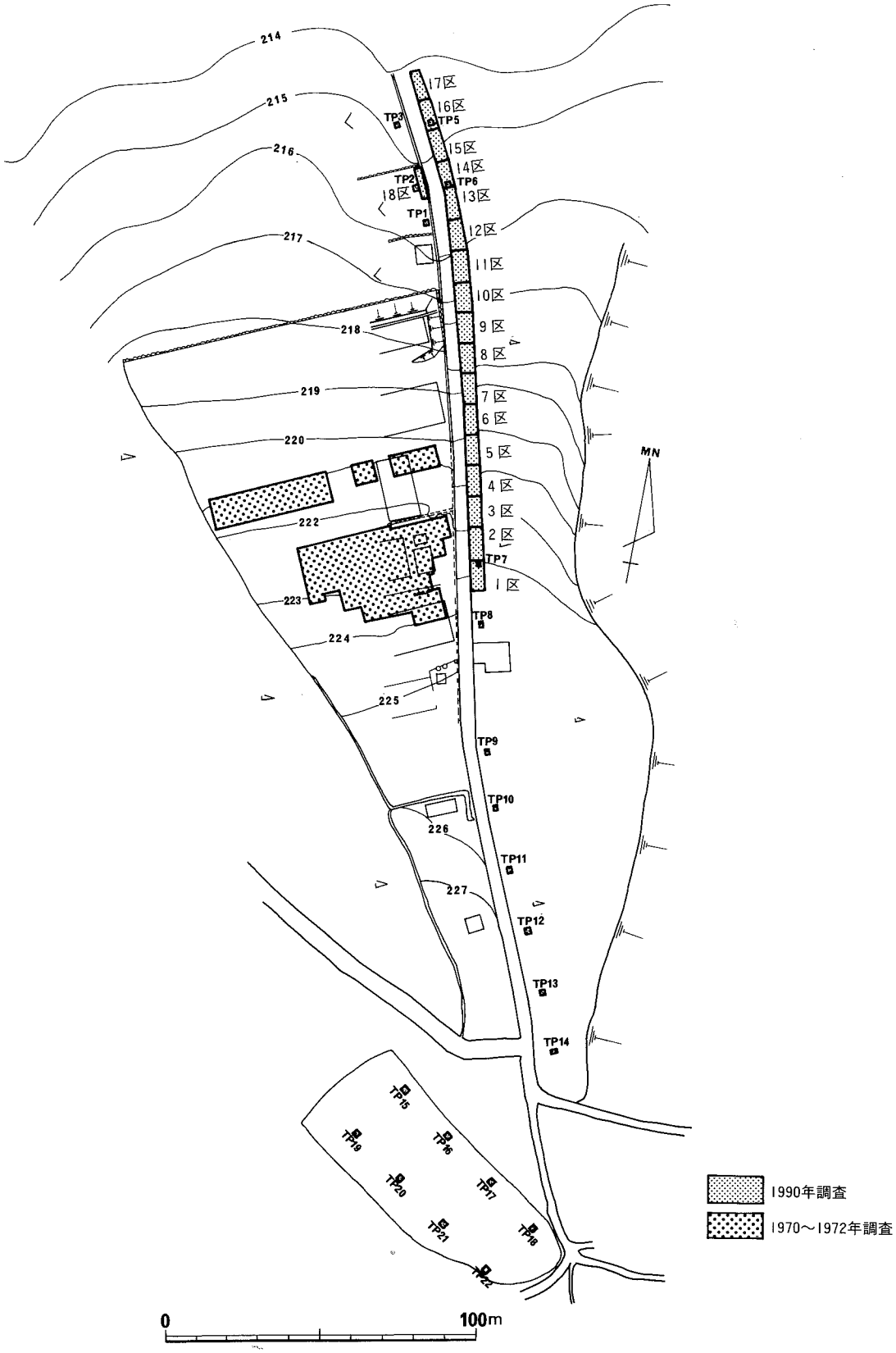
本調査　　平成２年７月９日～９月１日（36日間）

試掘調査によって判明した遺跡範囲の内、道路拡幅部分に南北に長いトレンチを設定した。その呼称は南から北側に向かって１～18区とした（第１図)。

この内特に１～５区は、多量の遺物が集中して出土した昭和55年と56年の調査区の東側至近距離にあたり、それらとの関連が注意された地点である。

今回の調査関係者は以下のとおりである。

調査総括	島田　　力	吾妻町教育委員会教育長	
	吉田　正博	同	教育次長
	本田　周太	同	社会教育係長
調査担当	高野　晋司	長崎県教育庁文化課主任文化財保護主事	
	町田　利幸	同	文化財保護主事
	村川　逸朗	同	同
	小野ゆかり	同	文化財調査員
調査協力	吾妻町企画課		


214
215
216
217
218
219
220
222
223
224
225
226
227
17区
16区
15区
14区
13区
12区
11区
10区
9区
8区
7区
6区
5区
4区
3区
2区
1区
18区
TP1
TP2
TP3
TP5
TP6
TP7
TP8
TP9
TP10
TP11
TP12
TP13
TP14
TP15
TP16
TP17
TP18
TP19
TP20
TP21
TP22
MN
0
100m
1990年調査
1970～1972年調査

第1図　調査区位置図

三、遺跡の地理的歴史的環境

島原半島中央部には、現在活動中の普賢岳(1,359m、これは活動前の数字で、現在溶出ドームは高さ30m程に盛り上がっていて、成長と崩落を繰り返している）と、それを取り巻く妙見岳、国見岳、江丸岳などの外輪山（カルデラ縁）がある。また、普賢岳を中心とするカルデラ縁のまわりには、東に眉山、西に国見岳、九千部岳、北に吾妻岳、鉢巻山などの火丘群が峰を連ねて山岳部を形成している。これらの山岳部の北側前面には広大な火山性山麓扇状地(裾野)がゆるやかに展開し、海になだらかに没している。弘法原遺跡は、これらの火丘群のひとつ鉢巻山から強く傾斜し、火山性山麓扇状地のゆるやかな勾配に変化する地点（地形用語でいうところの遷移点）に立地している。行政区域では、南高来郡吾妻町栗林名字松尾に所在する。附近一帯が通称「弘法原」と呼ばれるのは、近くに祀ってある「弘法大師」の碑がその由来であるらしい。また、遺跡東端直下には、その谷筋を流れる一条の小河川の源泉が知られており、現在でも枯渇することはない。遺跡の南側約300mの至近距離には、落差60mを持つ千々石断層が東西に走って急崖をなしている。標高としては215～225mを計る。

次に周辺遺跡を概観してみたい。[註1]

旧石器時代では、現在のところ当該報告遺跡である61の弘法原遺跡のみでナイフ形石器など数点が表面採集されている。縄文時代の遺跡で明確な包含層を伴う遺跡は弘法原遺跡との坂上遺跡がある。坂上遺跡はその遺跡範囲の広さと出土遺物の豊富さから弘法原遺跡同様、拠点的なホームベースであろうと思われる。それ以外では、55の中熊台遺跡群で数点の押型文土器と晩期の組織痕土器が、28の条里跡の西端部附近より晩期の資料が若干みられる。47の周辺の海岸段丘上より晩期資料が出土したとの報[註2]があるが、地点が不明確で判然としない。弥生時代遺物は、町内各所から発見の報はあるが、地点が何れも不明瞭である。現在遺物・遺構共に確認し得るのは、中熊台地及びその周辺からのものである。すなわち、55に於いて前期末～中期初頭に属する石棺墓と土拡墓が、そして川の西端にあたる部分から圃場整備の工事中出土した中期～後期にかけての資料がそれである。古墳時代に入ると、遺跡の数は急激に増えて20遺跡を数える。その内訳は、前方後円墳３、円墳で横穴式石室のもの４、石棺形態のもの６、そして形状不明が８遺跡である。もっとも、この内すでに消失しているものも５遺跡を数えるから、現存するのは15遺跡である。

これらの数字は、県内では密な方であり、特に前方後円墳が３基集中するのはこの地区のみである。特に古城古墳は、報[註3]によれば径100mを越すものとされ、それが事実であれば、県下で最大クラスの規模をもつことになる。これら、古墳密集の背景には、当然ながら余剰生産の事実があった訳で、それは現国道以南に展開する、古い広域にわたる海岸沖積地の最大限の利用によるものに他ならない。現在なお、同地区が島原半島でも卓越した水田穀倉地帯である実績は、その萠芽がすでにこの頃あらわれていた事の証左であろう。

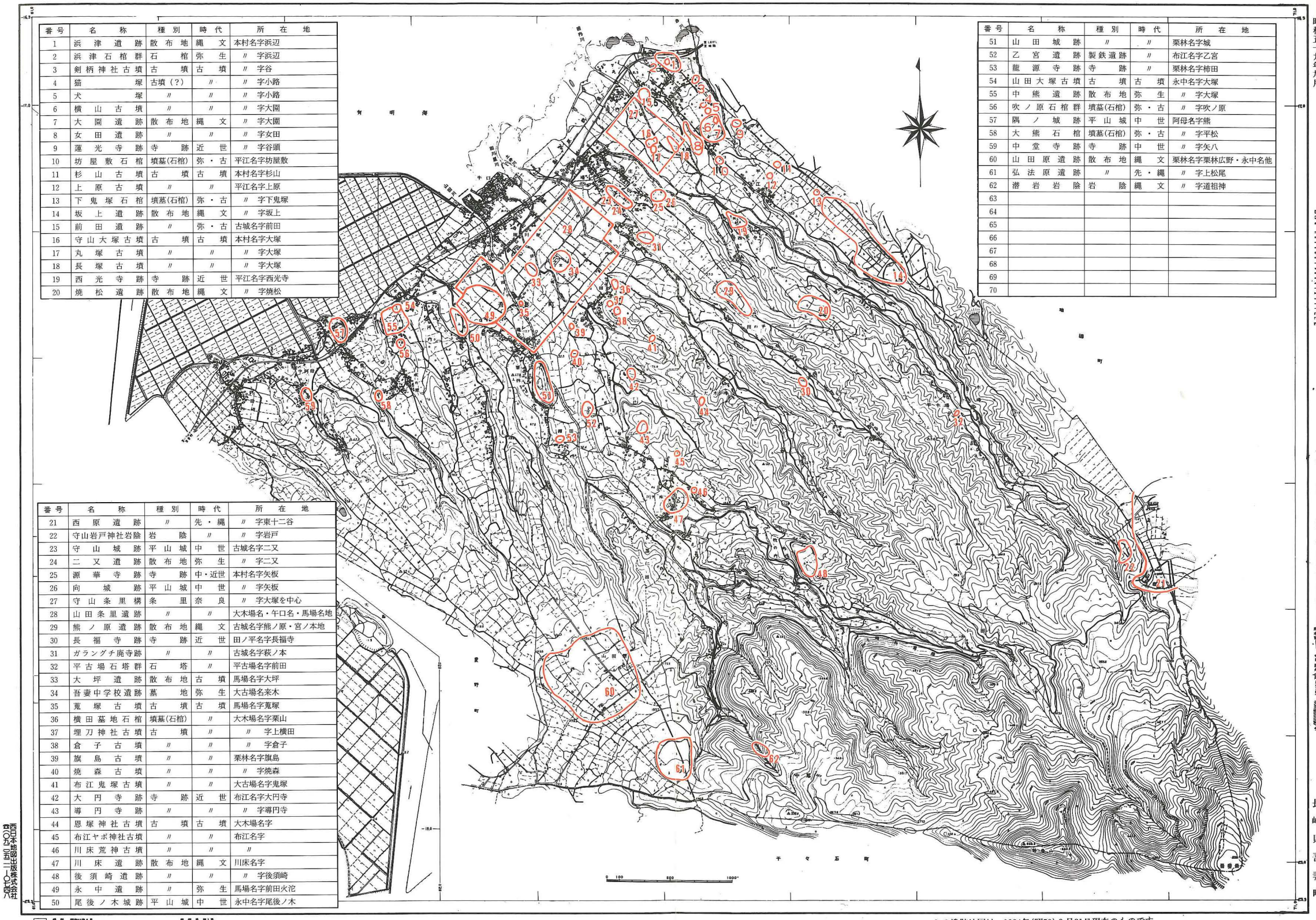
吾妻町遺跡地図

昭和五十九年九月

番号	名称	種別	時代	所在地
1	浜津遺跡	散布地	縄文	本村名字浜辺
2	浜津石棺群	石棺	弥生	〃 字浜辺
3	剣柄神社古墳	古墳	古墳	〃 字谷
4	猫塚	古墳（？）	〃	〃 字小路
5	犬塚	〃	〃	〃 字小路
6	横山古墳	〃	〃	〃 字大園
7	大園遺跡	散布地	縄文	〃 字大園
8	女田遺跡	〃	〃	〃 字女田
9	蓮光寺跡	寺跡	近世	〃 字谷頭
10	坊屋敷石棺	墳墓(石棺)	弥・古	平江名字坊屋敷
11	杉山古墳	古墳	古墳	本村名字杉山
12	上原古墳	〃	〃	平江名字上原
13	下鬼塚石棺	墳墓(石棺)	弥・古	〃 字下鬼塚
14	坂上遺跡	散布地	縄文	〃 字坂上
15	前田遺跡	〃	弥・古	古城名字前田
16	守山大塚古墳	古墳	古墳	本村名字大塚
17	丸塚古墳	〃	〃	〃 字大塚
18	長塚古墳	〃	〃	〃 字大塚
19	西光寺跡	寺跡	近世	平江名字西光寺
20	焼松遺跡	散布地	縄文	〃 字焼松

番号	名称	種別	時代	所在地
21	西原遺跡	〃	先・縄	〃 字東十二谷
22	守山岩戸神社岩陰	岩陰	〃	〃 字岩戸
23	守山城跡	平山城	中世	古城名字二又
24	二又遺跡	散布地	弥生	〃 字二又
25	源華寺跡	寺跡	中・近世	本村名字矢板
26	向城跡	平山城	中世	〃 字矢板
27	守山条里構	条里	奈良	〃 字大塚を中心
28	山田条里遺跡	〃	〃	大木場名・午口名・馬場名地
29	熊ノ原遺跡	散布地	縄文	古城名字熊ノ原・宮ノ本地
30	長福寺跡	寺跡	近世	田ノ平名字長福寺
31	ガランゲチ廃寺跡	〃	〃	古城名字萩ノ本
32	平古場石塔群	石塔	〃	平古場名字前田
33	大坪遺跡	散布地	古墳	馬場名字大坪
34	吾妻中学校遺跡	墓地	弥生	大古場名来木
35	蒐塚古墳	古墳	古墳	馬場名字蒐塚
36	横田墓地石棺	墳墓(石棺)	〃	大木場名字栗山
37	埋刀神社古墳	古墳	〃	〃 字上横田
38	倉子古墳	〃	〃	〃 字倉子
39	旗島古墳	〃	〃	栗林名字旗島
40	焼森古墳	〃	〃	〃 字焼森
41	布江鬼塚古墳	〃	〃	大古場名字鬼塚
42	大円寺跡	寺跡	近世	布江名字大円寺
43	導円寺跡	〃	〃	〃 字導円寺
44	恩塚神社古墳	古墳	古墳	大木場名字
45	布江ヤボ神社古墳	〃	〃	布江名字
46	川床荒神古墳	〃	〃	〃
47	川床遺跡	散布地	縄文	川床名字
48	後須崎遺跡	〃	〃	〃 字後須崎
49	永中遺跡	〃	弥生	馬場名字前田火沱
50	尾後ノ木城跡	平山城	中世	永中名字尾後ノ木

番号	名称	種別	時代	所在地
51	山田城跡	〃	〃	栗林名字城
52	乙宮遺跡	製鉄遺跡	〃	布江名字乙宮
53	龍源寺跡	寺跡	〃	栗林名字柿田
54	山田大塚古墳	古墳	古墳	永中名字大塚
55	中熊遺跡	散布地	弥生	〃 字大塚
56	吹ノ原石棺群	墳墓(石棺)	弥・古	〃 字吹ノ原
57	隅ノ城跡	平山城	中世	阿母名字熊
58	大熊石棺	墳墓(石棺)	弥・古	〃 字平松
59	中堂寺跡	寺跡	中世	〃 字矢八
60	山田原遺跡	散布地	縄文	栗林名字栗林広野・永中名他
61	弘法原遺跡	〃	先・縄	〃 字上松尾
62	潜岩岩陰	岩陰	縄文	〃 字道祖神
63				
64				
65				
66				
67				
68				
69				
70				

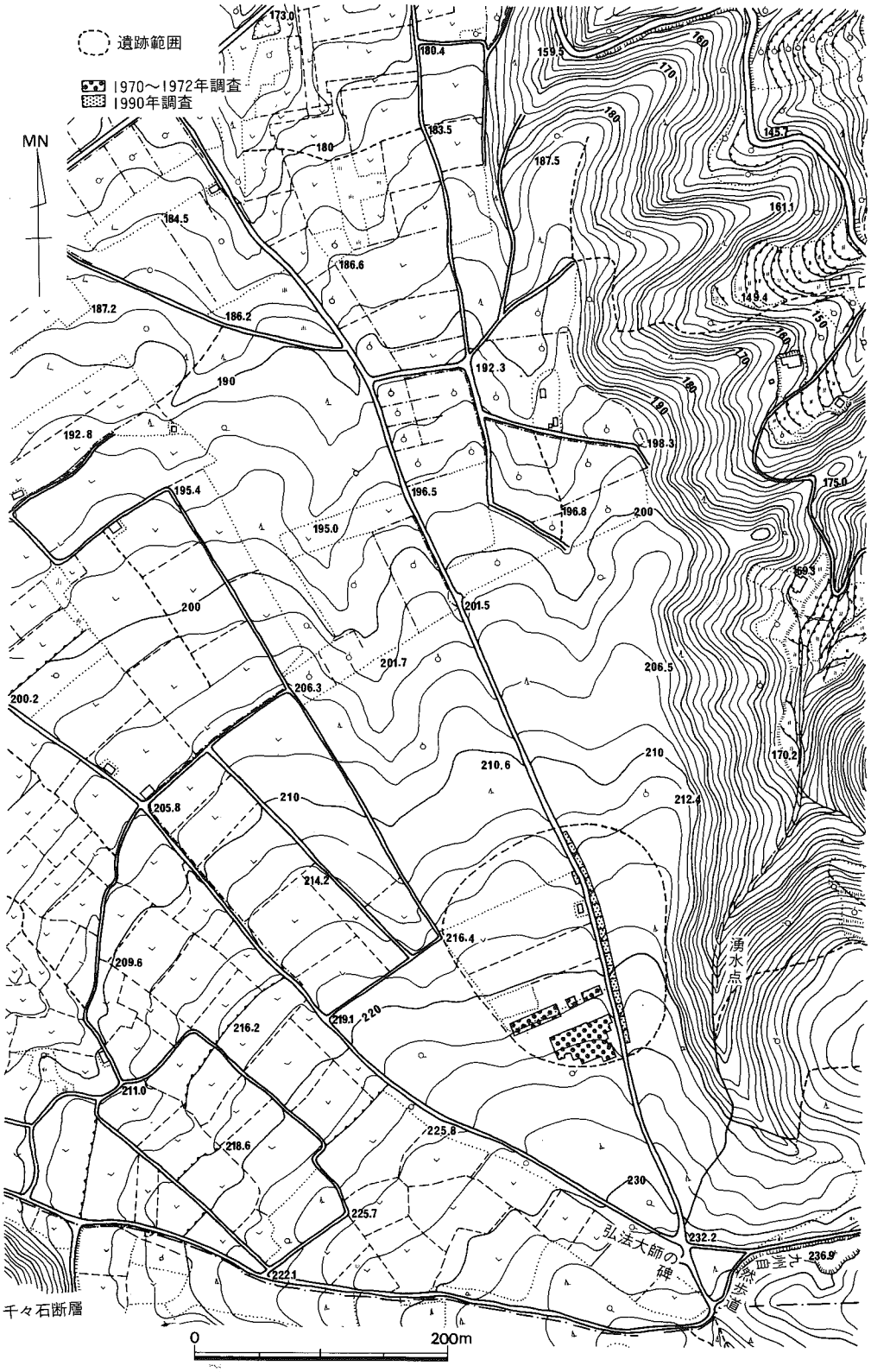


長崎県吾妻町

第２図　吾妻町内の遺跡

・この遺跡地図は、1984年(昭59) 3月31日現在のものです。
・この遺跡地図についての詳しいことは、教育委員会、または、県文化課にお問い合わせ下さい。

西日本出版社株式会社 ☎(092)711-1101



第３図　周辺地形及び調査・遺跡範囲

吾妻町は、旧山田村に属し、延喜式兵部省に言う「山田駅」の在所に比定されており、大宰府から野鳥に到る西海道西路の駅路として、古代から重要な位置を占めている。

このような歴史的環境は又、古墳時代以降に顕著な農地の拡大利用の実績と合わせて、後世に於ける条里施行にスムーズに移行させ得る要素を有していたものと思われる。

現在、本県には5か所の条里遺構が指摘[註4]されているが、島原半島に於いては、この17が唯一の例である。

註1　当該地図作成には、下記の資料を参考とし、遺跡内容についても同書に負うところが大きい。

a．古田正隆、上田俊之、吉田安弘、1978「杉山古墳調査報告書」吾妻町の文化財3、吾妻町教育委員会、p. 1、p. 50～53

b．古田正隆　1979「吾妻町中熊台地調査報告」吾妻町の文化財4　吾妻町教育委員会

c．古田正隆　1982「山田地区県圃場整備工事に伴う埋蔵文化財の調査概報」吾妻町の文化財5　吾妻町教育委員会・島原振興局土地改良課

註2　長崎県教育委員会　1962「長崎県遺跡地名表」長崎県文化財調査報告書第1集

註3　注1a　p. 52

註4　土肥利男　1965「多良山麓研究」p. 44～46

第２章　遺跡の調査

一　遺跡の層位

土層は基本的に４層に分けられる。

１層は表土で腐植土を多量に含む。暗褐色で厚さは10cm前後であるが、20～30cmのところもあり、深いところでは40cm程である。また、部分的には暗褐色土層の下に暗茶色の土層と分離できるところもある。遺物を含んでいる。

２層は黄褐色土層である。ひのきの植林地であったために木の根が入り込んでいる。フカフカの火山灰層である。厚さは10cm前後である。遺物の大半はこの層からの出土である。

３層は黒褐色土層で、しまりがない。遺物はこの層からも出土するが、その数は少ない。

４層は明黄褐色粘質土層で、地盤である安山岩の風化礫を含む。遺物は、７、15、16区よりごくわずかの出土をみる。

この南北長170mの長さの東壁中には、柱穴や、不明落込み状遺構の断面が観察されるので遺跡範囲としては、調査範囲東側まで伸びると推測される。土層の全体的な傾きとしては、東西では、ほぼ水平で、南北では、北に向かって約５°で傾斜していき海へ没する。

二　遺　　構

遺構は(1)焼土及び炭化物集中部、(2)土壙、(3)集石土壙、(4)柱穴群が検出された。これらの遺構はII・III・IVの各層で検出されたが、II層で検出されたのは２区の焼土及び炭化物の集中部のみで、殆どの遺構はIII層とIV層の上面でそれぞれ検出された。

(1)　焼土及び炭化物集中部

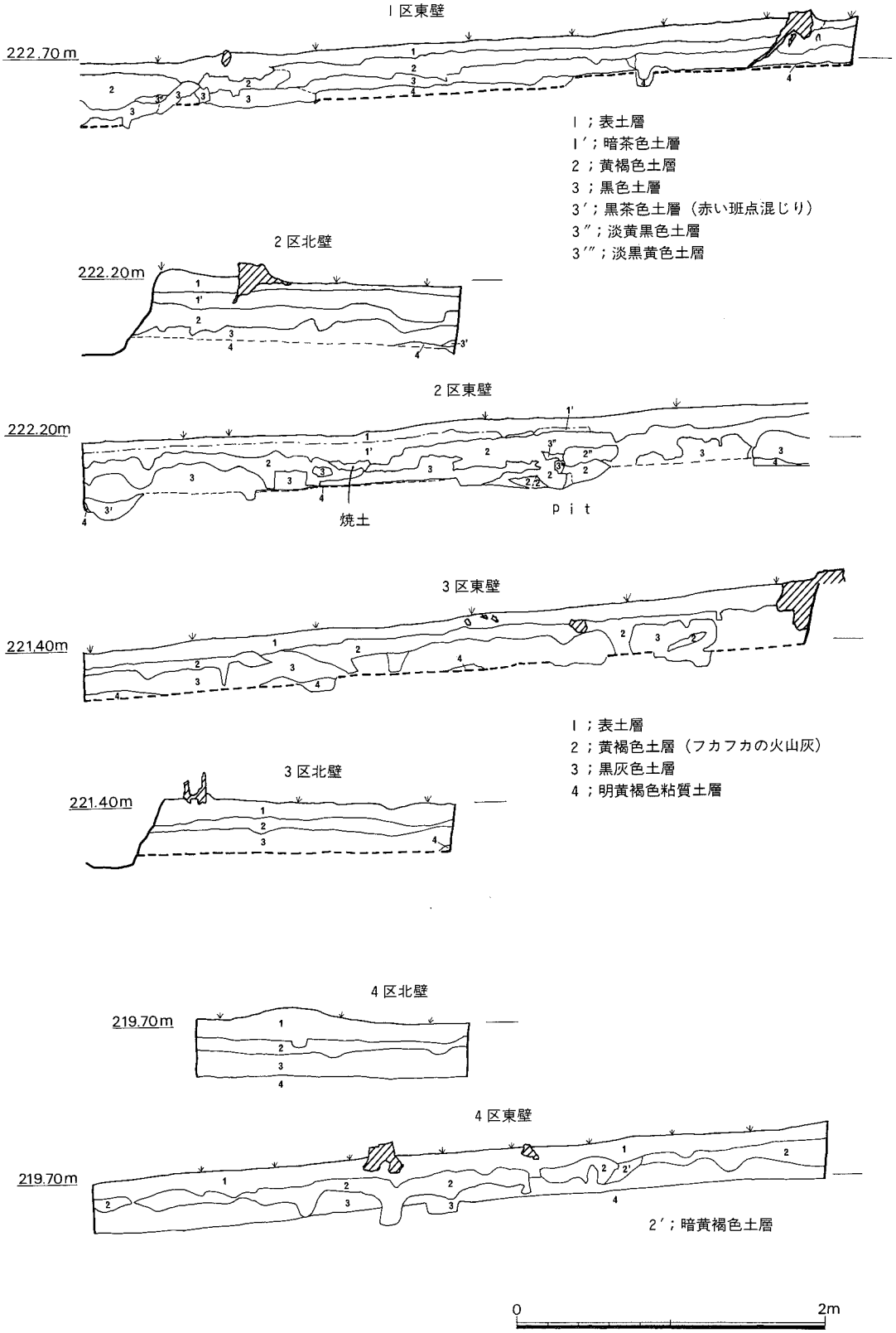
２区のII層中面で検出された。東壁そばの北寄りに位置する。恐らく調査区外の東側へ連続しているものと思われる。平面形は半島状に細長い。南北230cm、東西280cmの範囲に焼土及び炭化物が充塡していて、薄く堆積している。２層中面においては本遺構のみしか検出していない。

(2)　土　壙

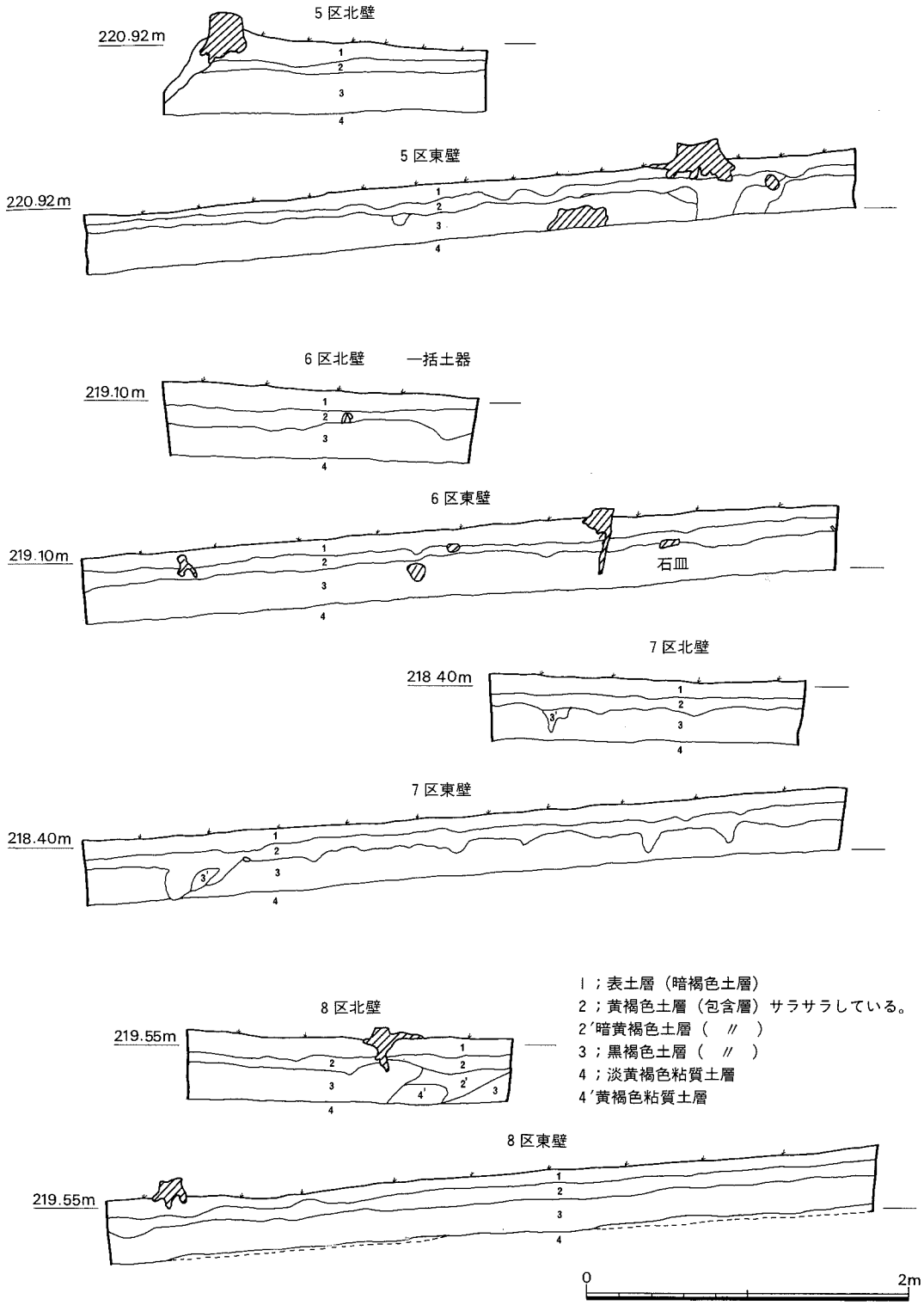
①　１号土壙（KDI）

３区のIV層上面にて検出した。平面形は長楕円形をしている。遺構検出面で長さ238cm、幅91cm、底の長さ196cm、同幅70cm、遺構検出面からの深さ28cmである。土壙内から山形や格子目文の押型土器、そしてすり石が２個出土した。なお、土が焼けた部分から押型文土器の底部が出土した。

②　２号土壙


1 区東壁
222.70 m
1 ; 表土層
1′; 暗茶色土層
2 ; 黄褐色土層
3 ; 黒色土層
3′; 黒茶色土層（赤い班点混じり）
3″; 淡黄黒色土層
3‴; 淡黒黄色土層
2 区北壁
222.20m
2 区東壁
222.20m
焼土
pit
3 区東壁
221.40m
1 ; 表土層
2 ; 黄褐色土層（フカフカの火山灰）
3 ; 黒灰色土層
4 ; 明黄褐色粘質土層
3 区北壁
221.40m
4 区北壁
219.70m
4 区東壁
219.70m
2′; 暗黄褐色土層
0
2m

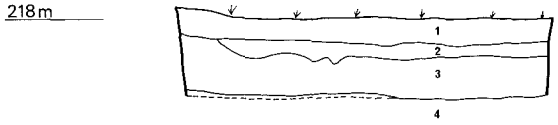
第 4 図　土層図①1/80


5 区北壁
220.92m
5 区東壁
220.92m
6 区北壁　一括土器
219.10m
6 区東壁
219.10m
石皿
7 区北壁
218.40m
7 区東壁
218.40m
8 区北壁
219.55m
8 区東壁
219.55m
1；表土層（暗褐色土層）
2；黄褐色土層（包含層）サラサラしている。
2′暗黄褐色土層（　〃　）
3；黒褐色土層（　〃　）
4；淡黄褐色粘質土層
4′黄褐色粘質土層
0
2m

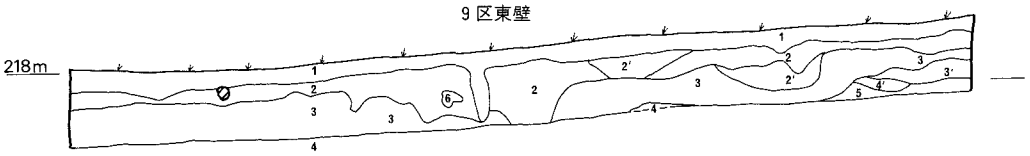
第5図　土層図②1/80

1；表土層
2；黄褐色土層（サラサラしている。）
2′暗黄褐色土層
3；黒褐色土層
3′；基本は黒褐色土で黄褐色土が一部混在する層
4；黄褐色粘質土層（地山で礫を含む）
4′基本的には4層であるが、黄色味と粘質が強い。

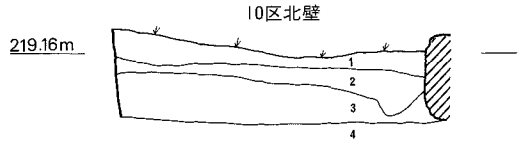
9区北壁



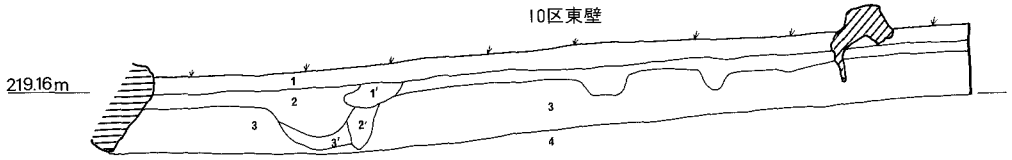
9区東壁



10区北壁

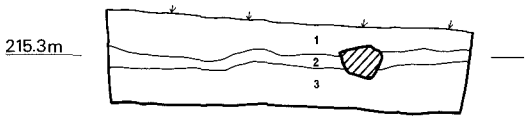


10区東壁

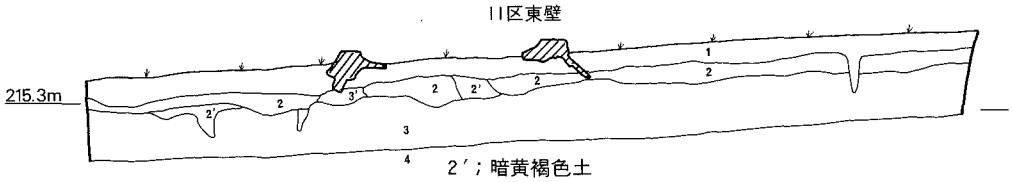


1′；暗黄褐色土（炭化物を含む。しまっている）。
2′；2層中に暗褐色粒子を含む。バサバサしてしまりが無い。
3′；淡黄褐色土。バサバサしてしまりが無い。

11区北壁

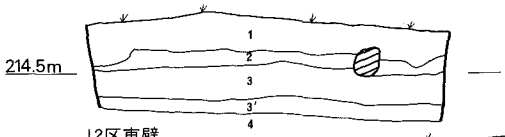


11区東壁

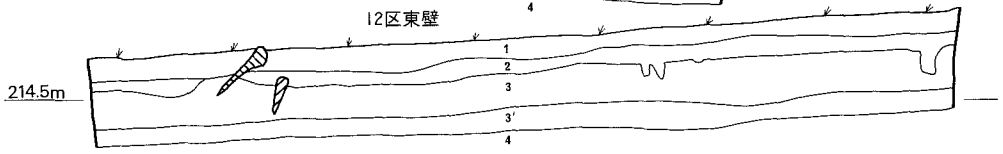


2′；暗黄褐色土
3′；淡黒褐色土

12区北壁

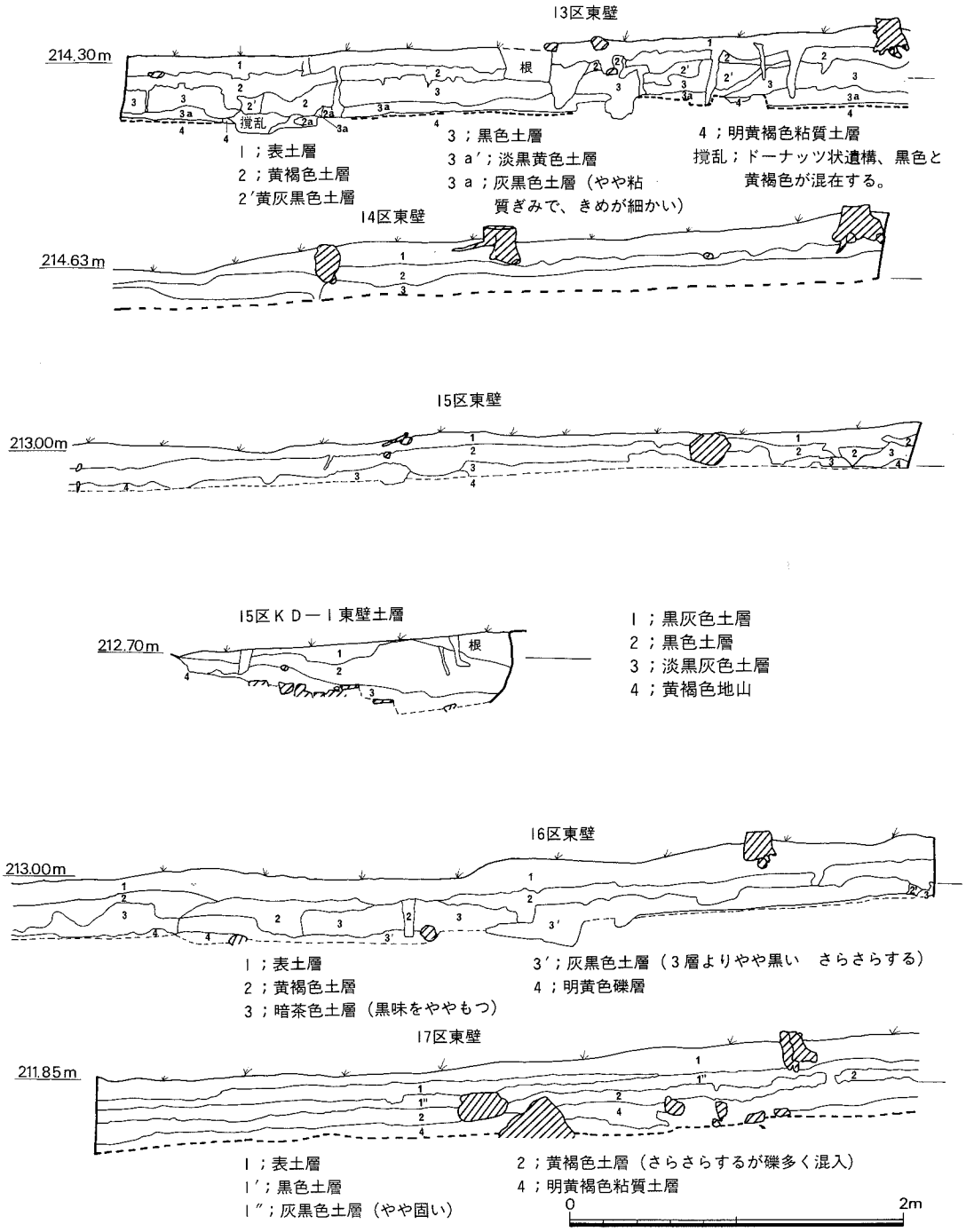


12区東壁

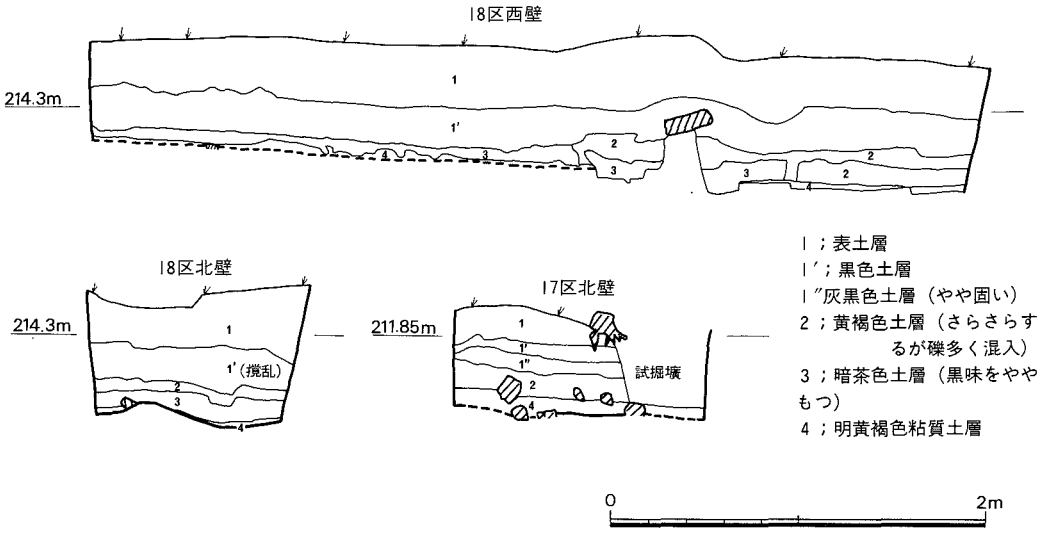


0　2m

第6図　土層図③1/80


13区東壁
214.30m
根
撹乱
1；表土層
2；黄褐色土層
2′黄灰黒色土層
3；黒色土層
3 a′；淡黒黄色土層
3 a；灰黒色土層（やや粘質ぎみで、きめが細かい）
4；明黄褐色粘質土層
撹乱；ドーナッツ状遺構、黒色と黄褐色が混在する。
14区東壁
214.63m
15区東壁
213.00m
15区ＫＤ－１東壁土層
212.70m
根
1；黒灰色土層
2；黒色土層
3；淡黒灰色土層
4；黄褐色地山
16区東壁
213.00m
1；表土層
2；黄褐色土層
3；暗茶色土層（黒味をややもつ）
3′；灰黒色土層（３層よりやや黒い　さらさらする）
4；明黄色礫層
17区東壁
211.85m
1；表土層
1′；黒色土層
1″；灰黒色土層（やや固い）
2；黄褐色土層（さらさらするが礫多く混入）
4；明黄褐色粘質土層
0
2m

第７図　土層図④1/80



第８図　土層図⑤1/80

６区のⅣ層上面にて検出した。２つの楕円形の土壙をつなぎ合わせたような形をしている。底部も二段底をしている。この二段底の深い方の底部の南端から山形押型文土器が出土した。また、この土器の北側には焼土が検出された。遺構検出面で長さ200cm、幅78cm、底の長さ190cm、同幅68cm、遺構検出面からの深さ、底の浅い方が５～10cm、深い方が19～26cm程である。

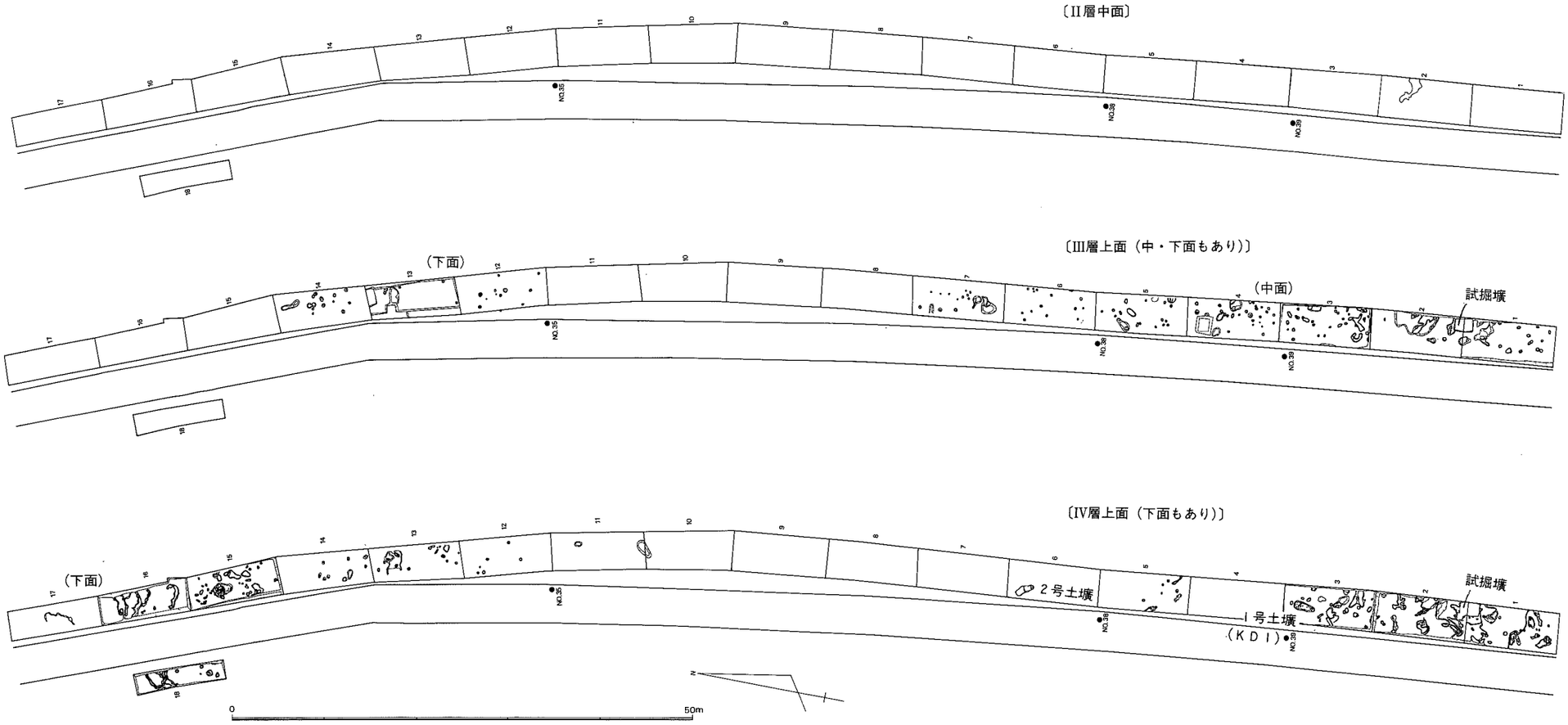
(3)　集石土壙

15区のⅣ層上面、中央部やや北寄りの所で検出した。平面形は洋梨形をしている。遺構検出面で長さ212cm、幅148cm、底の長さ152cm、同幅98cm、遺構検出面からの深さ75cmである。土壙内の集石は在地の雲仙火山の安山岩がほとんどである。他には山形押型文土器とともに石皿とすり石が数個出土している。

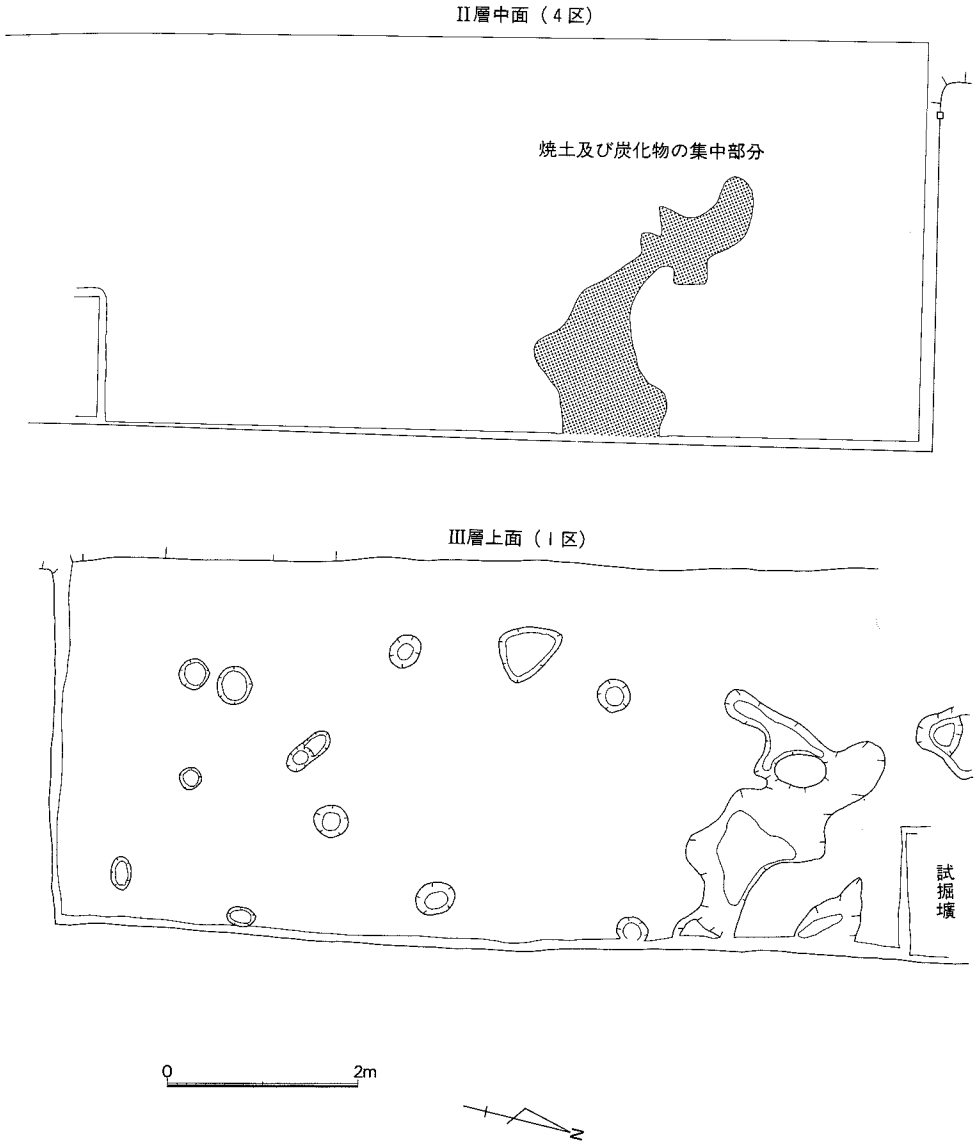
(4)　柱穴群

柱穴群はⅢ層上面（一部中面と下面もある）、Ⅳ層上面（一部下面あり）でそれぞれ層を異にして検出している。層毎の柱穴群は全体的に眺めてみるとまとまりがありそうで、まずⅢ層上面では１区～７区でまとまりそうである。そして８区～11区の遺構の空白地帯の北側に、12区～14区でもまとまりをもっている。

Ⅲ層では１区～３区が１つのまとまりをもち、５区にも小さなまとまりがある。そして、７区～10区の空白地帯の北側に11区～16区、18区のまとまりがある。Ⅲ層上面、Ⅳ層上面、いずれの層においても８～10区を中心として真中に遺構の形成されない空白地帯がある。

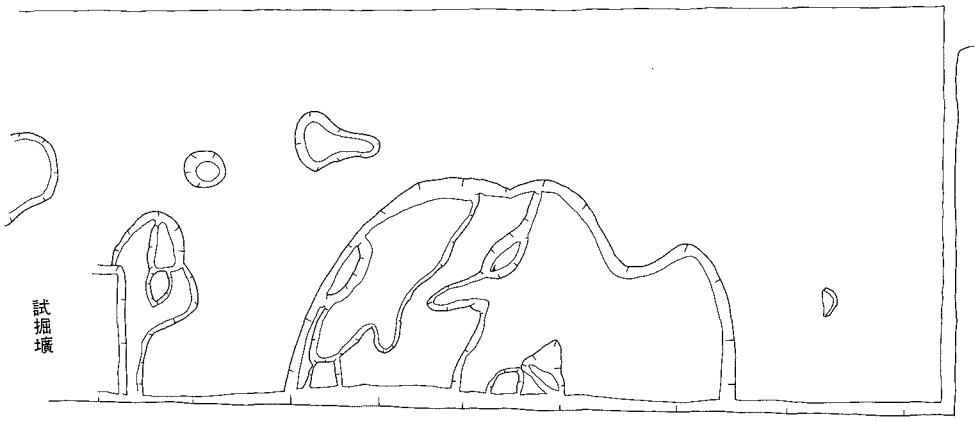


第9図　II・III・IV層面の遺構検出状況

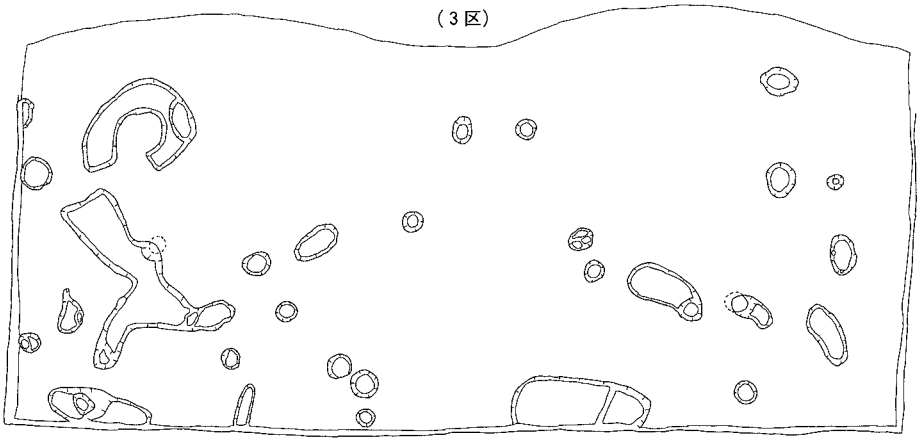


第10図　II層中面（4区）、III層上面（1区）1/80

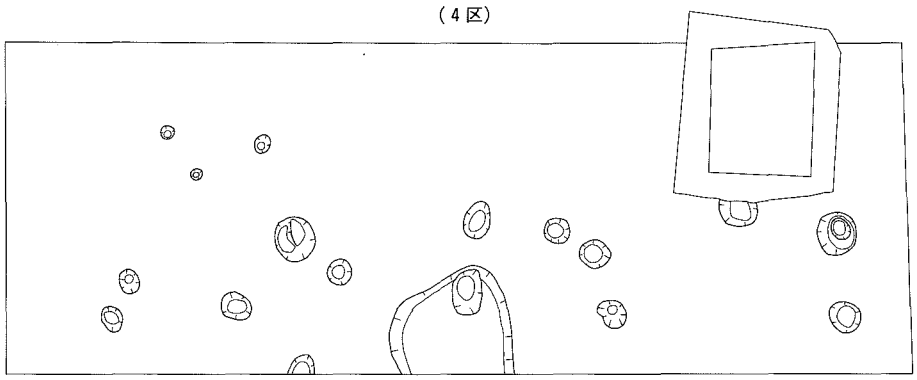
III層上面（2区）

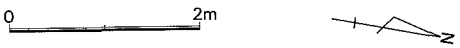


（3区）



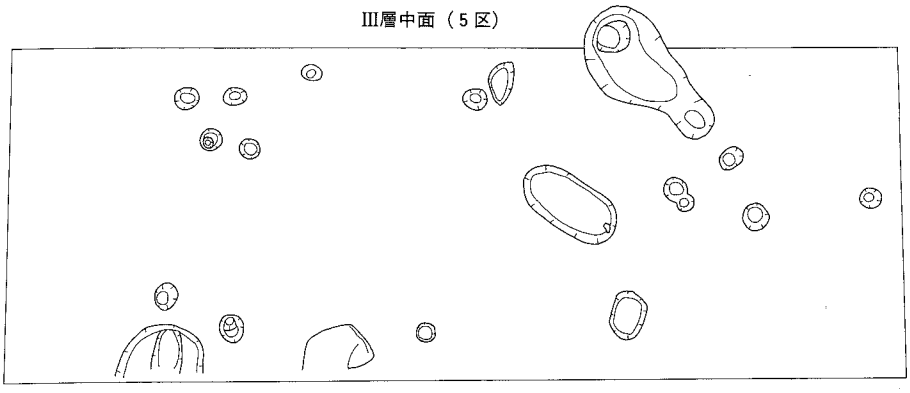
（4区）



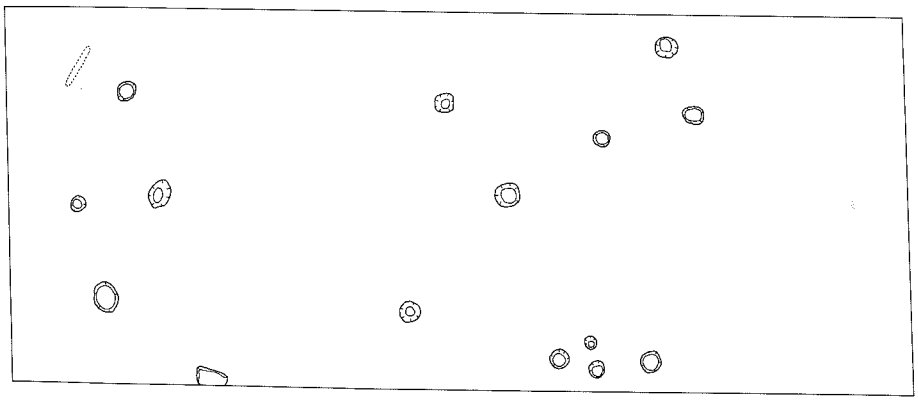


第11図　III層上面（2．3．4区）1/80

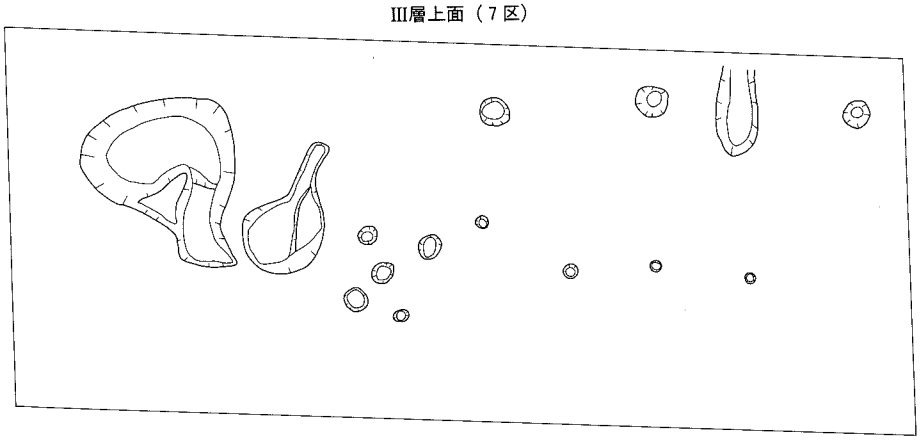
III層中面（5区）

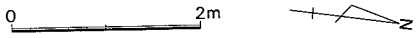


III層上面（6区）



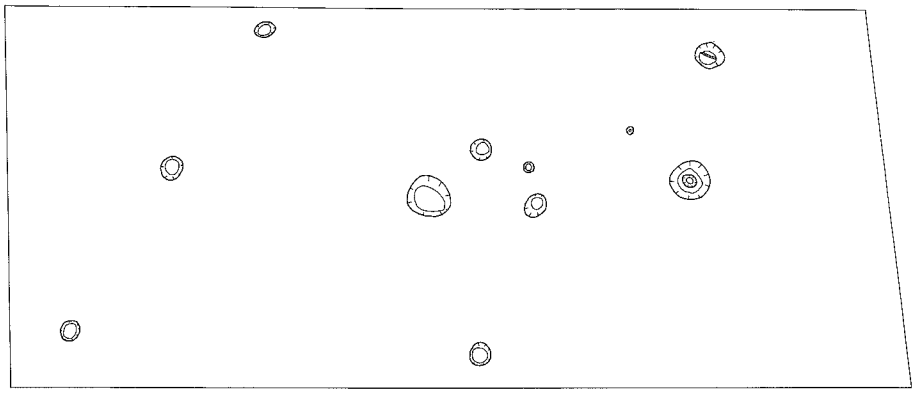
III層上面（7区）



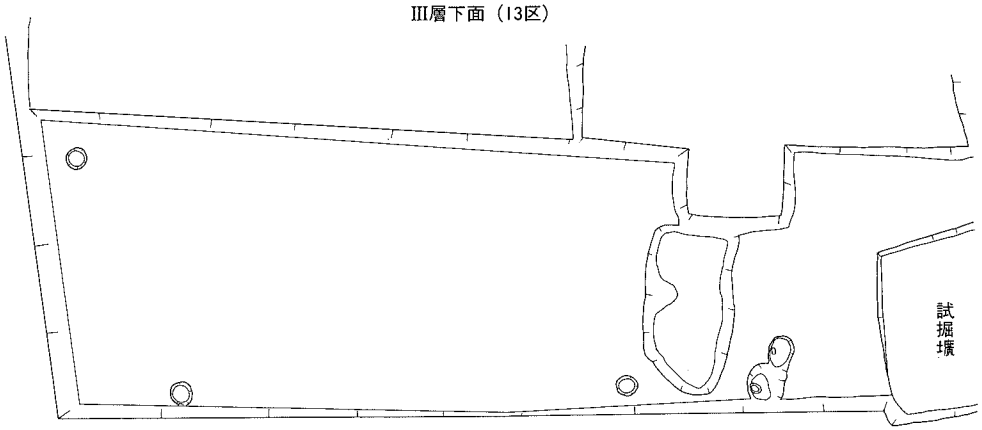


第12図　III層中面（5区）、III層上面（6、7区）1/80

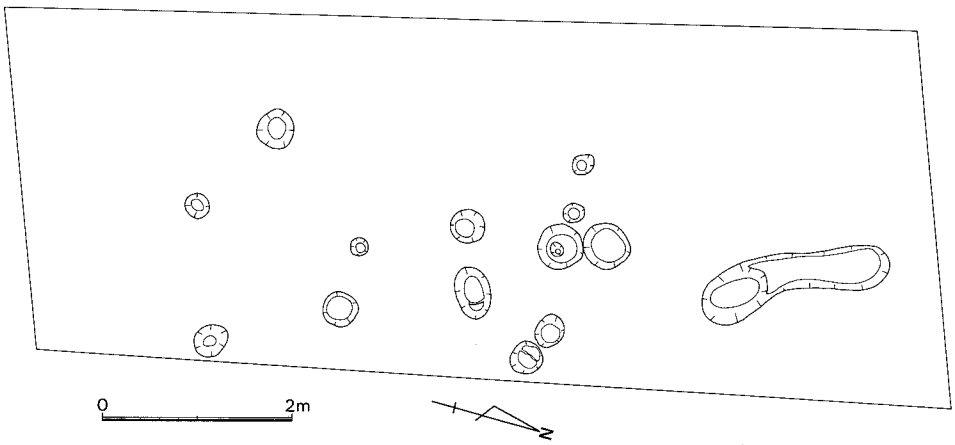
III層上面（12区）



III層下面（13区）

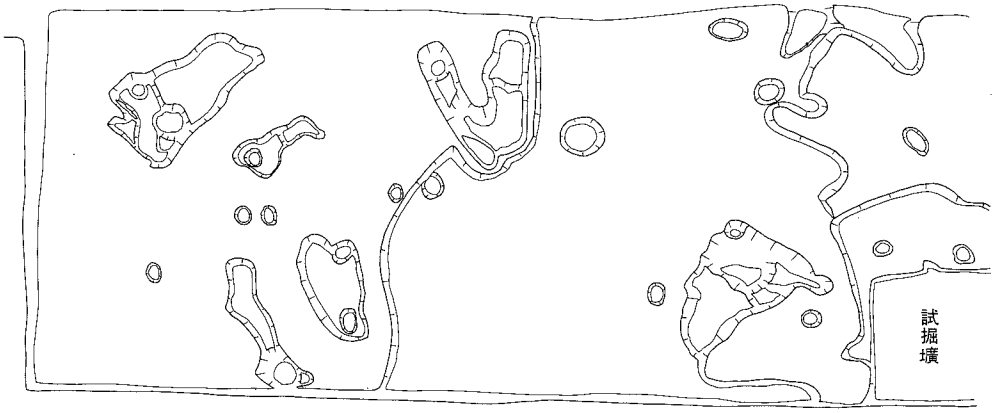


III層上面（14区）

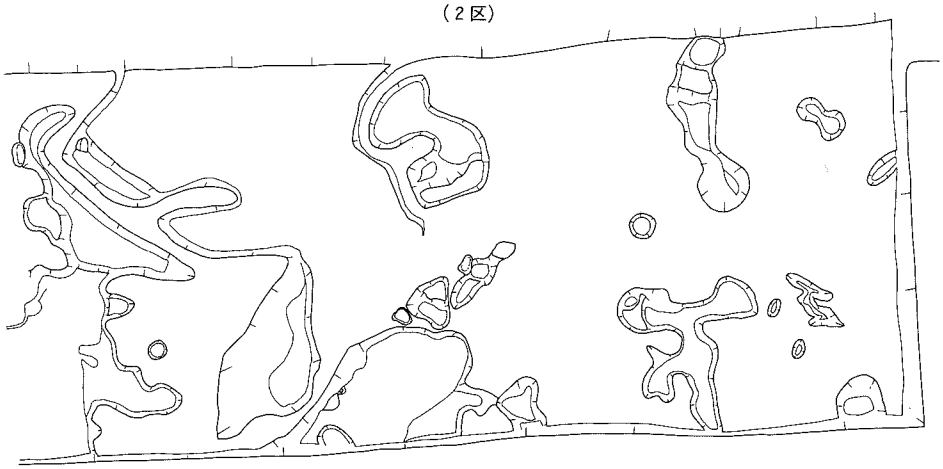


第13図　III層上面（12、14区）III層下面（13区）1/80

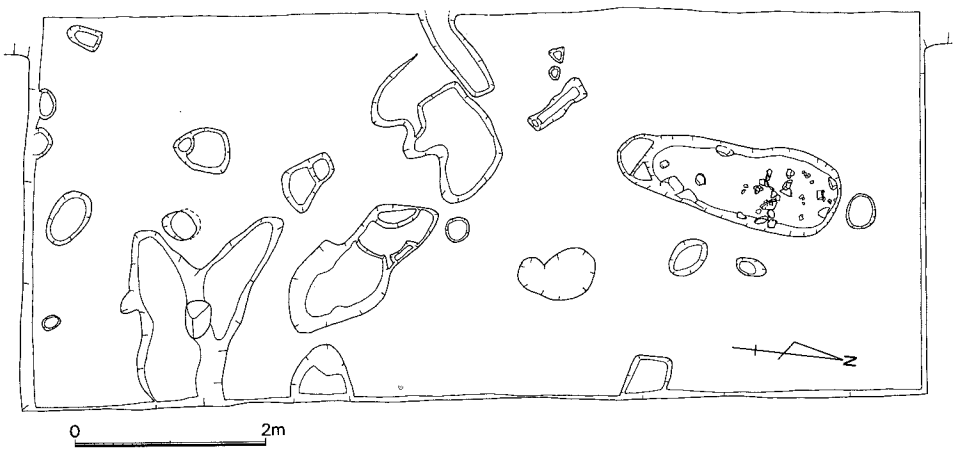
IV層上面（1区）



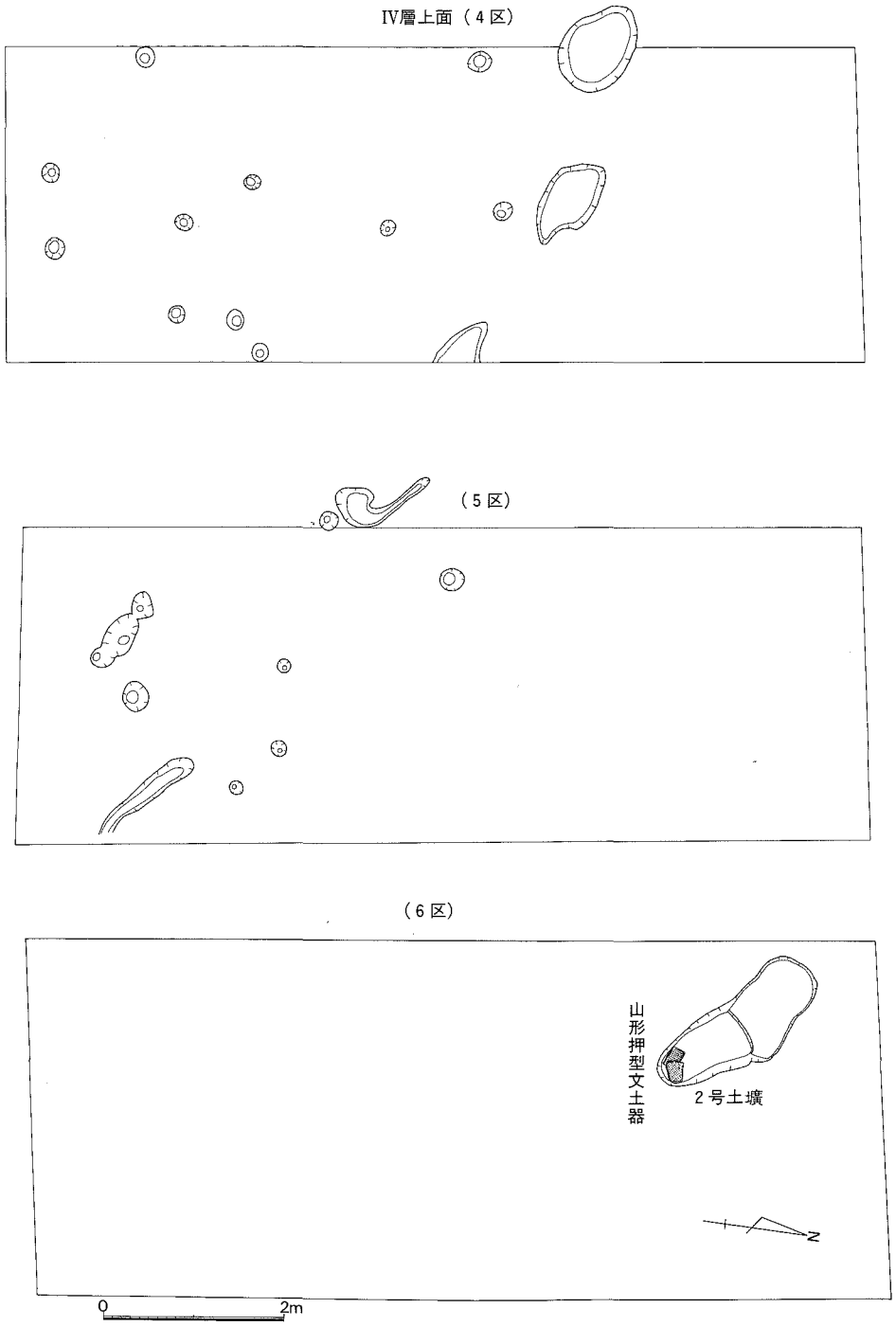
（2区）



（3区）

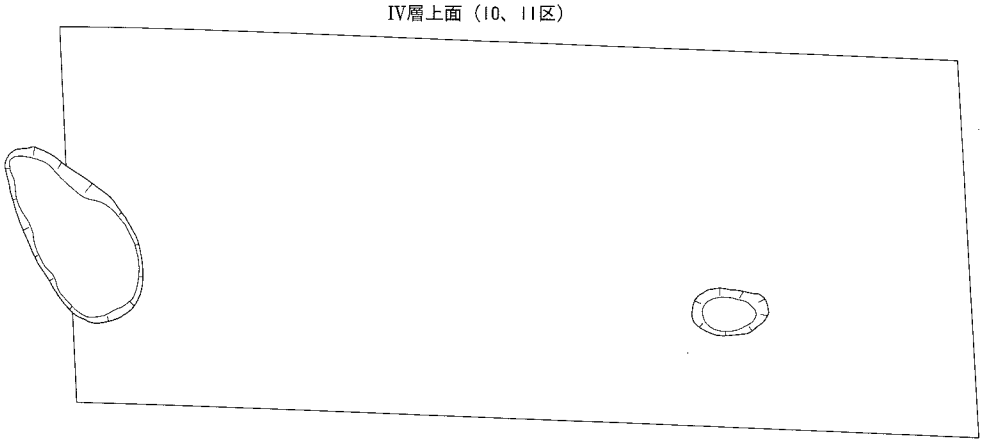


第14図　IV層上面（1、2、3区）1/80

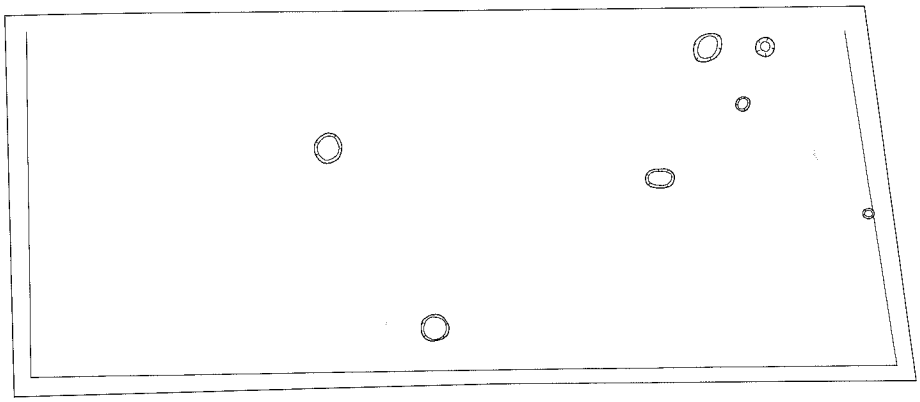


第15図　Ⅳ層上面（4、5、6区）1/80

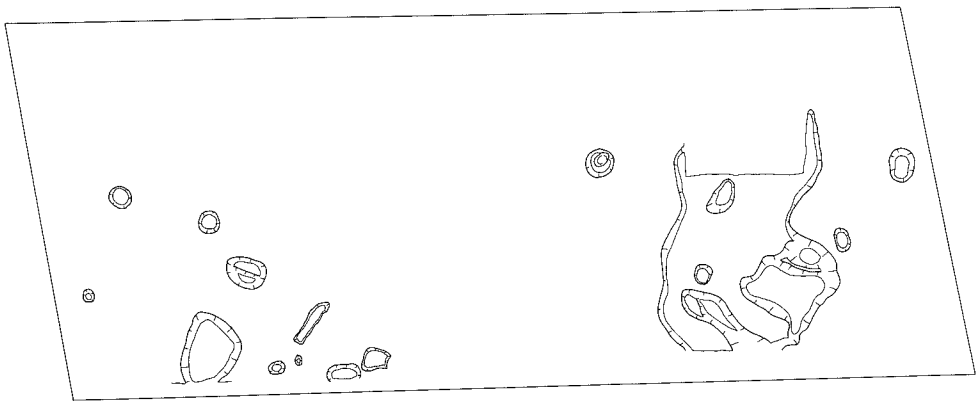
IV層上面（10、11区）



（12区）

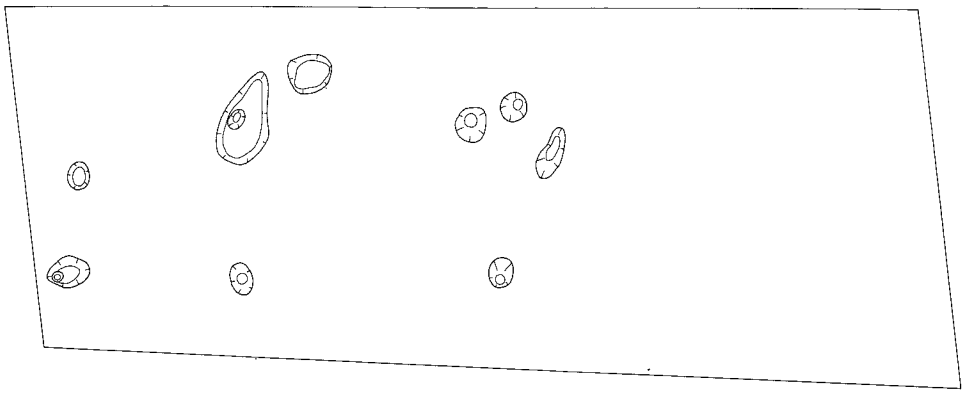


（13区）

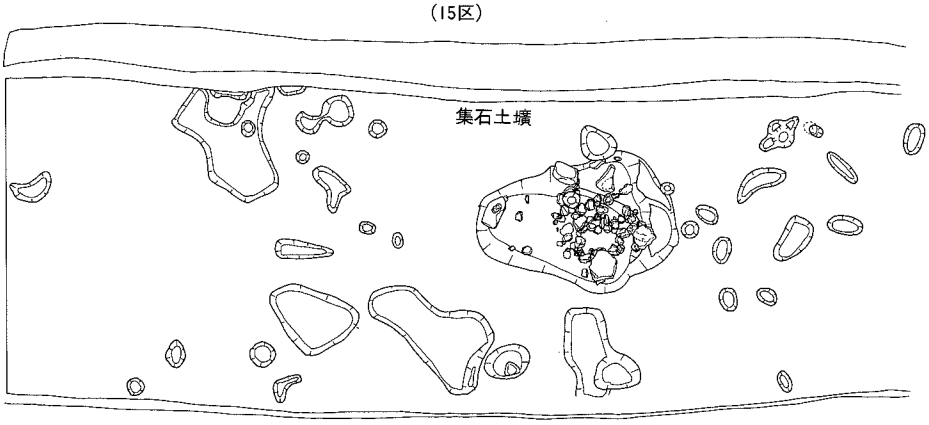


第16図　IV層上面（10、11、12、13区）1/80

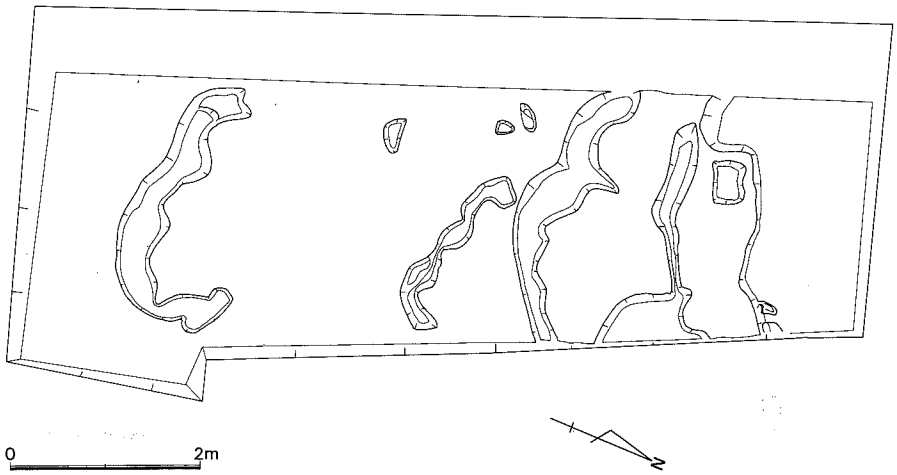
IV層上面（14区）



（15区）

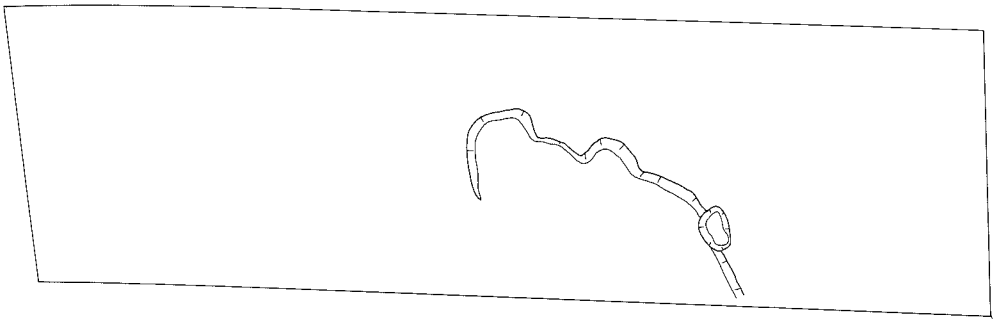


（16区）

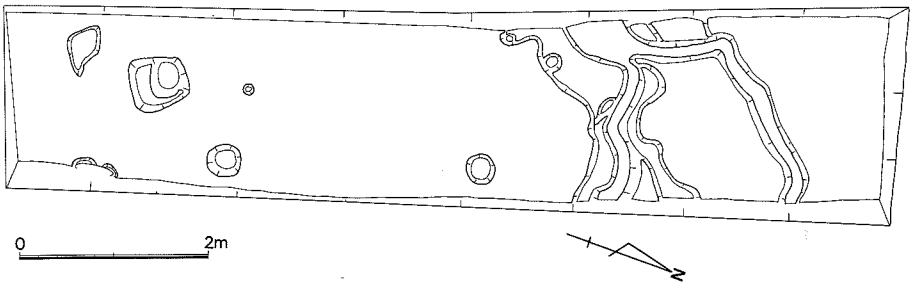


第17図　IV層上面（14、15、16区）1/80

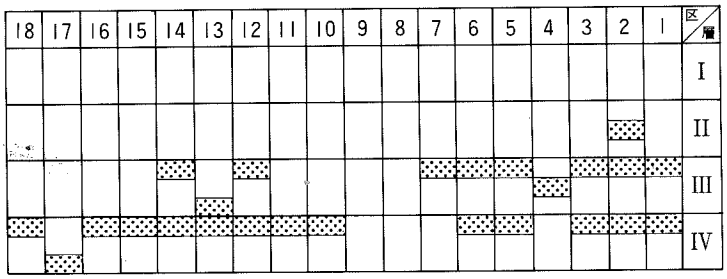
IV層下面（17区）



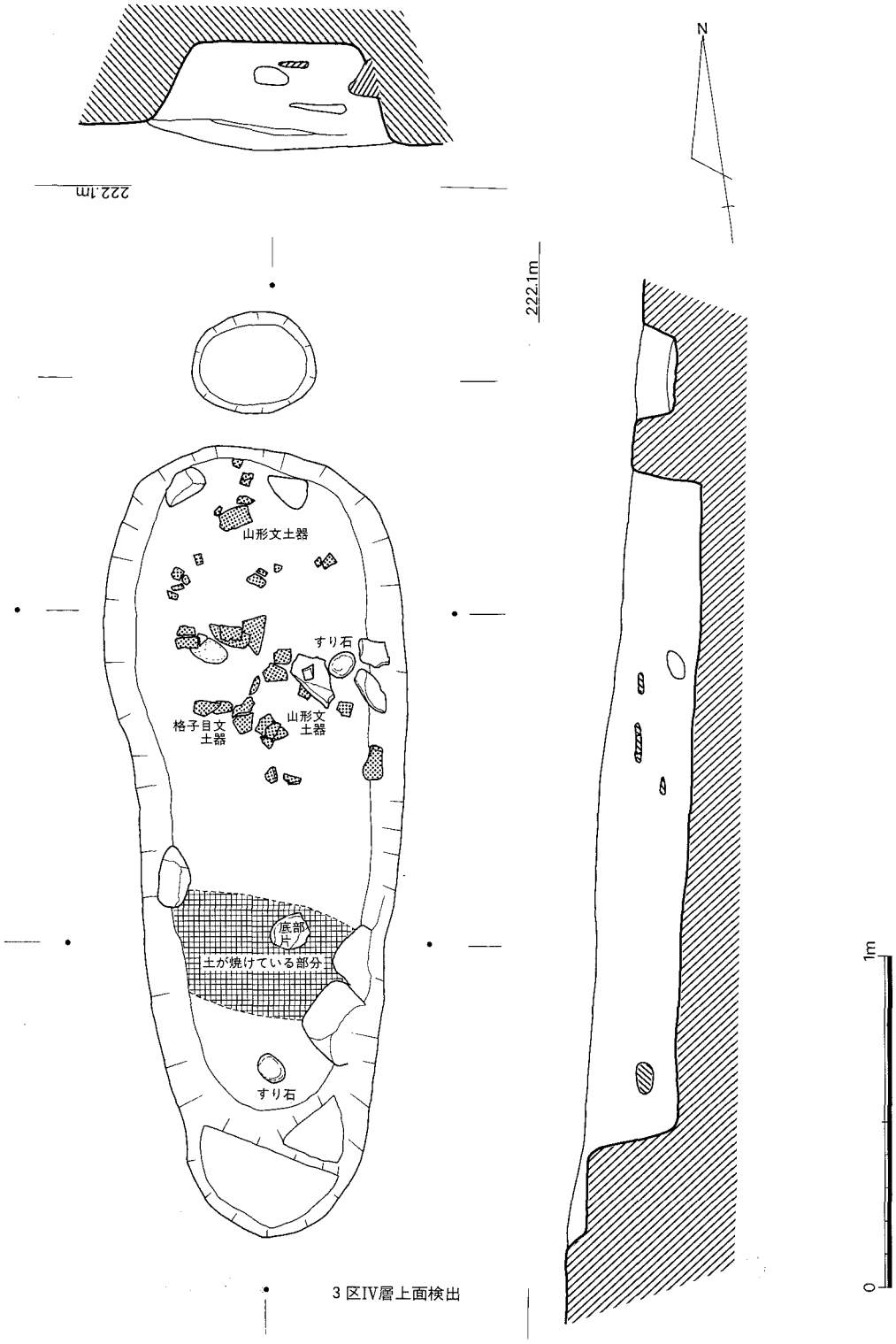
IV層上面（18区）



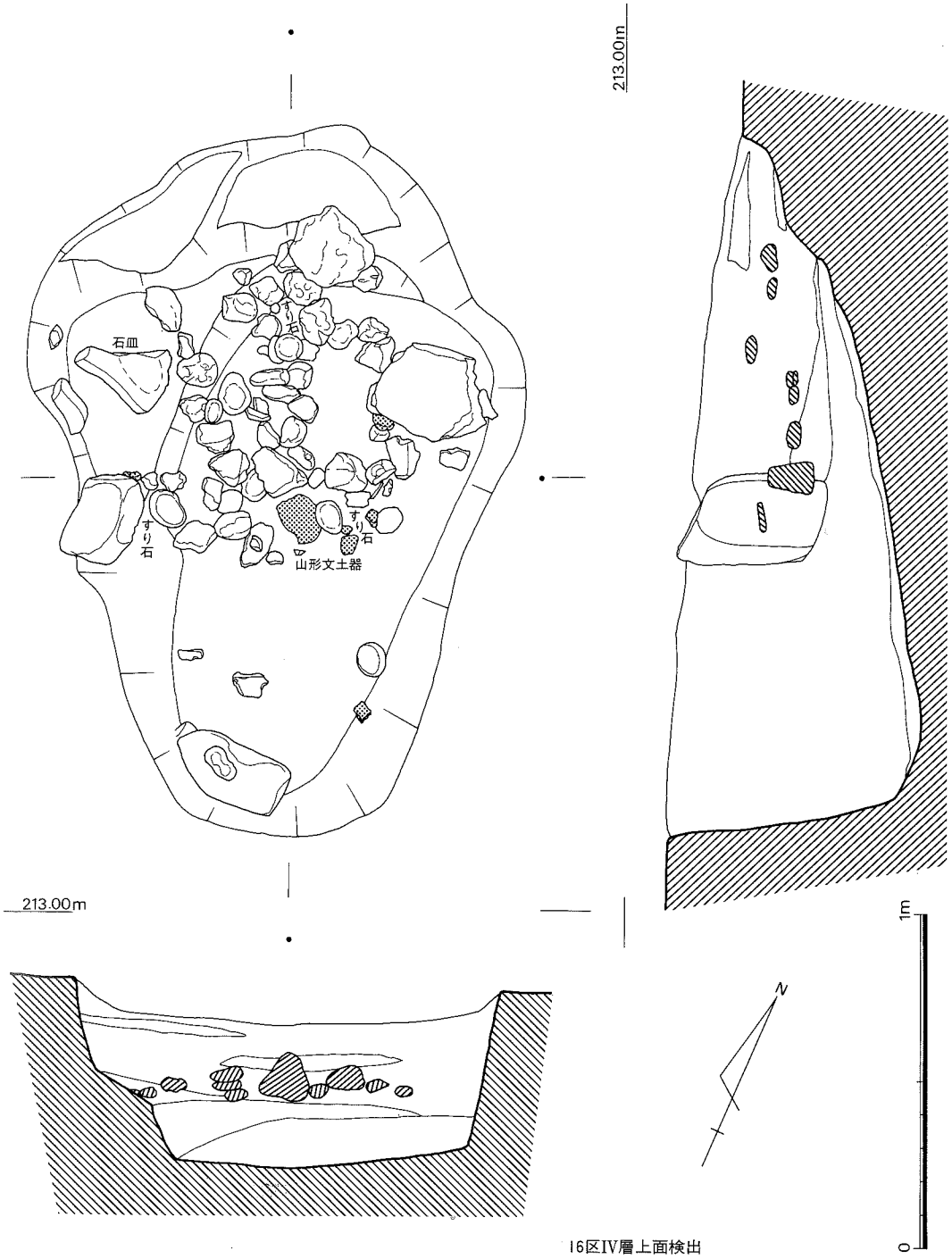
第18図　IV層下面（17区）IV層上画（18区）1/80



第19図　遺構検出層位概念図



第20図　Ｉ号土壙（ＫＤＩ）1/20

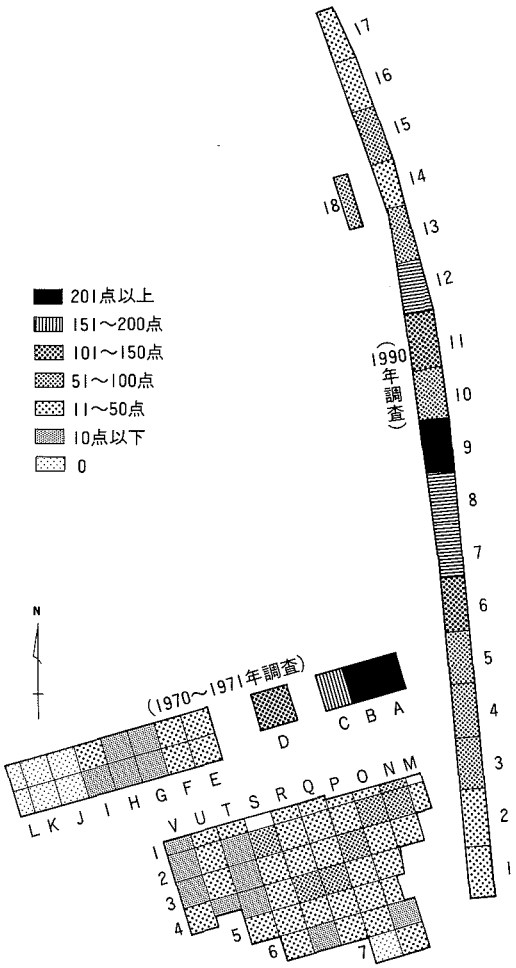


第21図　集石土壙1/20

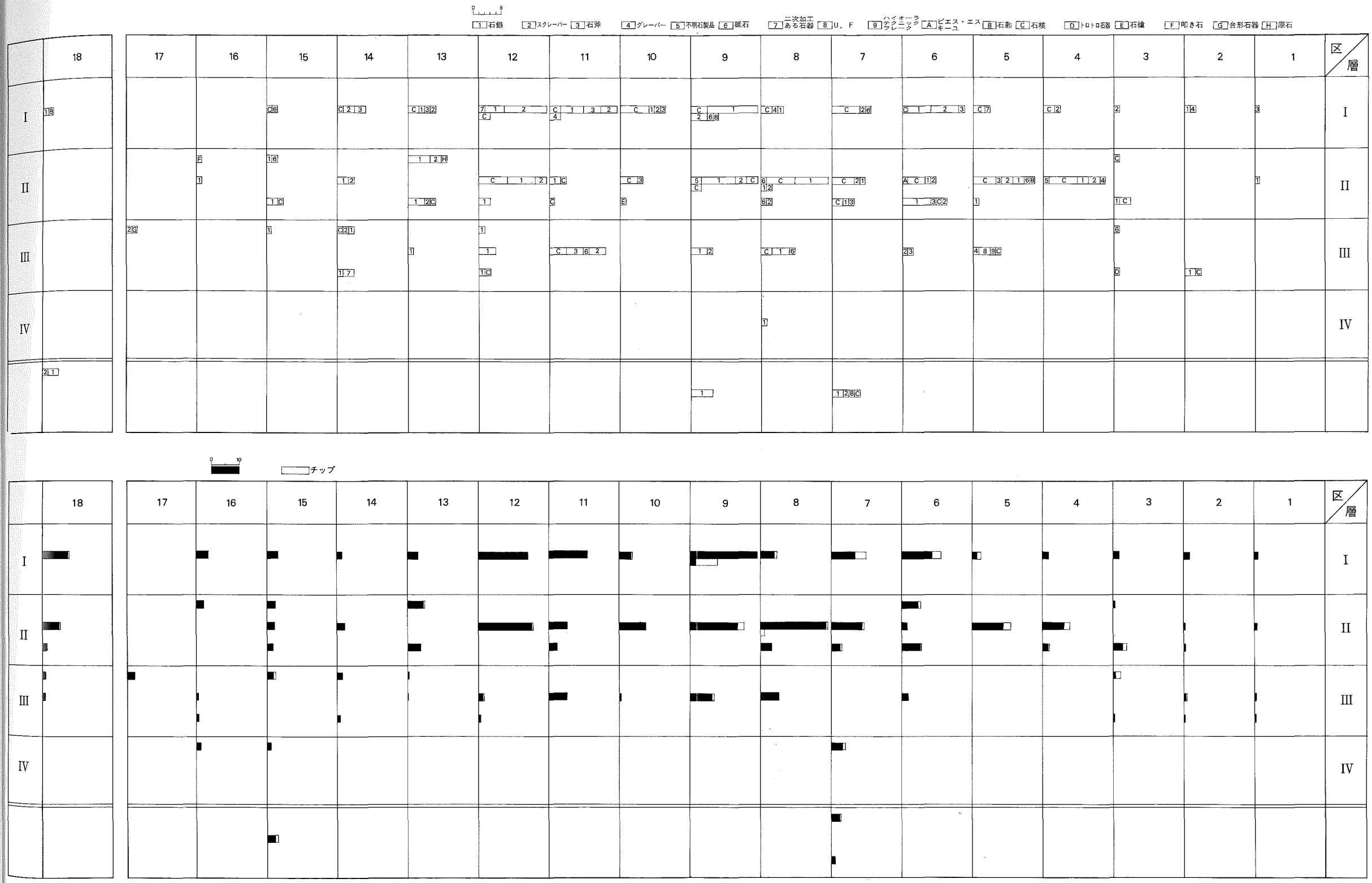
三　遺構の検出状況と遺物（石器）の出土状況

層毎の遺構の検出状況をみると(第19図)、3層上面においては8～11区が、遺構が検出されず遺構の空白地帯となっている。同様に4層上面においても7～9区が空白地帯であり、10、11区も検出された遺構はそれぞれ柱穴と土壙が一基ずつ検出されただけで、やはり遺構の検出状況としては希薄である。

ところが、石器の出土状況は2層（3層上面で検出した遺構の時期の包含層と考えられる）では、第2図をみてもわかるように遺物（フレークとチップ）の出土状況は、8、9、12区等から多く出土している。また3層（4層上面で検出した遺構の時期の包含層と考えられる）でも、8、9、11区から多く出土している。遺構の空白地帯に遺物（フレークとチップ）が多く出土するという状況を示している。なお、石器(tool)では、フレークとチップ程の偏在性は認められない（第23図)。



第22図　1970～1971及び1990年調査石器出土量図



第23図　各種石器出土内訳

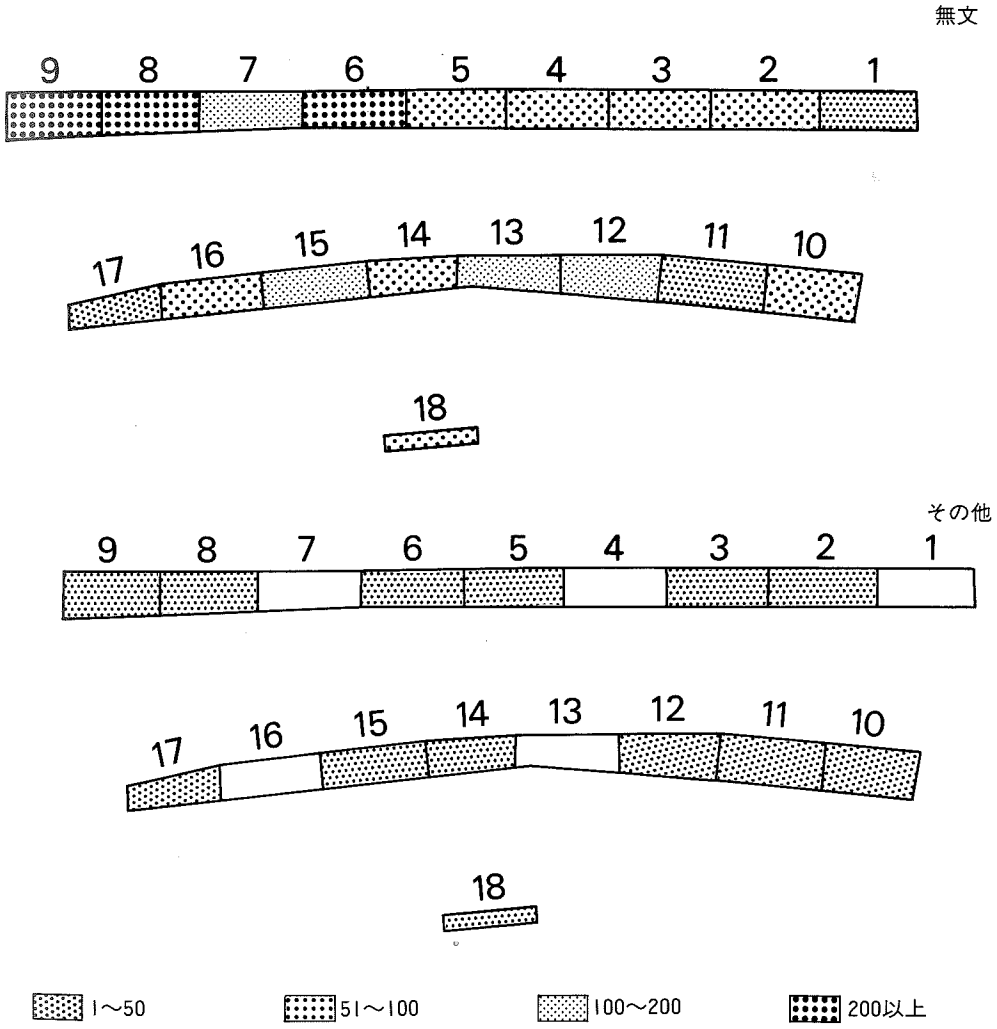
四．出土遺物

(1) 土　器

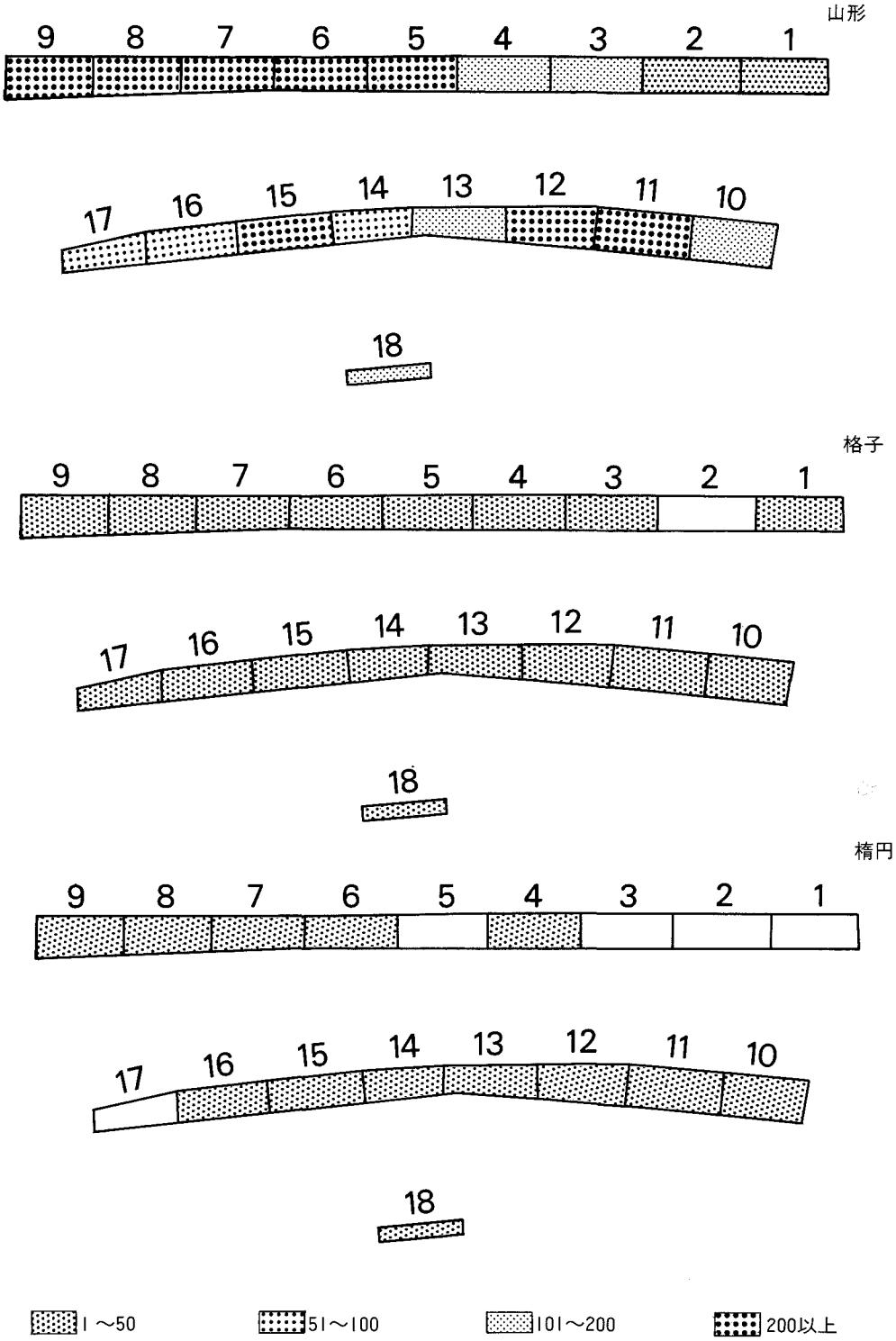
土器の分類，その他については前回報告した内容に準じて行いたい。

まず，今回出土した土器の総点数は約6,000点であり，その内訳は第１表～第２表のとおりである。ただこの中には細片のために文様の識別が困難な資料もかなり多い。

出土土器は時期的には早・前期と晩期の資料に大別される。ただ晩期の資料は30片程であるから，遺跡の中心は資料の殆どを占める押型文土器と無文土器の時期であるといえる。



第24図　調査区別土器出土状況



第25図　調査区別土器出土状況

なお，今回出土した土器の内，押型文土器の比率は約67%，無文土器の比率は33%であり，前回の調査での結果である押型文土器85%，無文土器９%の比率とは若干の相違が見られる。

調査区毎の遺物出土状況を図示すると第24図と第25図のとおりである。

５区から13区あたりまでに集中する傾向がある。とくに押型文の中でも圧倒的多数をしめる山形文はその感が強い。無文土器もほぼ同じような傾向があるが，楕円文，格子目文には集中する区域がなく，少量ながら万遍なく分布している。

前回の調査で最も遺物が集中した区域は，今回調査区の３区から６区あたりに相当する。(第26図)。今回の出土状況からその集中範囲がさらに標高が４m程低くなる北側部分まで及んでいることが確認され，結果的に遺跡の規模が想像以上に大きかったことを示している。

出土遺物はII層とIII層に集中している。しかし，III層中出土遺物はその上部に限定される傾向があり，本来この層位中に含まれていたものかの断は出来ない。II層とIII層中出土の土器に基本的な差は感じられないが，前回行ったII層とIII層中土壌の花粉分析では環境に相違があることが報告されておりそこに若干の時間差も感じられる。

当該地は大きなミミズが多く，またそれを餌にするもぐらも多い。もぐらの穴に落ち込んでいた土器片も何度か散見されており，遺物の移動にこれらの小動物が関与している可能性も考

第26図　1970～1971年調査遺物出土状況

えておく必要があろう。

掲載資料の説明の前に，便宜上土器を以下のⅣ類に分類しておく。

Ⅰ類：押型文土器

Ⅱ類：撚糸文，縄文土器

Ⅲ類：無文土器

Ⅳ類：その他の土器

また，さらに器形的にはⅣ類の資料を除き，以下の6種類に細分しておく（第27図）。

A　口縁部から直線的に内傾径しながら底部にいたるもの。

B　基本的にはAと同じであるが，胴部上半で一度ゆるやかに外部に張り出すもの。

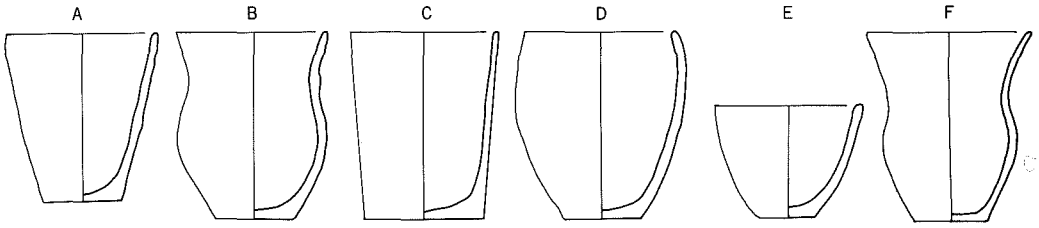
C　口縁が直口し，全体が円筒形に近いもの。

D　口縁から一度外側へふくらみ，以下すぼまりながら底部へ移行するもの。

E　口縁から内湾しながら底部に移行するもの。やや小型の椀になるものと思われる。

F　口縁が外反し，直線的な胴部に移行するもの。

以上であるが，本遺跡においては底部は全て平底であり，丸底や尖底は存在しない。



第27図　深鉢形態分類図

第1表　出土土器統計表①

		押型文						無文		その他	
		山形		格子		楕円					
		口縁 胴	底辺	口縁 胴	底辺	口縁 胴	底辺	口縁 胴	底辺	口縁 胴	底辺
1区	表土	7						20	2	1	
	II層	22		1				15		2	
	III層	4						6			
2区	表土							5			
	II層	2	2					68		1	
	III層	3						11			
3区	表土	38	1					13			
	II層	116		7				41	1		
	III層	26		1				6			
	KD1－7	9	1	2				5			
4区	表土	21									
	II層	88	4	12		1		58			
	III層	13						6			
5区	一括	13	1					14			
	II層	181	4	17				63	6	1	
	III層	4						1			
6区	表土	23						29	1	1	
	II層一括	6				1					
	II層	227	1	20		7		115	9	2	
	III層	106	4	9		1		51	1		
7区	表土	34				1		27			
	II層	148	17	4	2			144			
	III層							13			
	KD1	18									
	KD2	4									
	KD3	2									
	KD4	5									
8区	I層	2				1			5	1	
	II層	259	8	36		1		162		5	
	III層	80	3	9				81	3	1	
	IV層										
9区	表土	19	1								
	I層	72	1	2	1			1	1	2	
	II層一括	31	1					8			
	II層	227	7	5		1		179		2	
	III層	125	3	1		2		42	2	3	
	KD1	43		7		1		13			
	KD2	3						25	1		
	KD3							2			
	KD4							3			
	小計	1,981	59	133	3	17		1,227	32	22	

第2表　出土土器統計表②

		押型文						無文		その他	
		山形		格子		楕円					
		口縁 胴	底辺	口縁 胴	底辺	口縁 胴	底辺	口縁 胴	底辺	口縁 胴	底辺
10区	Ⅰ層	3	1						1	1	
	Ⅱ層	93	5	6		3		51			
	Ⅲ層	66		9		4		42		1	
11区	表土	61	1	3		3				1	
	Ⅱ層	175	3	24		9		1	2	1	
	Ⅲ層	218	6	12		5			1		
12区	表土	34		3		2		52		1	
	Ⅱ層	181	7	14		10	1	107	2		
	Ⅲ層	30		2				19			
13区	表土	12		2		2		14	1		
	Ⅱ層	123	4	12		6		83			
	Ⅲ層	48	3	4		1		36			
	ドーナツ(Ⅱ)							3	1		
14区	表土	24		1		1		8			
	Ⅱ層	17		3		1		30		1	
	Ⅲ層	21		1				20			
15区	表土	24									
	Ⅱ層	126	5	1		1		58		1	
	Ⅲ層	43	1	1				12			
	Pit 1	16									
	KD1(中層)	7						10	1		
	KD1(上部)	4						12			
	KD1(Ⅳ上)	13	1					13			
16区	表土	19	2	1				8			
	Ⅱ層	36		1		5		20			
	Ⅲ層	8						7			
	Ⅳ層	23		1				17			
17区	Ⅱ層一括							2			
	Ⅱ層							5		1	
	Ⅲ層	12						2			
	Ⅳ層	47	1	1				23			
18区	表土	28				1		4			
	Ⅱ層	50	2					62			
	Ⅲ層	11						1			
	攪乱	10		1		2		8			
	小計	1,583	42	103		56	1	730	9	8	
	合計	3,564	101	236	3	73	1	1,957	41	30	
	総計	6,006									

Ⅰ類　押型文土器

Ⅰ類押型文土器は文様の相違から山形文，楕円文，格子目文の３種類にわかれる。

Ⅰ－１類　山形文（１～69）

山形文を施文した資料も，器形別分類基準によってさらに６類に分けることが可能である。

Ⅰ－１Ａ類（１～49）

１は６区のピット内の一括資料である。底部を欠損するだけで，器形の全容がほぼ分かる。復元口径27cm，器高26cmで，口縁部からほぼ直線的に底部に移行する。中型の深鉢である。色調は茶褐色で焼成は良好。胎土に雲母と角閃石を含む。押型は，口縁付近は横方向，胴部は右斜め下方向に施文する。

２，３，４，５，６は復元口径が30cmから36cmまでの大型の深鉢である。暗茶褐色か暗黄褐色を呈し，器壁が1.2cm程と厚く，胎土に雲母を含み，内面にナデ調整を施すのが共通した特長である。なお，６は施文原体の直径が0.7cm，長さが3.5cmに計測できる資料である。２，４は６区の２層出土の一括資料であり，６は９区の２層中資料である。

７～11は復元口径が16cmから19cmの小型の深鉢資料である。明褐色か暗黄褐色で，焼成は比較的良好であり，胎土に雲母と角閃石を含む。内面調整はナデを行い，外面施文は口縁部付近は横方向で胴部は斜め方向が一般的であるが，９は右上がりの資料である。これらの資料は全て２層の出土資料である。

12以下は細片であるため口径が復元出来ない。12は黄褐色で焼成は良好，外面の施文も丁寧である。施文原体の直径は不明であるが，長さは3.5cm程に計測出来る。

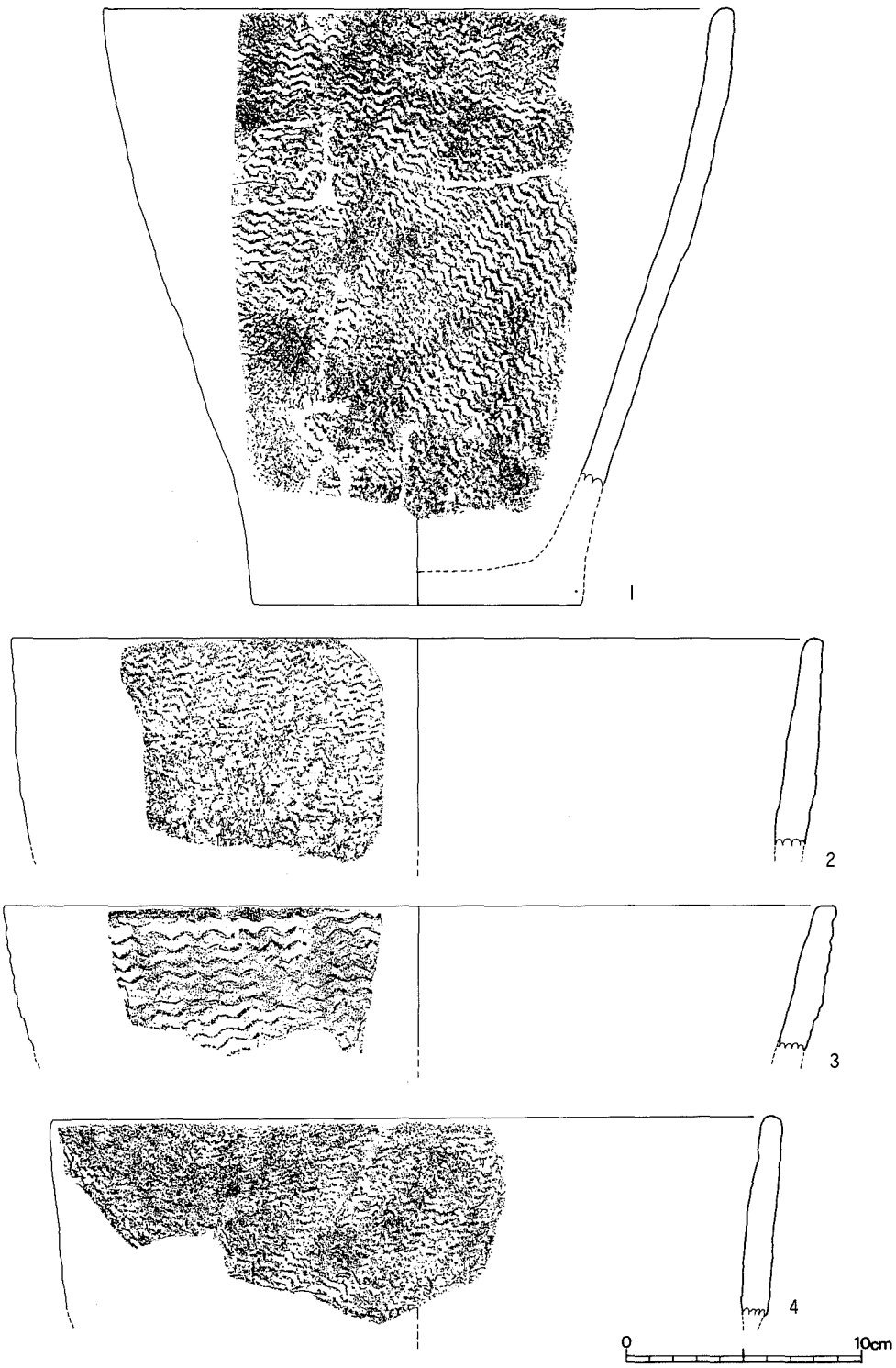
16は茶褐色で，焼成は良好。胎土に雲母を含む。口唇部は平坦で，施文には間延びした山形文を施している。内面にはナデ調整を施す。17，18も間延びした山形文を施す例である。口縁部付近は横方向，胴部付近は右下がりの施文を行う。これらの資料は２層下面出土である。

20，21は山形文の線が細いタイプである。共に暗褐色で胎土に雲母と角閃石を含む。23は施文の線が太いタイプである。暗褐色で胎土に雲母と角閃石を含む。口辺部にススが付着する。

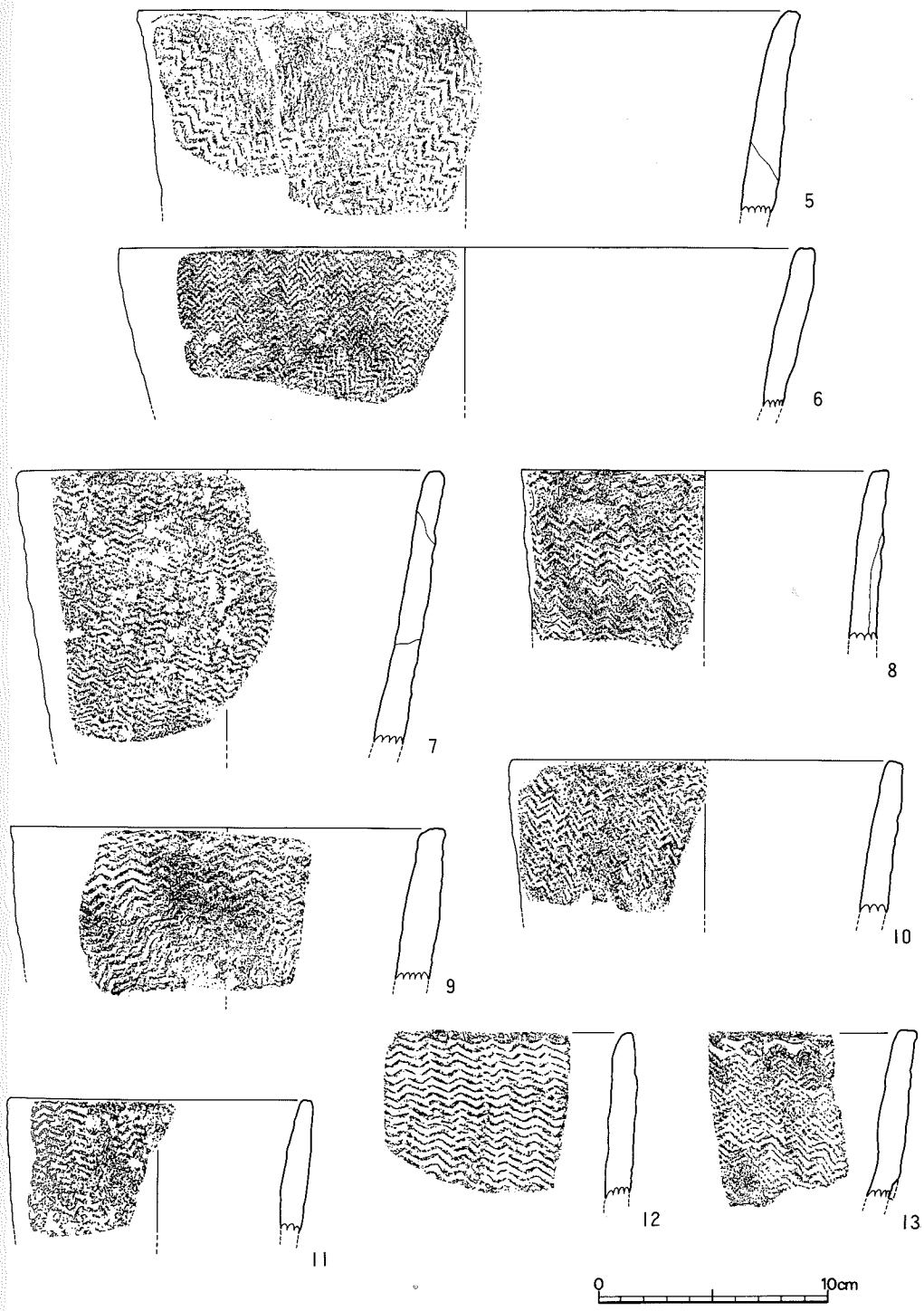
24は内外面に山形文を施文する例である。山形文で，このような施文例を有するのはこの資料の他では58，69の２例だけであり，極めて珍しい。24は12区２層中から出土している。27はあまり文様が明瞭でない山形文であるが，口縁直下に連続した刺突文を施している。刺突は外側から行い，貫通していない。茶褐色で焼成は良く，胎土に雲母を含む。内面はナデ調整である。４区の３層から出土した。

28は口縁下の４cm程の無文帯を持つ例である。この資料の他には51があるだけで，やはり珍しい施文例であるといえよう。茶褐色で焼成は良好。胎土には雲母と角閃石を含んでいる。

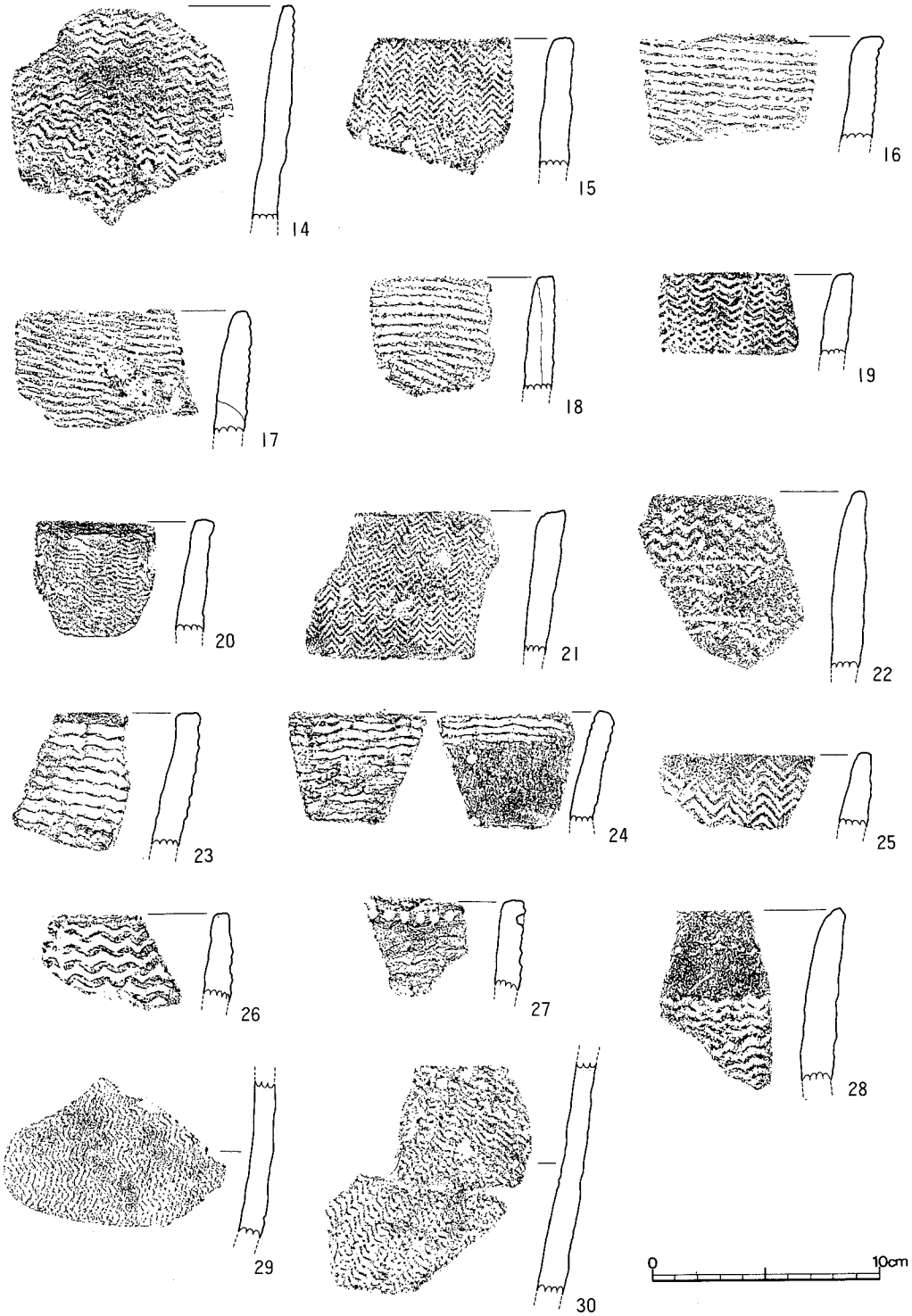
29～32は胴部である。施文方向は右斜め方向が多いが29には縦位のものが見られる。いずれも２層中資料であるが，31は15区の土壙内から出土した。



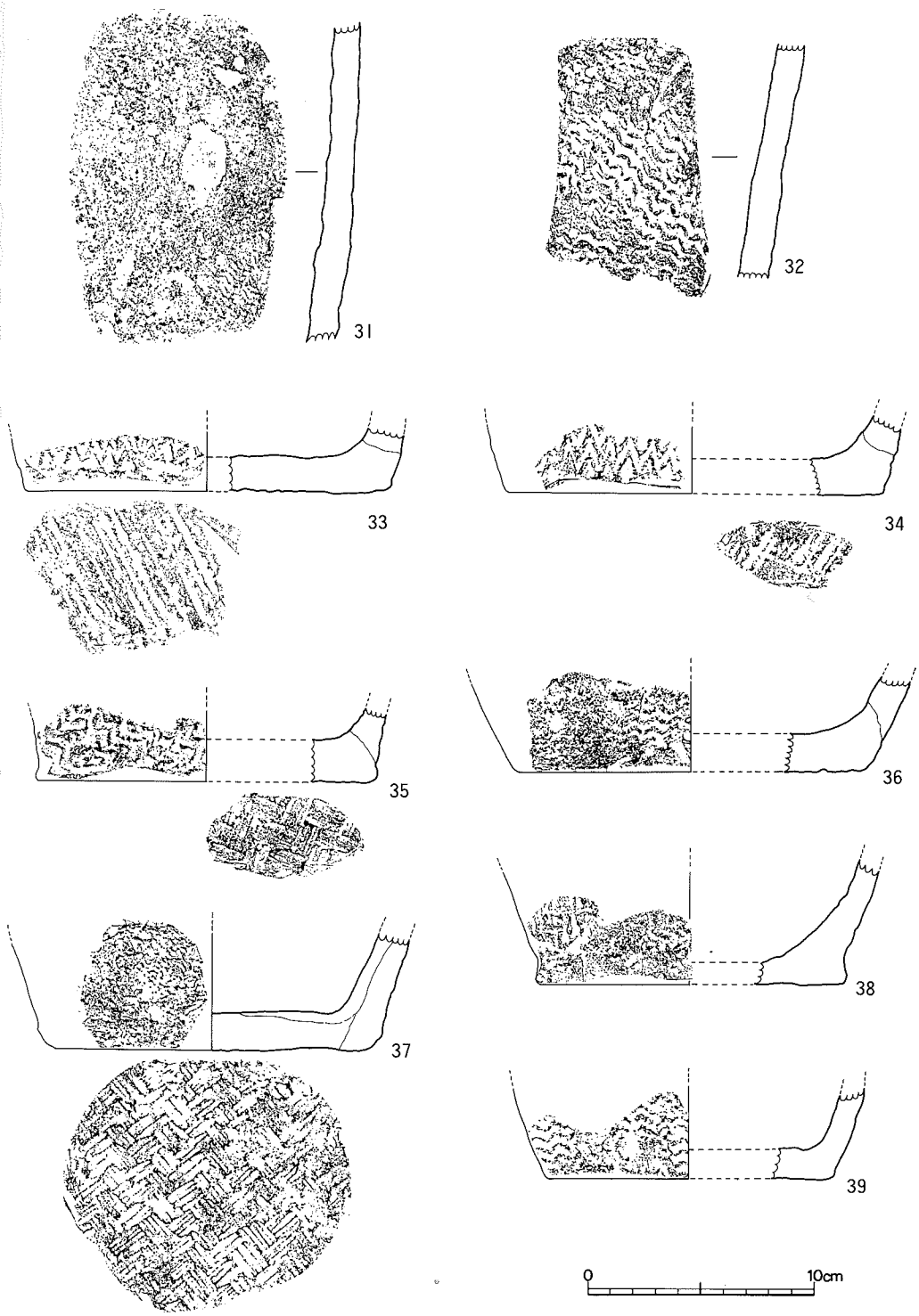
第28図　Ⅰ－ⅠA類（山形）実測図①



第29図　Ⅰ―ⅠA類（山形）実測図②



第30図　Ⅰ－ⅠA類（山形）実測図③



第31図　Ⅰ－Ⅰ類（山形）実測図④

33～49は底部の資料である。復元可能な底径は8～11cmのもの（38，46，48）と12～17cmのものに大別される。

33は復元径が16.2cmの底部である。最下部まで施文を施している。底には平行沈線の圧痕が見られる。茶褐色で胎土に雲母と角閃石を含む。焼成は良い。

35，37，42は底に網代状の圧痕が見られる資料である。35は復元径が15cmで，淡赤褐色を呈する。雲母と角閃石を含み，外面の施文は最下部まで及ぶ。37は底部は完形で径15cmを計る外面は最下部まで施文するが，あまり明瞭ではない。底には明瞭な網代状圧痕が観察される。土器の製作にあたっての下敷圧痕と思われる。6区の3層から出土した。42も同じ文様の圧痕であるが，ナデによって大部分が消されている。

41は復元径が13cmで，底には不規則な格子目状の圧痕が見られる例である。48は底に木の葉脈の圧痕が認められる資料である。復元径は10cmで，色調は暗褐色。胎土に雲母を含む。

47は径は復元出来ないが，施文が最下部に及ぶ例である。内面にコゲが付着している。

49も施文が最下部に及ぶ例である。土器の製作にあたっての，粘度の接合状態と文様の施文状況が良く観察される。これによると，施文は土器全体が出来あがった段階で一度に行うのではなく，各粘土の接合過程でその都度行っていることが分かる。

Ⅰ－1B類（50～52）

50は口径が18cmの小型の深鉢である。口縁部の下がわずかに外側にふくらみ，以下すぼまりながら底部に移行する。赤褐色を呈し焼成は良好である。胎土には雲母を含む。内面に指による押圧調整痕が見られる。51は口辺付近の粘土の接合部の上部に無文帯を持つ資料である。赤褐色で胎土に雲母，角閃石，石英粒を含む。10区の2層中から出土した。

52は胴部である暗黄褐色を呈し，焼成は良好。胎土には雲母，角閃石，石英粒を含む。施文原体の径は0.7cmである。

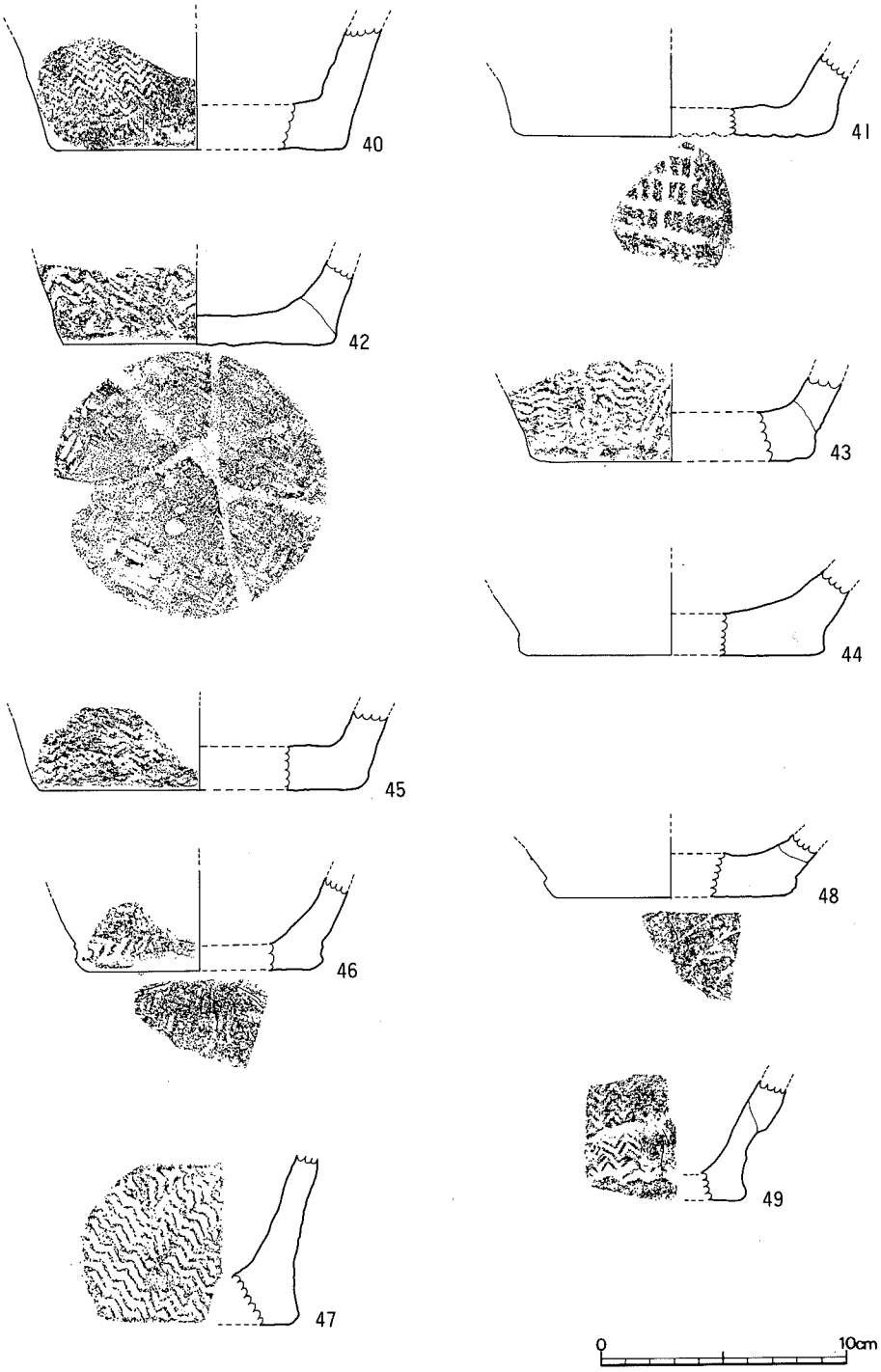
Ⅰ－1C類（53～63）

口縁からほぼ直行しながら胴部に至るタイプである。

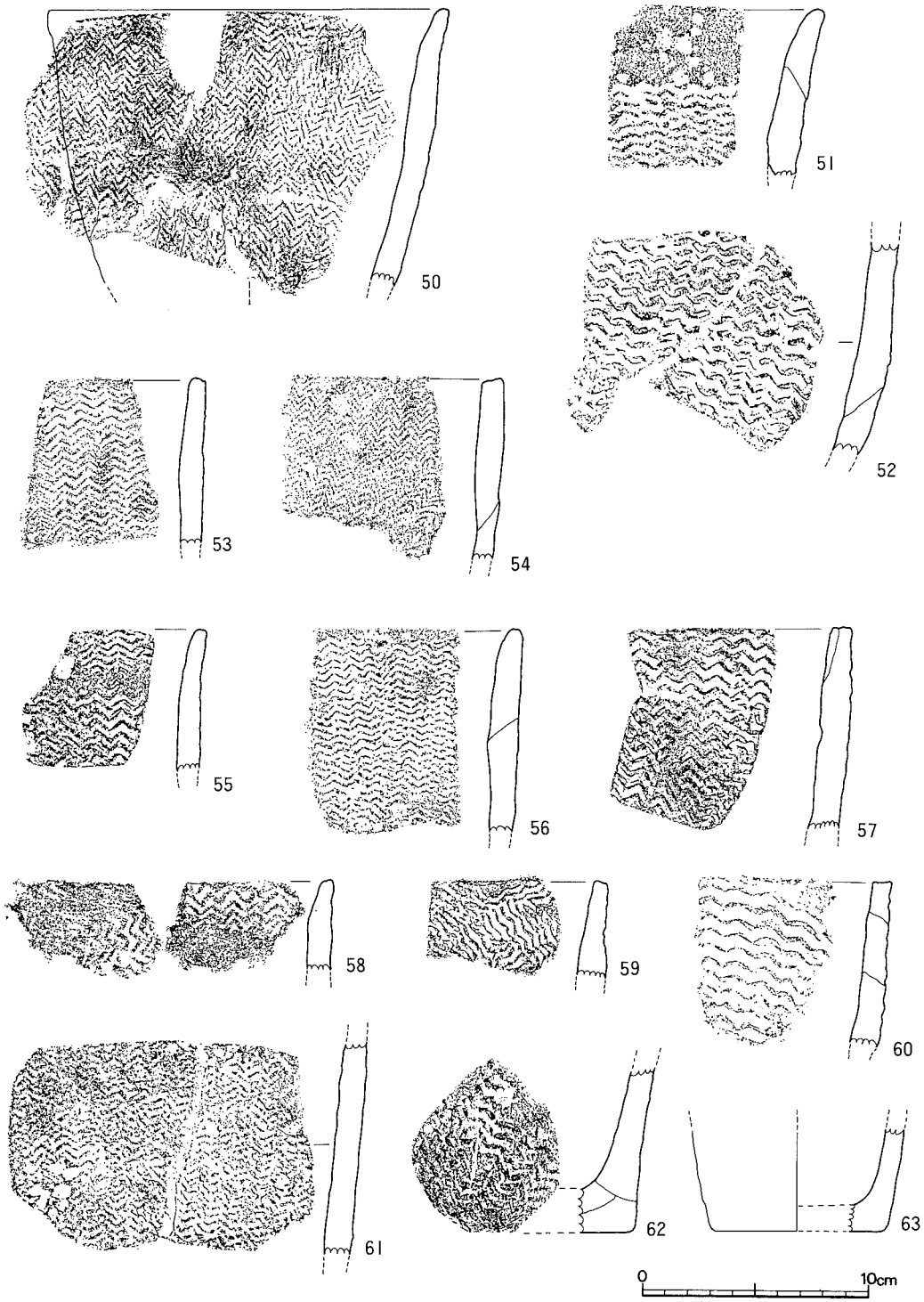
口径を復元出来る程の大きな破片がないが，基本的には上記の資料と同一であろう。

53は明褐色で胎土に雲母と角閃石を含む。施文は横方向である。54は口唇部が内側に傾斜する。施文は横位である。56，57も施文を横方向に施す。いずれも2層中出土資料である。57は口唇部が平坦な例で，内面はナデ仕上げである。茶褐色で胎土に雲母と角閃石を含む。8区2層中資料である。58は内面まで文様が施される資料である。暗褐色で雲母と角閃石を含むが砂粒が多くザラついている。施文は浅くあまり明瞭ではない。7区2層から出土した。

59は施文にあたり，まず横位に，そしてその上に重ねて右斜め下方向に施文した例である。暗褐色で胎土に雲母と角閃石を含む。焼成は良い。62，63はC類の底部と思われる。ほぼ垂直に胴部に続く。63は復元径が8cmの小型の深鉢である。器壁が剝落しているため文様が明瞭ではないが，ほぼ最下部まで施文している。



第32図　Ⅰ－ⅠＡ類（山形）実測図⑤



第33図　Ⅰ－ⅠB、ⅠC類（山形）実測図⑥

Ⅰ－１Ｄ類（64～67）

口縁から一旦外側へふくらみ，その後すぼまりながら胴部を形成する器形である。

64は復元径が27cmのやや大型の深鉢である。黄褐色を呈し，雲母と角閃石を含む。焼成は甘い。11区の２層下部から出土した。

65は胴部である。復元胴径が35cmほどのやや大型の深鉢である。黄褐色で雲母と角閃石を含む。焼成は良好である。右斜めした方向に施文している。６区２層出土である。

66と67は施文原体の大きさが計測出来る資料である。すなわち，66は直径が0.71cm，長さが3.5cmであり，67は施文原体が直径0.7cm，長さ2.8cmである。

Ⅰ－１Ｅ類（68）

１点のみ出土した。口縁部から直接すぼまりながら胴部にいたるタイプである。器高が高くない椀型になるものと思われる。暗褐色で胎土に雲母と角閃石を含む。口唇部は平坦で，内面には指による押圧痕が残る。９区表土から出土している。

Ⅰ－１Ｆ類（69）

やはり１点のみ出土した。口縁が外反するタイプで他の山形文資料に比して異質である。口唇部はやや外傾し，口縁部はゆるやかに外反する。施文は口唇部を含む内外面に施すが，内面は横方向であるのに比して特に外面のそれは縦方向に施文している。色調は暗黄褐色で焼成は良い。胎土には雲母が含まれている。

Ⅰ－２類　楕円文（70～81）

楕円文は全部で74点出土している。そして10区と11区にその６割が集中する。

Ⅰ－２類は施文が楕円文の資料である。器形は大部分がＦ類であるが，Ｂタイプのものと Ｃタイプと思われる資料がそれぞれ１点づつある。

70～73は全て器形的にはＦタイプであり，施文部位が内面口縁下まで及ぶ資料である。70は復元口径が41.6cmの大型の深鉢である。細く小さな楕円文を器壁の内外に施しているが，外面は縦方向，内面は横方向に施文する。黄褐色で胎土に雲母を含む。12区の表土資料である。

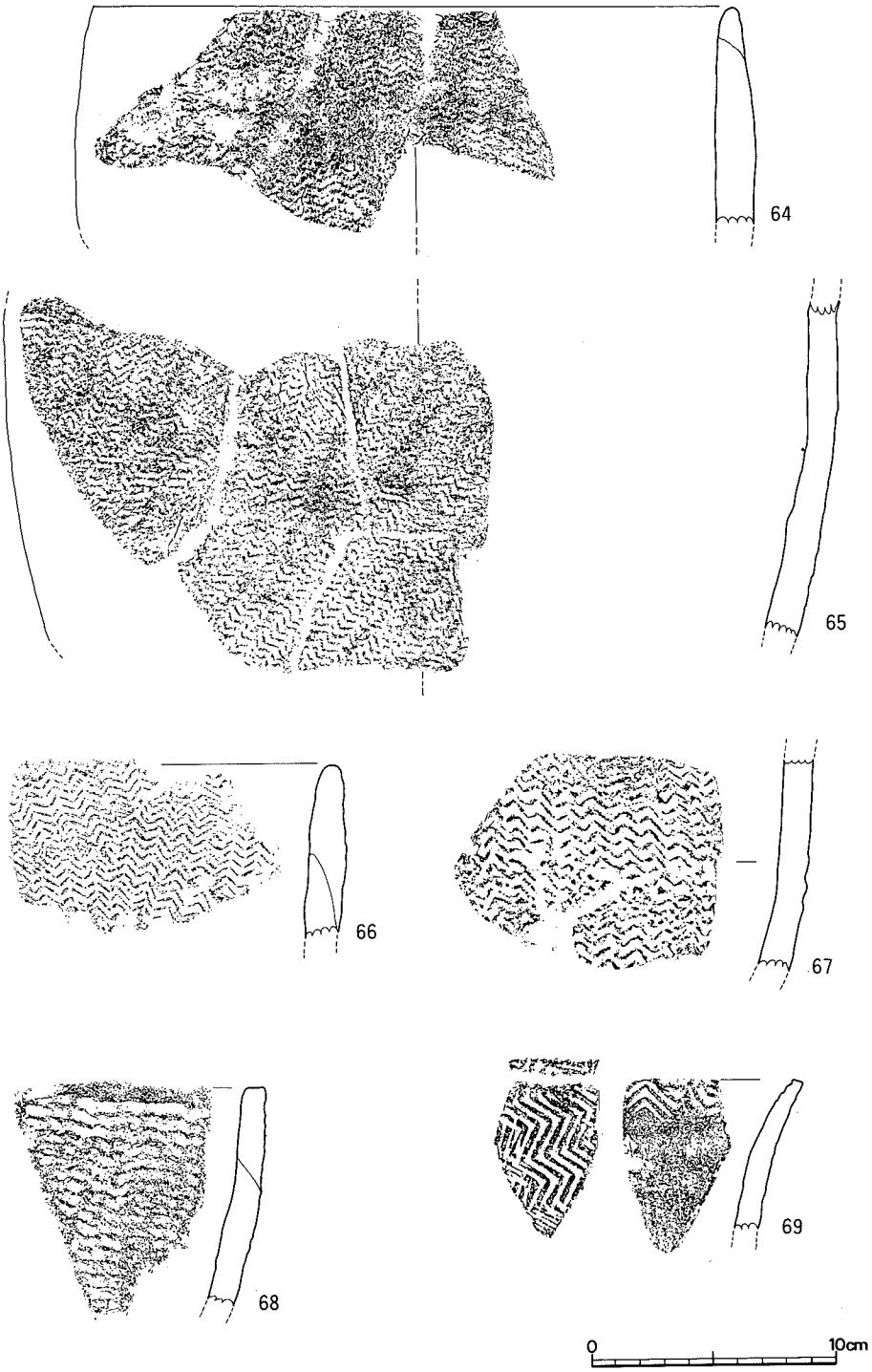
71は復元口径が30cm程の中型深鉢である。施文部位，方向共に70に似ている。暗黄褐色で雲母を含む。粘土接合部から下部の施文をナデ消している。焼成は良好である。12区２層出土。

74はＢタイプの資料である。器形の相違を除くと，色調，胎土，施文方法共に他の資料と特に異なるところはない。

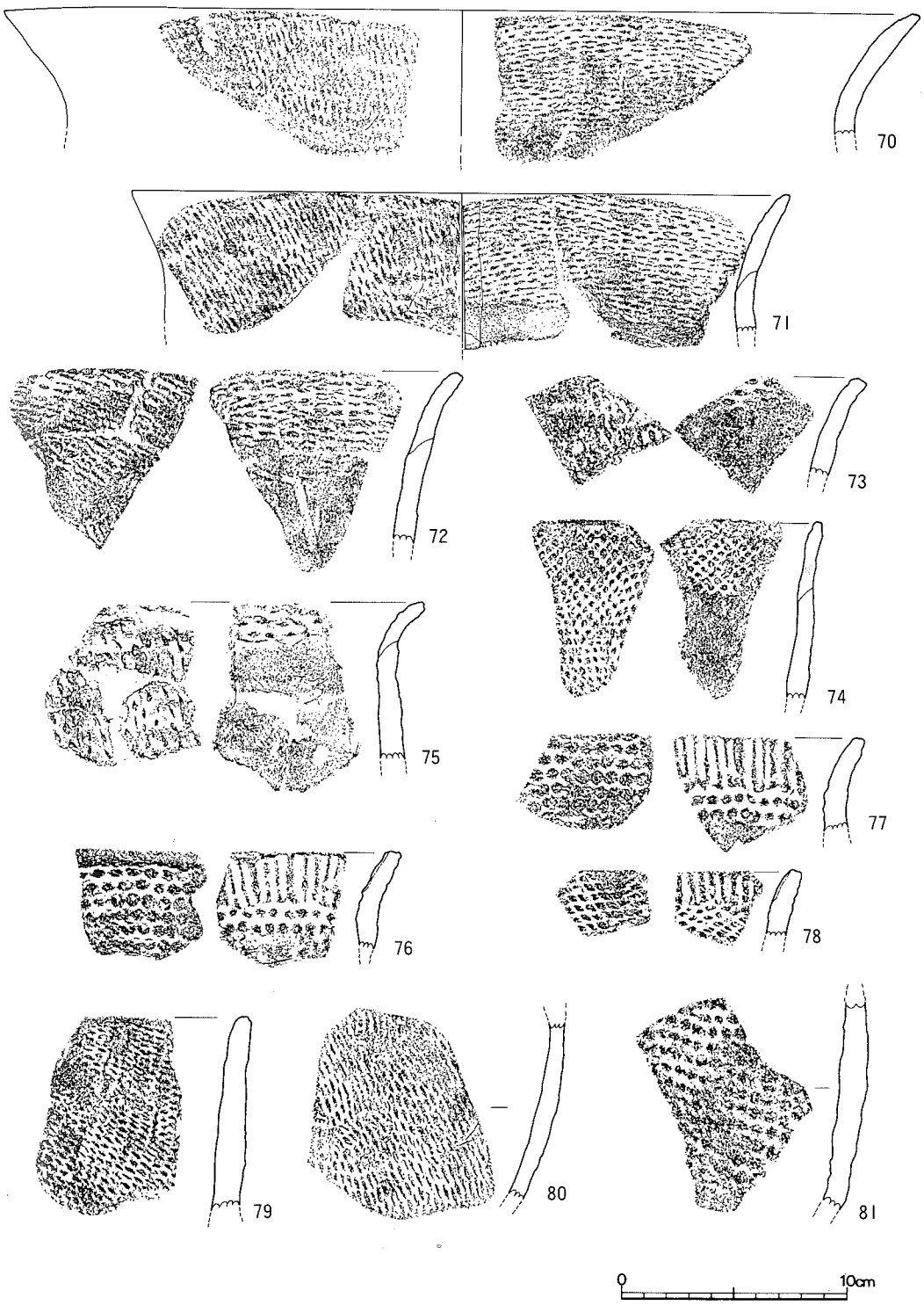
75は口縁が大きく外反する。内外面共に荒い施文を施すが，内面は施文を口縁下の一部を除いてナデ消している。暗茶褐色で雲母を含む。焼成は良好である。

76～78は口縁内面の施文に棒状原体による圧痕を併用する資料である。楕円も丸みがあり，やや大ぶりである。

79はＣタイプの資料であろう。外面のみで内面には施文しない。楕円は小振りで丁寧な施文である。原体の直径は3.4cmである。



第34図　Ⅰ－ⅠD、ⅠE、ⅠF類実測図⑦



第35図　Ⅰ－2類（楕円）実測図⑧

Ⅰ－3類　格子目文（82～94）

格子目文は全部で236点出土した。出土区は3区から13区までが多いが，特に8区から13区までの間にその65％が集中している。

器形的にはAタイプとC，Dタイプとが見られるが，その殆どはAタイプである。

82は1.4cmとぶ厚い器壁を持つ。施文は口縁から全面に行う。格子目はきめが細かい。暗褐色で胎土に雲母と角閃石を含むが，砂が多いためにザラついている。内面にはミガキが認められる。5区の2層下面から出土している。施文格子目は3㎜方眼である。

83はやや大きい破片で赤褐色を呈し，焼成は良好である。格子目は4㎜方眼でやや大きい。

84も4×5㎜とやや大きめの格子目を持つ。暗黄褐色で焼成は良好。胎土に雲母を含む。

器壁外面の施文は口縁に平行して行う例が多いが，88，89は施文を斜めに施す例である。

88は口縁が直口するCタイプの資料であろう。暗黄褐色で胎土に雲母と角閃石を含むが砂が多いためザラついている。6区の3層中資料である。

91は格子目施文の底部である。1点だけ出土した。復元径は13cmで完全な平底である。

94はDタイプに属する資料である。復元口径は33cmで以下強い傾斜ですぼまりながら底部に移行する。器高があまり高くない鉢状の資料になるものと思われる。明茶褐色で胎土に雲母と角閃石を含む。焼成は良好である。格子目は4×5㎜とやや大きめである。ほぼ口縁に平行して施文している。8区の2層中出土資料である。

Ⅱ類　撚糸文，縄文土器

95～97は撚糸文土器である。内外面共に施文し，その方向は外面は縦位方向，内面は横位である。器形は95はFタイプと思われるが，96，97はよく分からない。96は暗褐色で胎土には雲母を含むが砂粒が多く，これまでの資料とは胎土がやや異なる。9区3層中出土。97も胎土に砂粒が多い。器壁は8㎜と比較的薄い。焼成は普通である。18区2層から出土した。

98～104は縄文土器である。98～101はFタイプであり，102はCタイプになるものと思われる。Fタイプは内外面に施文する。

98～101は何れも8区2層中出土資料である。101は口唇部にも施文する。

103は復元口径が23.6cmの中型の深鉢である。暗褐色で胎土に雲母と角閃石を含むが，砂粒が多くザラついている。焼成は良好で内面はナデ仕上げを行う。8区2層中資料である。

III類　無文土器

無文土器自体は，各調査区から万遍なく全部で2,000点程出土しているが，細片が多く，図示出来る資料が少ない。

105，106は小型の土器底部である。105は径5cmで丸みを持つ。淡黄褐色で胎土に金雲母を含んでいる。5区の2層中資料である。106は径3.5cmでさらに小さく，ミニチュア土器という名にふさわしい。暗褐色で焼成は良好。胎土に角閃石を含む。外面はナデ仕上げを行う。12区の2層から出土した。

107は器壁が1.6cmとぶ厚い無文の底部である。淡茶褐色で，胎土には雲母を含むが砂粒が多くザラついている。内面にコゲが付着する。5区の2層から出土した。

IV類　その他の土器

主に晩期の資料であるが，全部で30点程出土したにすぎない。

また細片が多く，図示出来る資料が少ない。

108～113は深鉢，114，115は浅鉢，116，117は深鉢底部である。晩期前半ころの資料である。前回調査した折出土した資料と時期的には同一である。

118は深鉢底部である。径が14.8cmで薄手である。赤褐色で胎土に滑石を少量含む。外面には条痕を施す。17区2出土の一括資料であるが，時期的には中期から後期に属する資料と思われる。この時期の資料としては1点のみの出土である。

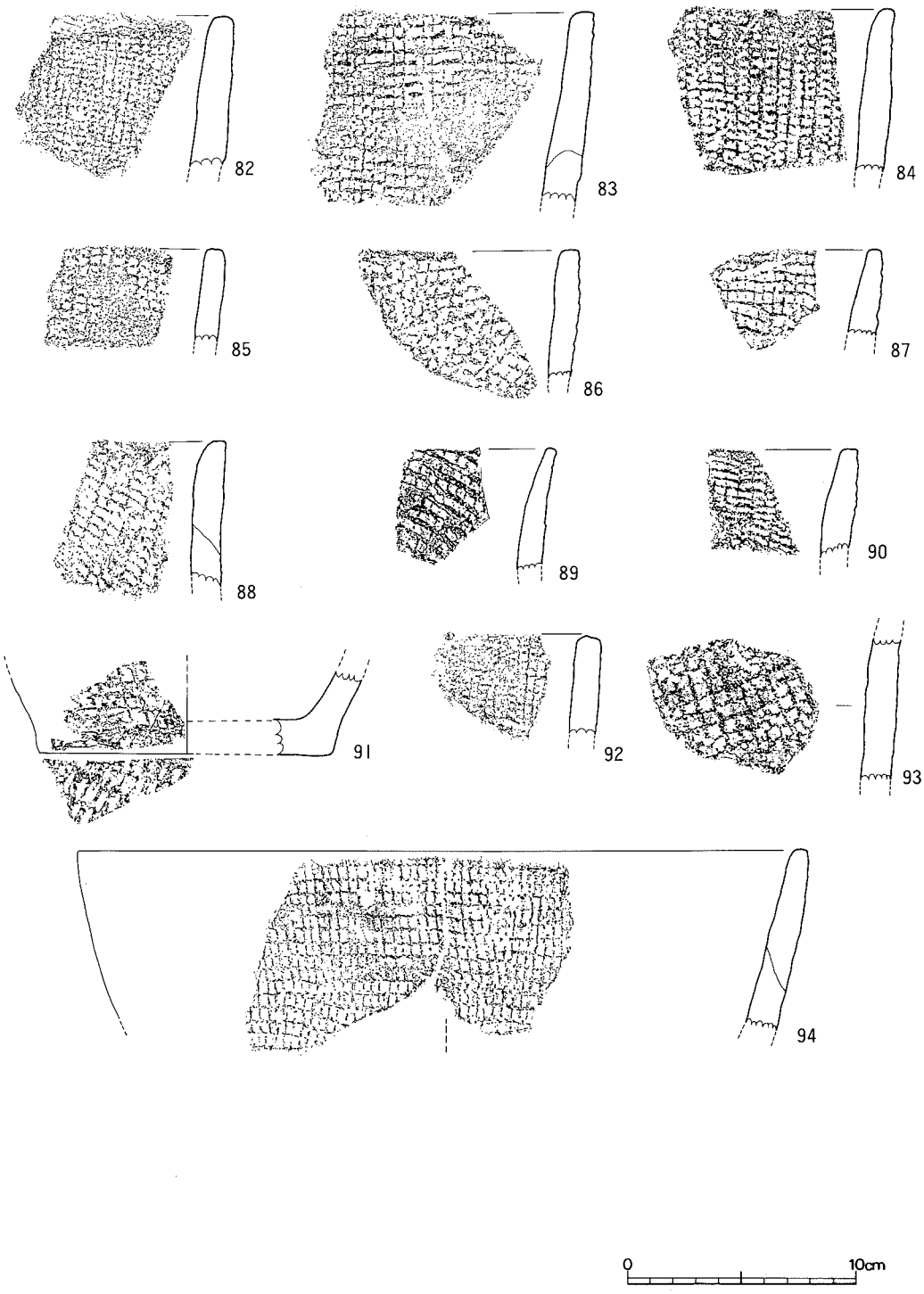
土器のまとめ

今回出土した土器の総点数は細片までいれて，約6,000点であった。前回もやはり6,000点程出土したから合わせると12,000点程になる。これらの土器の特長については，その殆どが共通しており，刊行済みの報告書でも詳述[注1]しているので繰り返さないが，特に押型文を中心とした一般的な特長について今回出土資料の分を含めて簡単に記しておく。

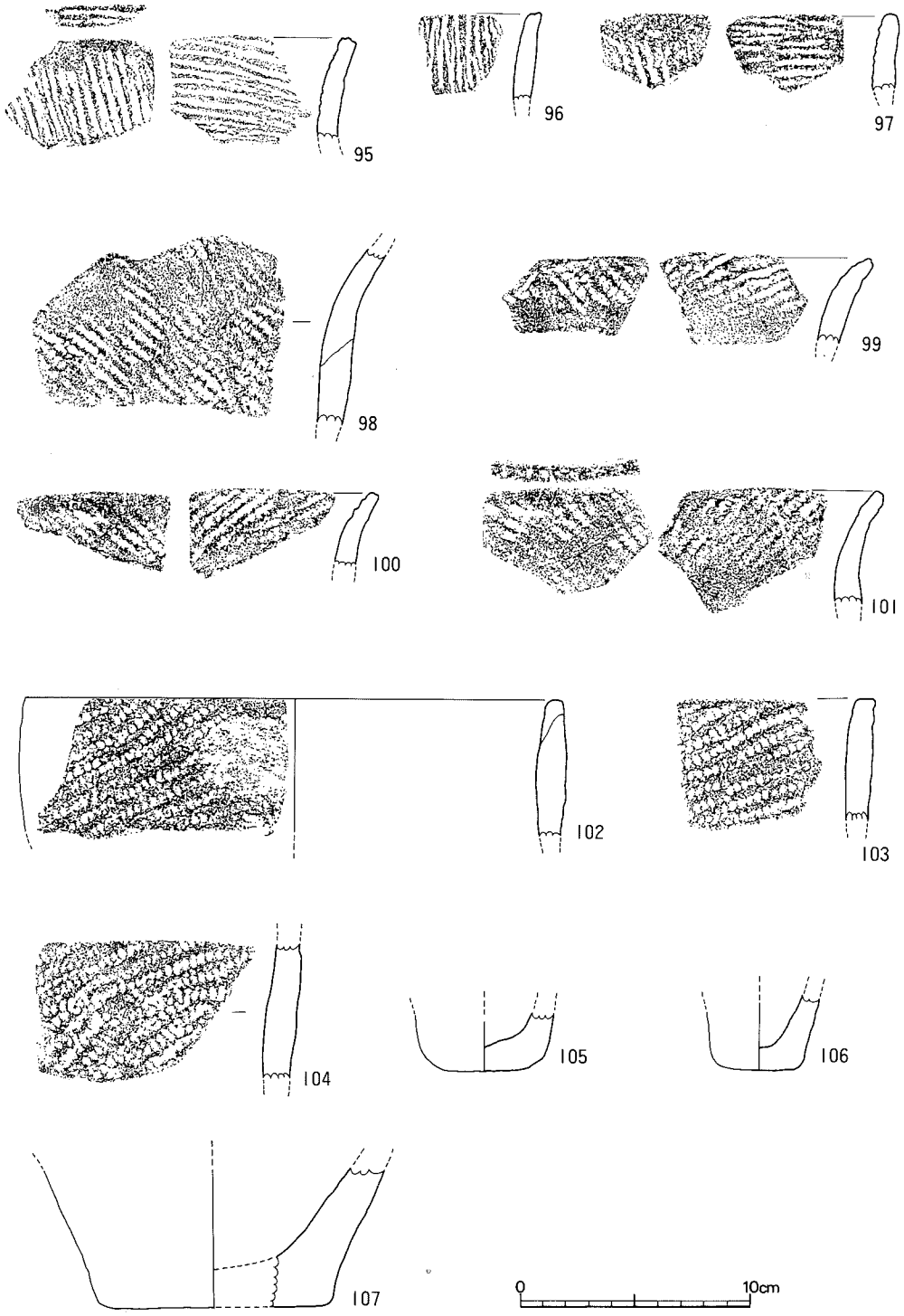
まず，器形はその殆どが深鉢であり，口径は9～18cmのもの，18～26cmのもの，28～34cmのもの，そして36cm以上のものの4種がある。底径もそれに応じて5cm以下のもの，8～11cmのもの，12～17cmのもの，そして21cmを越すものがある。それぞれの大きさのものに対応するものと思われる。

施文原体の大きさは，計測し易い山形文の例からはその直径は0.6～0.9cmの範囲に集約され，また長さは2.3～0.9cm程度のものが最も多い。

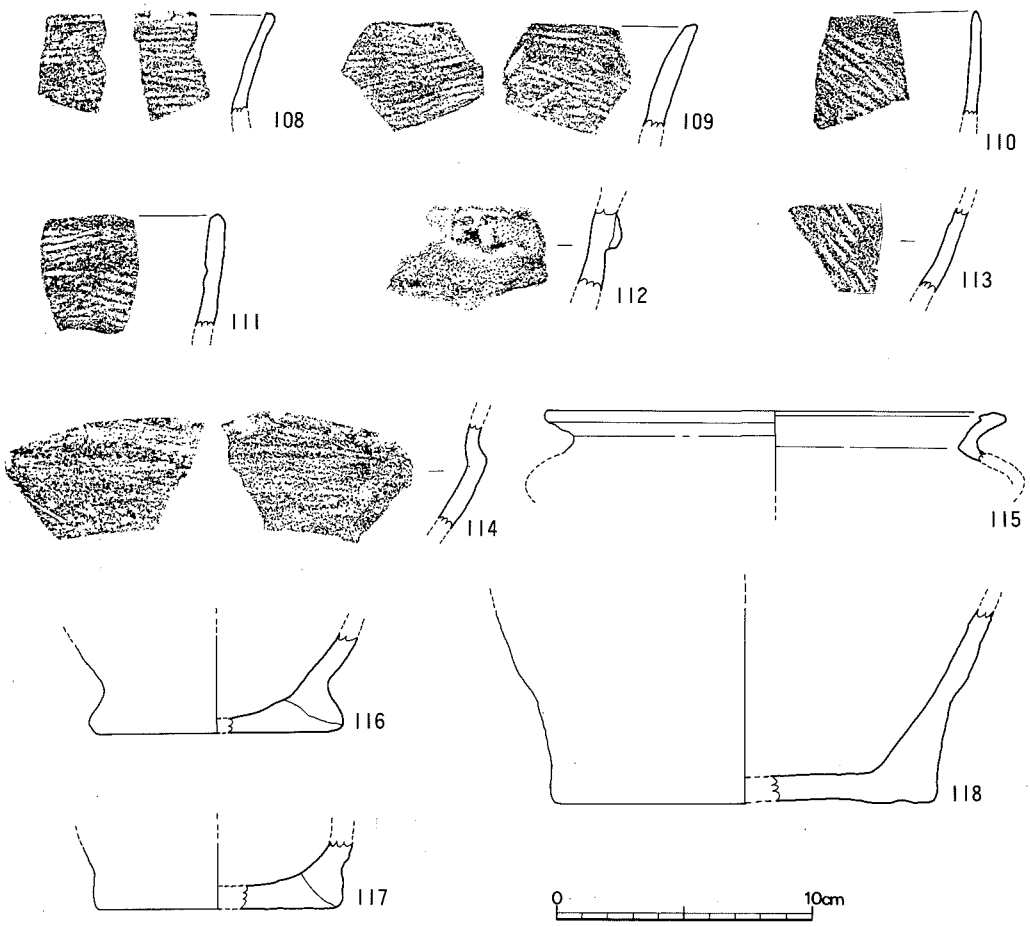
施文部位は文様によって若干異なる。山形文については，24，58，69を除いて，全て施文は外壁に限定され，口縁下底部に至るまで全面に施文するのが大部分であるが，少数ながら口縁下に無文帯をもつものがある(28，51)。格子目については外壁のみの施文である。楕円文は①外壁は全面施文，内壁には原体条痕と楕円文②内・外壁共に同種施文③外壁のみ施文の3種が



第36図　Ⅰ－3類（格子目）実測図⑨



第37図　II、III類（無文・撚糸・縄文）実測図⑩



第38図　IV類（その他）土器実測図⑪

確認出来る。

土器の色調は黄褐色から茶褐色系が大部分で，胎土には雲母や角閃石を含むのが一般的である。焼成は良好なものが多いが，表面がザラつく資料も多い。

以上簡単な押型文土器の特長を記しておいたが，気づいた点について触れておきたい。

弘法原遺跡の土器の主流は押型文土器であり，またその中でも特に山形文土器がその殆どを占めている。山形文は器形的には数種類に分けられるが，基本的には大きな差はない。格子目文も同様である。しかし，山形文と楕円文は明らかに器形的に系統を異にしている。

しかし，両者の間に接点を持つ資料も散見される。山形文のなかにも口縁内側にも施文する資料があり（24，58，69）特に，69は口縁が外反しており，施文も縦方向に行うなど器形的にも施文方法も楕円文土器の特長と一致する。逆に楕円文でも79のように口縁が直口し，施文を外壁のみに行う資料も認められる。両者の特長を持つ集団が接触した結果生じた折衷様式ではないかと思われる。口縁が直線的で山形文を施文する土器を作る技術に，口縁が外反し，楕円文を施文する土器を作る技術が接触した結果生じた折衷様式であろうと考えられる。この場合，やはり主体は山形文を施文する集団であり，これに楕円文を施文する技術が接触した可能性が高いものと考えられる。

口縁が外反し，施文が口縁内部に及ぶ楕円押型文資料は熊本県中後迫[注2]，大分県政所[注3]，同県黒山[注4]，福岡県深原[注5]，長崎県岩下[注6]，同県天ケ瀬遺跡など押型文土器が多量に出土する遺跡では通常に見られるタイプであるが，それらの資料は底部が尖底か丸底に近い平底である場合が多い。しかし，弘法原遺跡出土資料が完全な平底に移行していることは，その接触の時期がすでに押型文でも終末期であったことが想像される。

注1　長崎県吾妻町教育委員会　「弘法原遺跡」　吾妻町の文化財　7　1983
2　中後迫遺跡調査団　「中後迫遺跡調査報告」　1978
3　別府大学付属博物館　「政所馬渡」　1982
4　大分県教育委員会　「黒山遺跡緊急発掘調査」　大分県文化財調査報告　十七輯　1968
5　福岡県教育委員会　「山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告　第8集」　1978
6　麻生　優　他　「岩下洞穴の発掘記録」　佐世保市教育委員会　1986

(2) 石　器

a．石鏃・他

今回の調査で出土した石器の総点数は2,326点で，層位別の石器の出土状況は第23図に示すようになる。旧石器時代の遺物も表面採集，または表土層から出土しているが，プライマリーな包含層を検出するまでには至っていない。表土層である1層を除くと，その下層の2～4の各層から出土するが，その割合は，2層から75%，3層から24%，4層から1%と，2層から出土する割合が高い。

石器の器種としては，旧石器時代ではナイフ形石器，台形石器，縄文時代のものでは石鏃，石匙，スクレーパー，石斧，グレーバー，叩き石，砥石，有溝砥石，二次加工ある石器，不明石製品，石槍，ピエス・エスキーユ，使用痕ある剝片，バイポーラテクニックによると思われる剝片，トロトロ石器，石核，原石等がある。

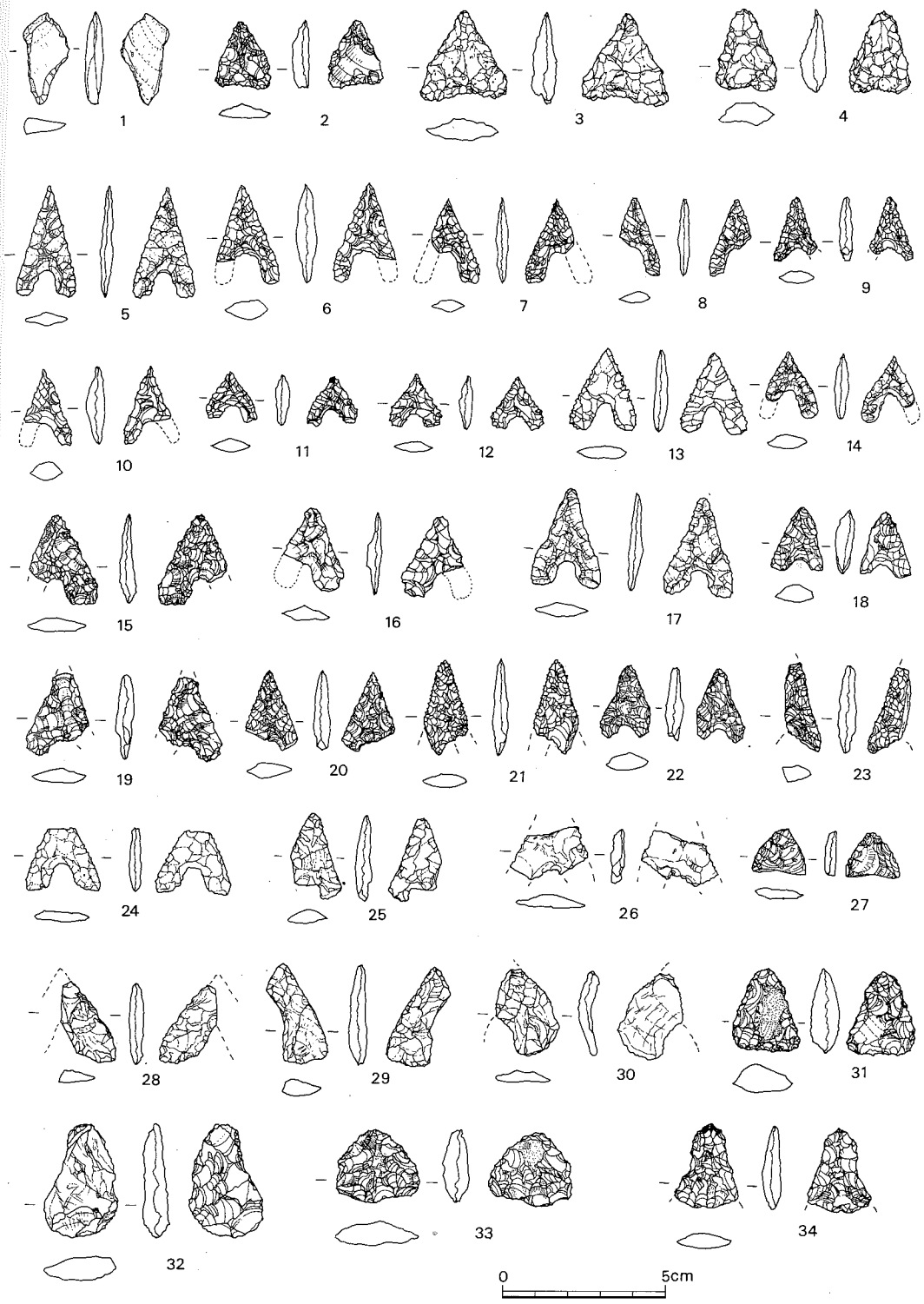
1層出土の石器

1の先端部が切損したナイフ形石器以外は，2～31は石鏃である。基部が若干弓なりに反るもの2～4，この2～4以外の5～31は基部に抉り込みが入る凹基式の石鏃であるが，側縁が直線をなすもの5，13，15等がある。13，15は先端角度が55°，60°と比較的大きい。また脚部の部分が外に広がり幅広になるもの6，8，10，14，16，17等がある。脚部がやや幅広になるが側縁部が直線をなし，内側に脚部の幅が広がる7もある。11，12は長さと幅の比が同じか，幅の方が大きいもの。9のように脚部下端が尖るもの等もある。

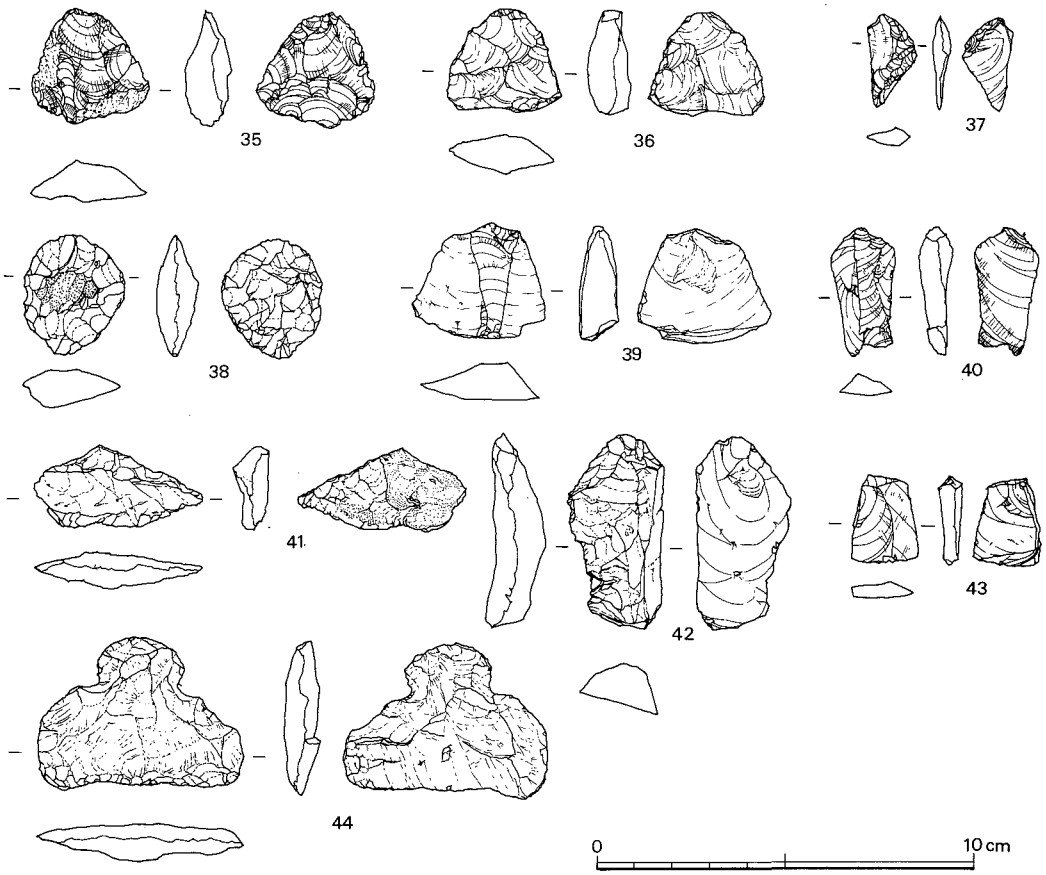
32～36，38は，スクレーパーと思われる。37，39，41～43は剝片で，40は使用痕らしきものが認められる。44は石匙である。45，47～49は石斧，46は打製石斧，50～54はスクレーパー，55は砂岩製の砥石，56は石核である。

2層出土の石器

57～110は石鏃である。基部が平基式のもの58や，平基式に近いが若干弓なりに反るもの57，59～62等がある。57は，長さが幅の2倍あり，形態的には胴部で一度すぼまる形をしている。側縁がほぼ直線をなすものとしては63～67，側縁が直線をなすが，脚部下端でやや内側に曲るもの72～74，89，同じく側縁が直線をなすが，内側に脚部の幅が広がるもの92，94がある。側縁部が外湾するものでは79～85，88等があり，尖端部と脚部に特徴があり，尖端部が丸いか，または脚部が大きくなり幅広になるものである。尖端部近くですぼまる形をしている。86，87，90，93等の資料がある。側縁部が外湾し，抉りの部分の割合が極端に少ないもの76～78があり，脚部の部分が外に張り出すもの95や，尖端部近くと脚部の二ヶ所で張り出すもの96がある。97～99は抉りの部分が比較的小さく，形が左右対称でないものである。100，101は側縁はほぼ直線をなすが，脚部端が丸くおさまるもの。100は厚手で，抉りは浅く小さい。75は尖端角度が30°と小さく，脚部端が細くなるものである。



第39図　Ⅰ層出土の石器①½

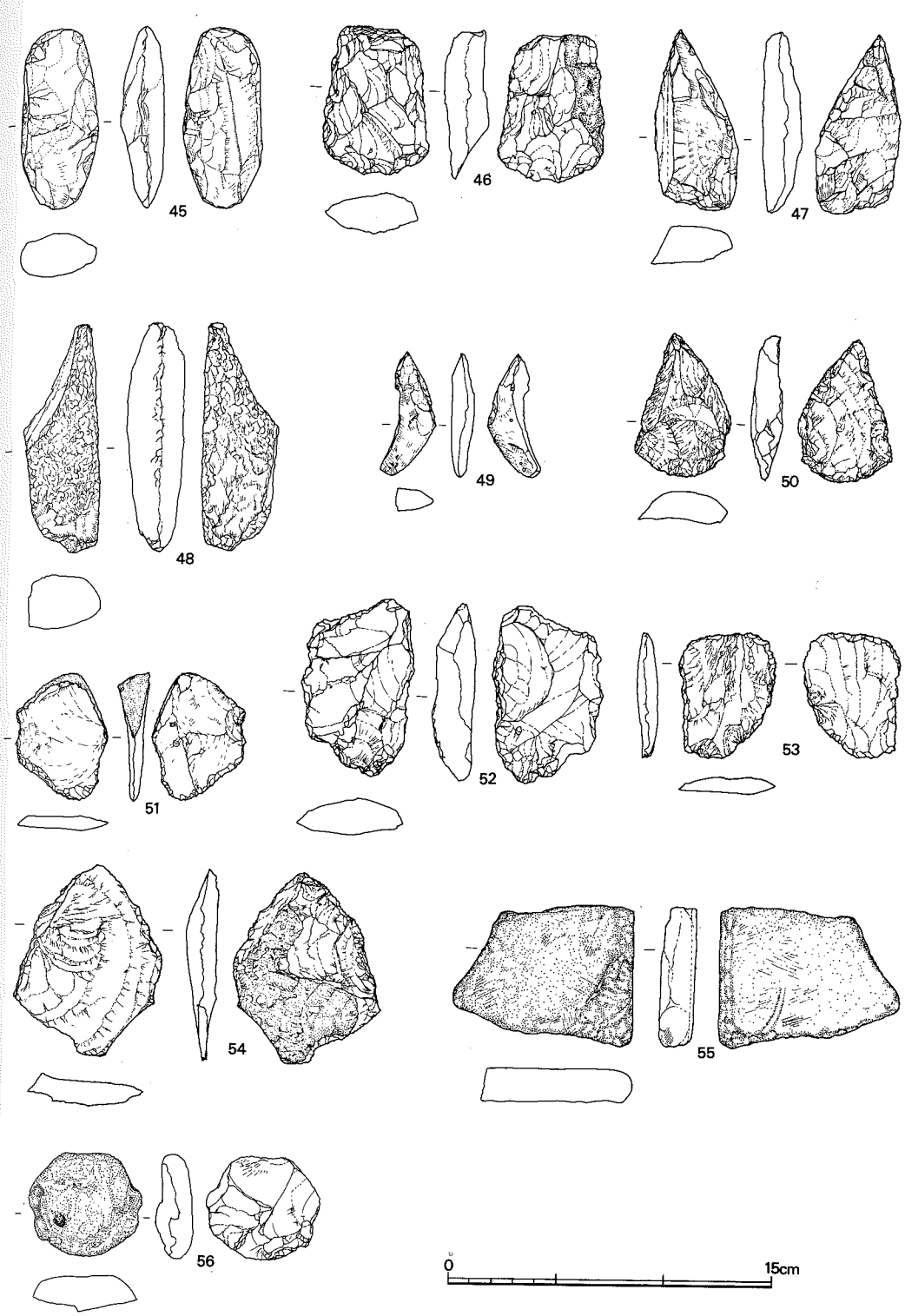


第40図　Ⅰ層出土の石器②½

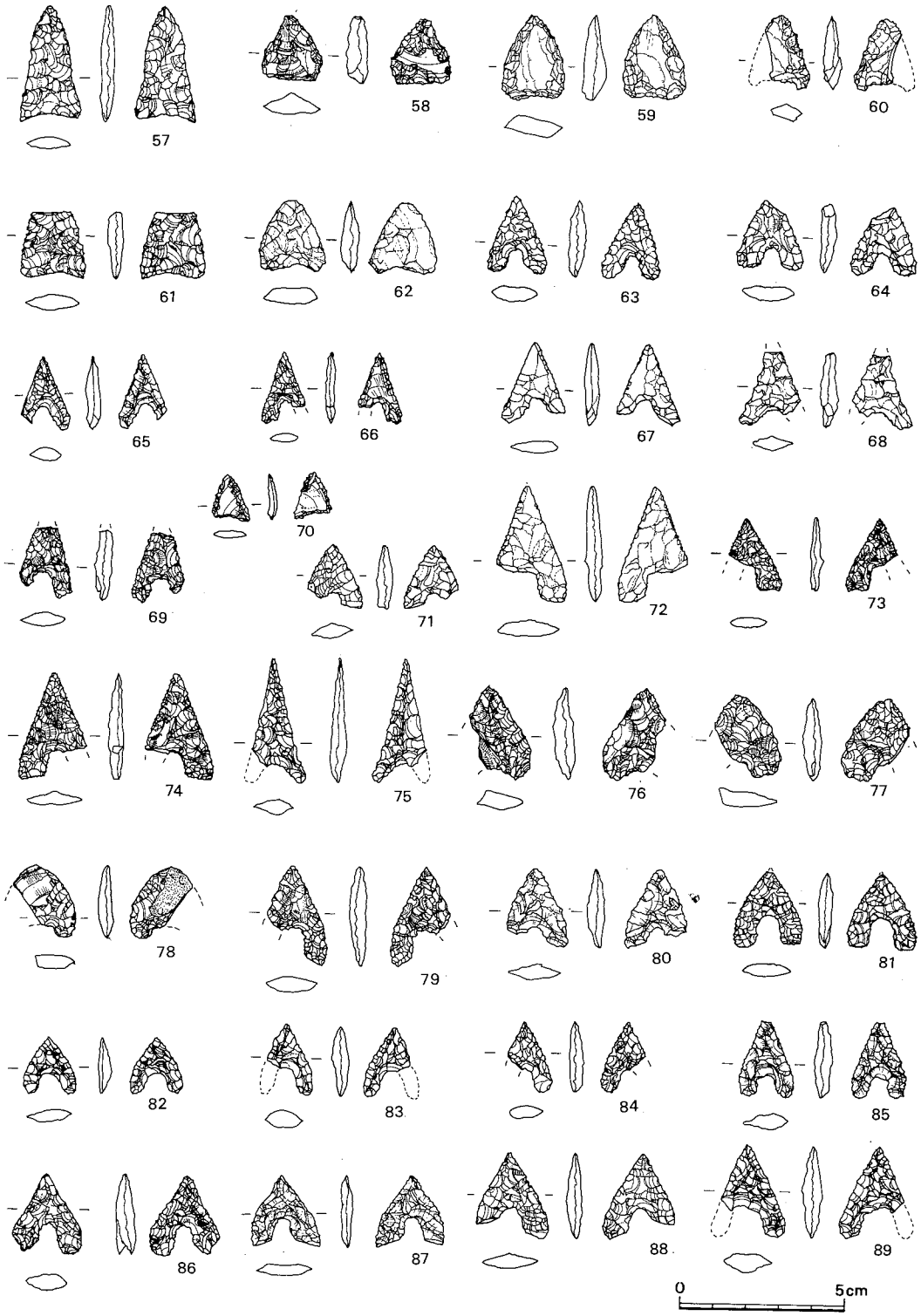
111～118はスクレーパーである。115は二次調整を施し丸く整形している。119，120，122，123は磨製石斧で，121は不明石製品，125，127，131，132は砂岩製の砥石，124，128は安山岩製スクレーパー，126，130は安山岩製石核，129は砂岩製の有溝砥石である。133はピエス・エスキーユ，134は黒曜石製剝片，135，136，139はスクレーパーである。137は元々は石核であったものであろうが，使用痕が認められるのでスクレーパーとしても使用したものだろう。138は安山岩製の石槍である。基部は平基で幅広になっているが，幅広の基部のつけ根を二次調整で抉入させているのは，石槍を紐でしばるためのものだろうか？

3層出土の石器

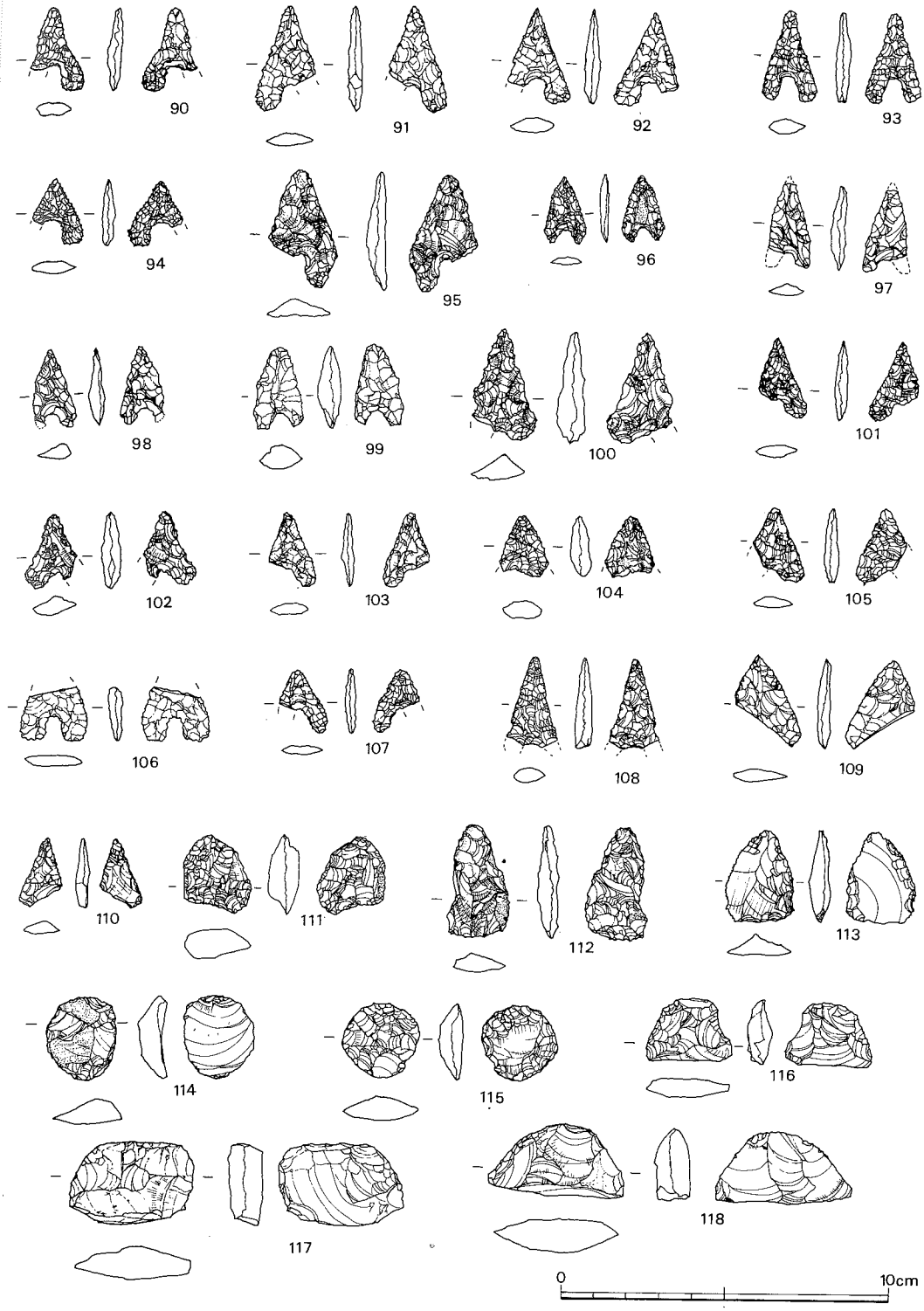
140～152は石鏃である。基部が弓なりに反るもの140～142，側縁部がほぼ直線をなすもの144～146，側縁部がほぼ直線をなし，脚部端がやや幅広で丸くなるもの150，尖端部近くでややすぼまり脚部が開く形のもの148，149，151等がある。151の側縁部の鋸歯状の加工が注目される。153はトロトロ石器といわれるもの。154～156，161はスクレーパーであるが，156は二次調整を施しスクレーパーエッジを作出している部位の角度が80°程と大きい。また161はスクレーパーエッジの部位が内湾しているコンケイブドスクレーパー。158は，バイポーラテクニック



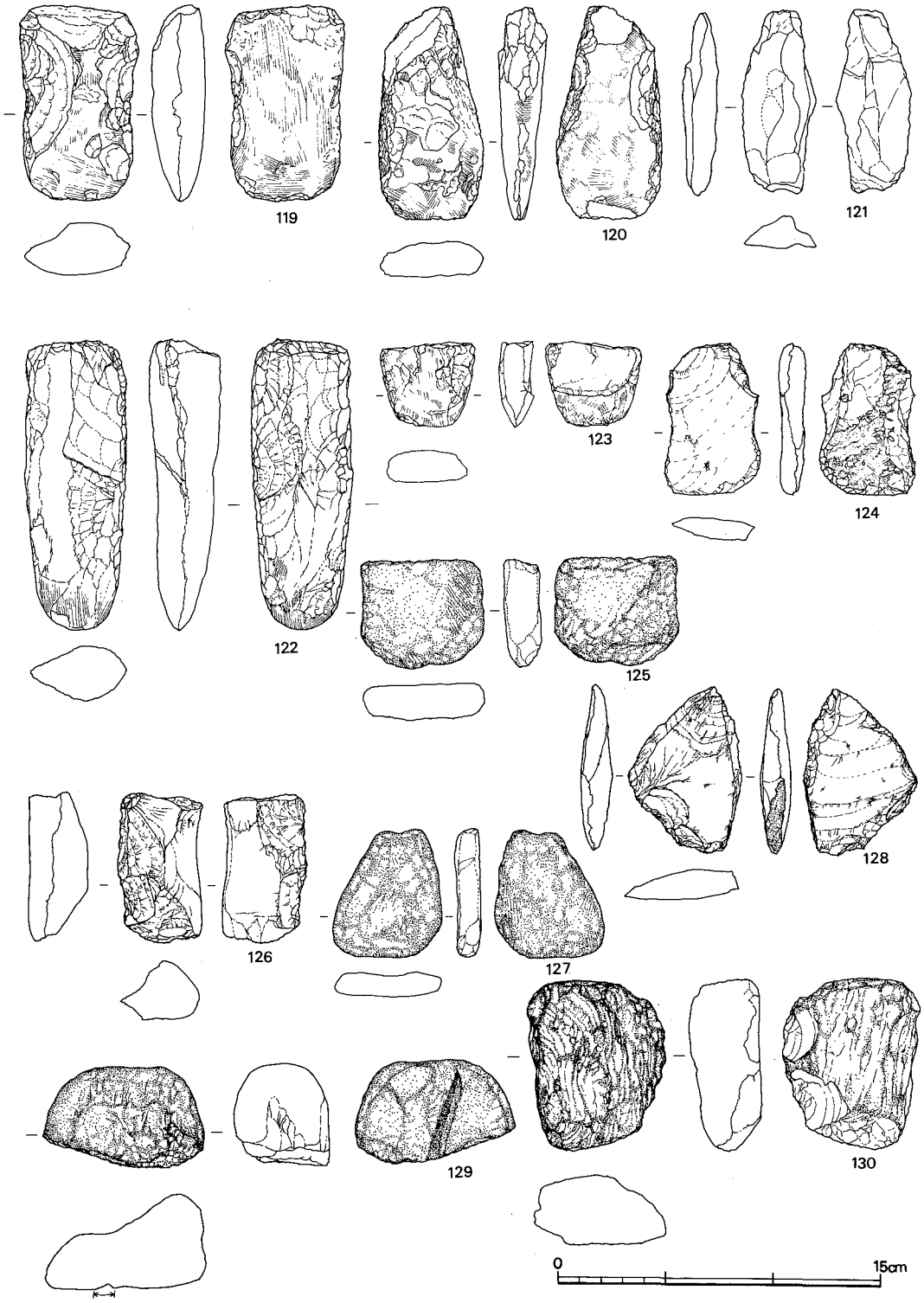
第41図　Ⅰ層出土の石器③1/3



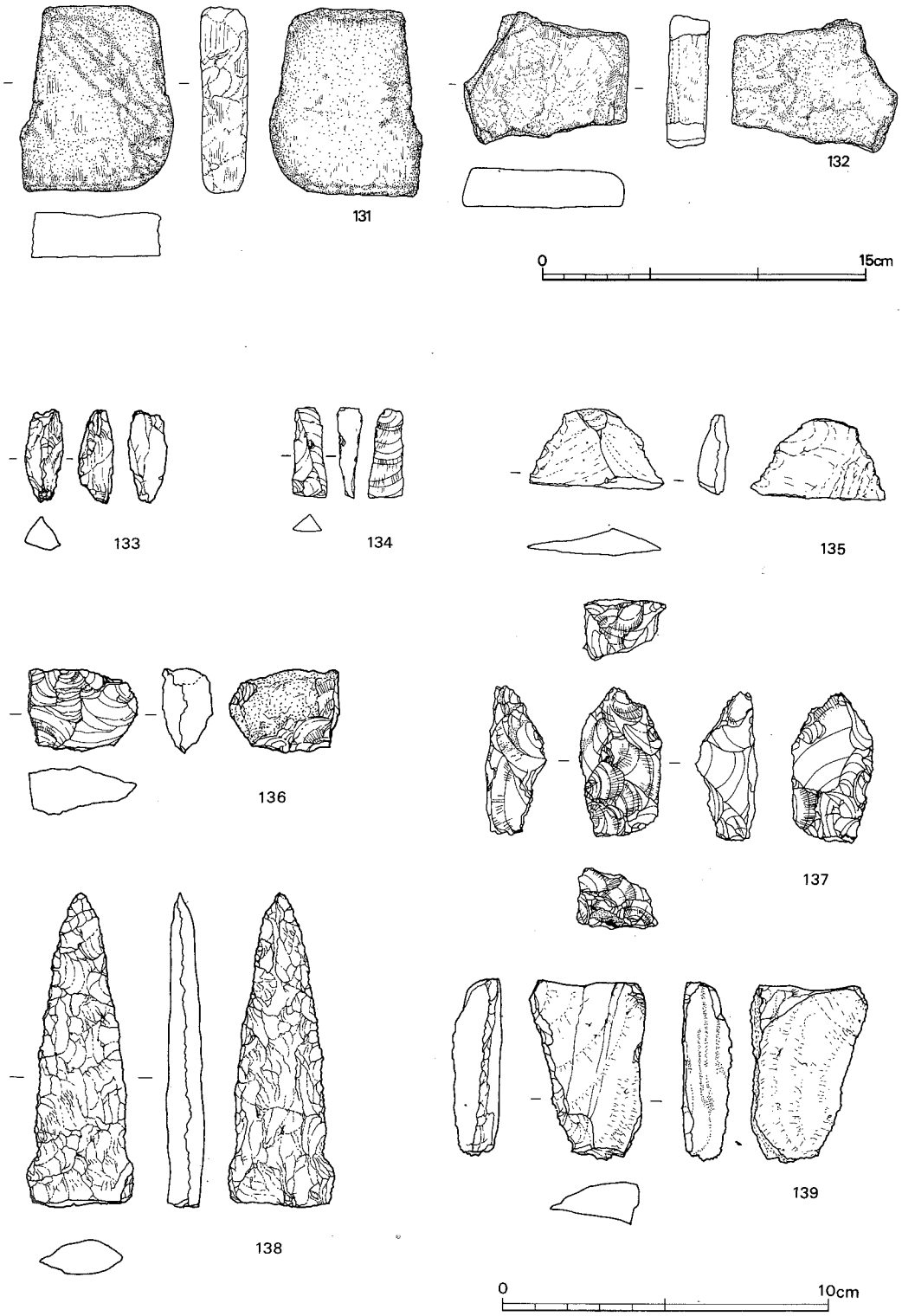
第42図　II層出土の石器①½



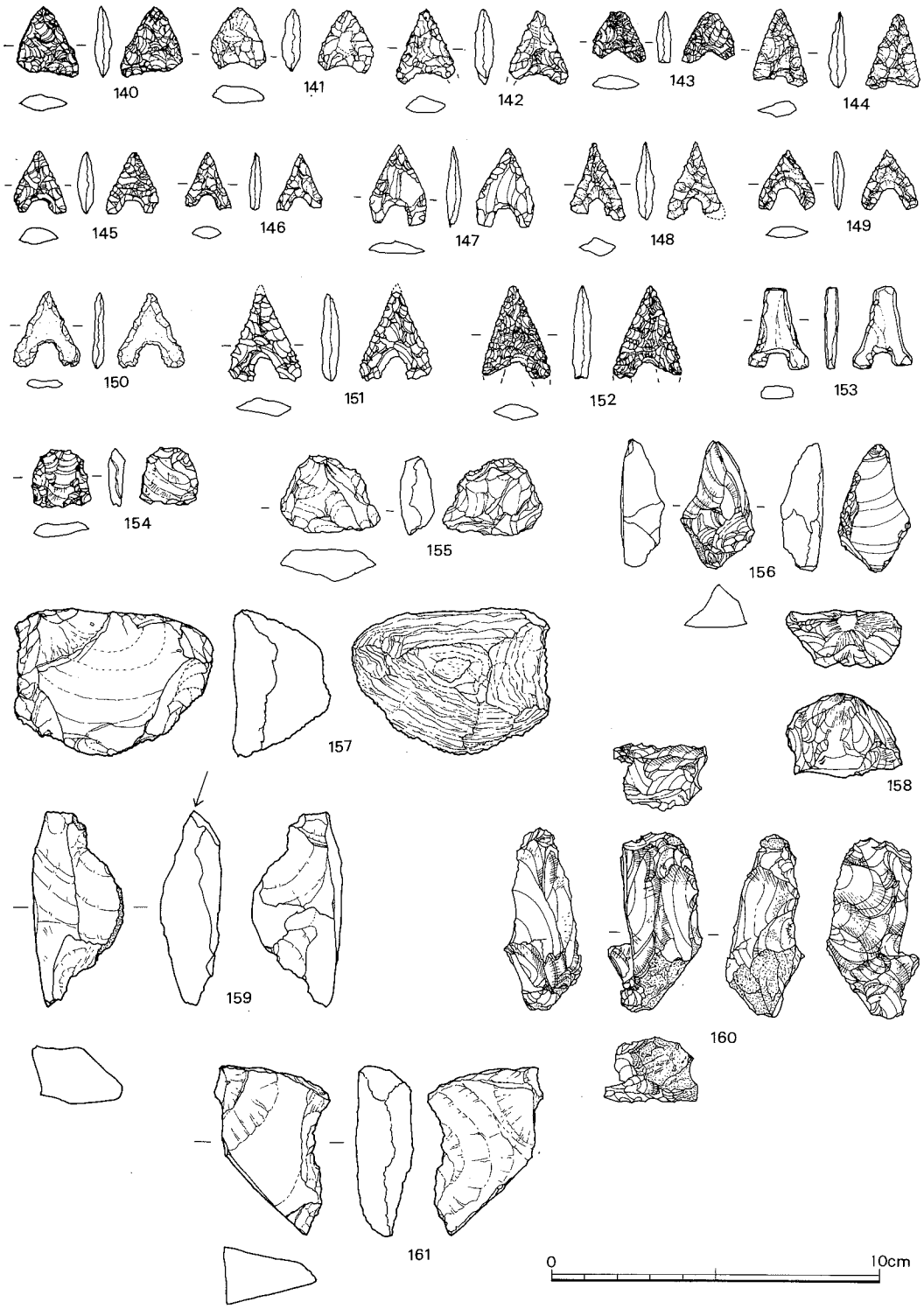
第43図　II層出土の石器②½



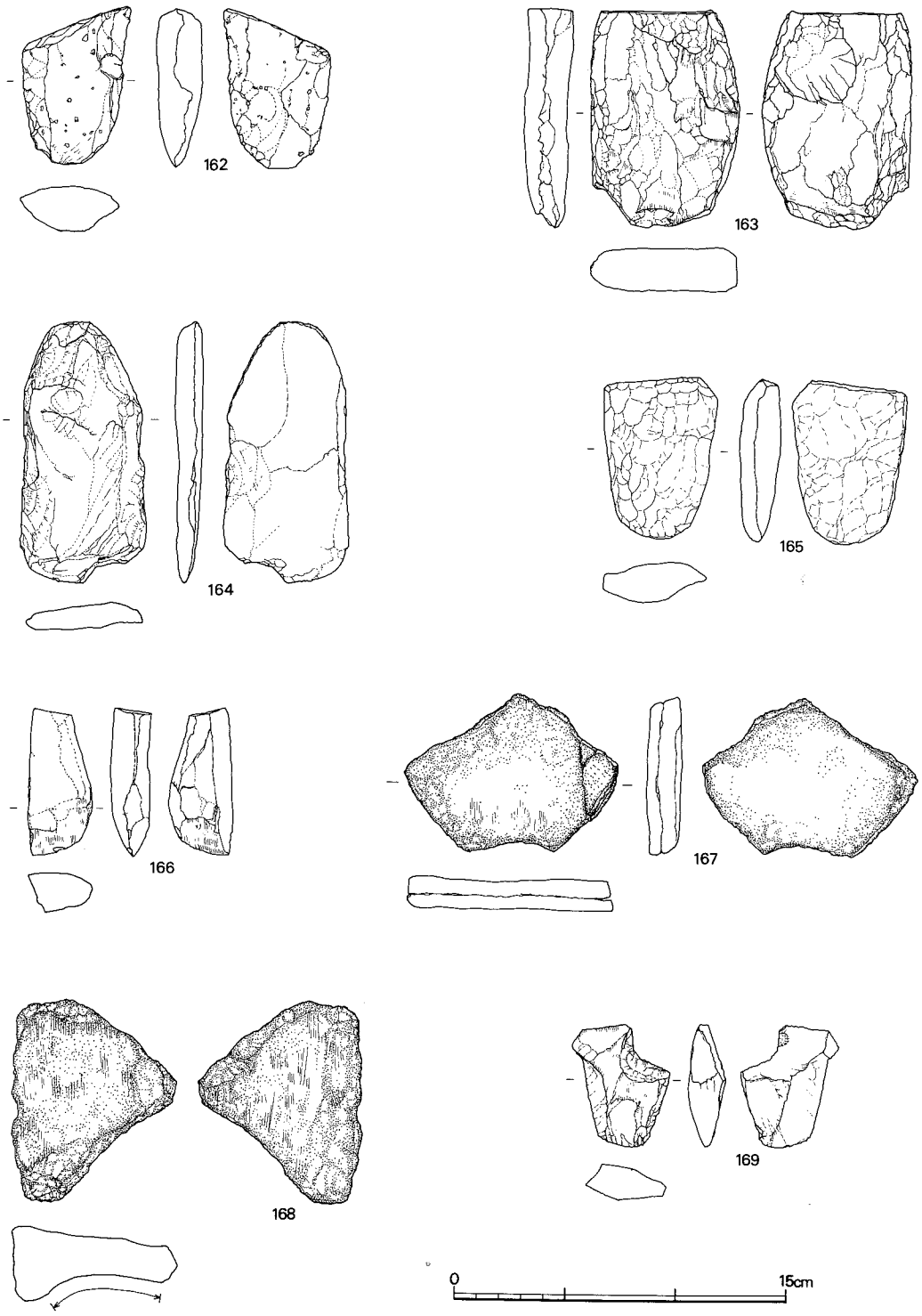
第44図　II層出土の石器③1/3



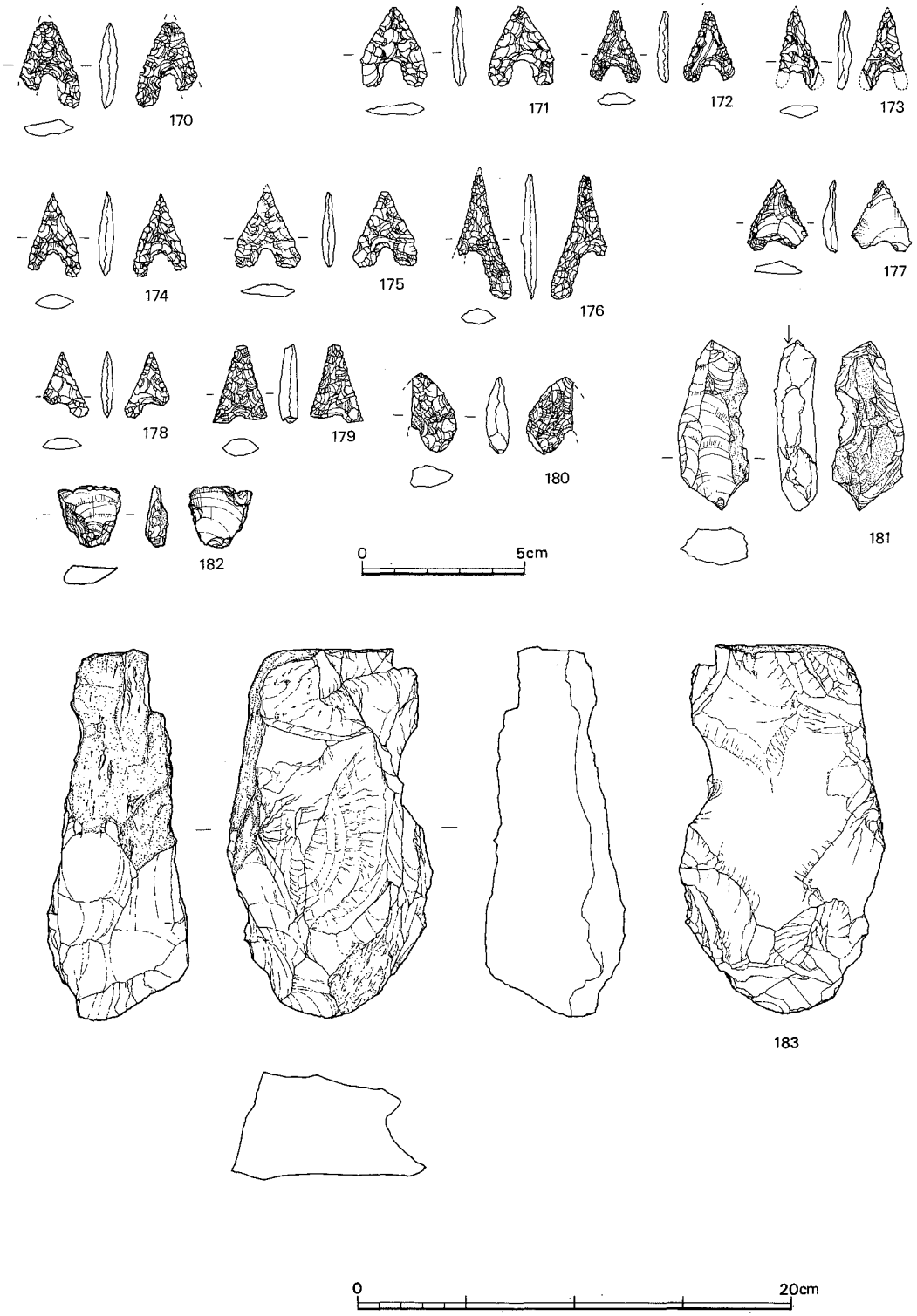
第45図　II層出土の石器④131、132は⅓　133～139は½



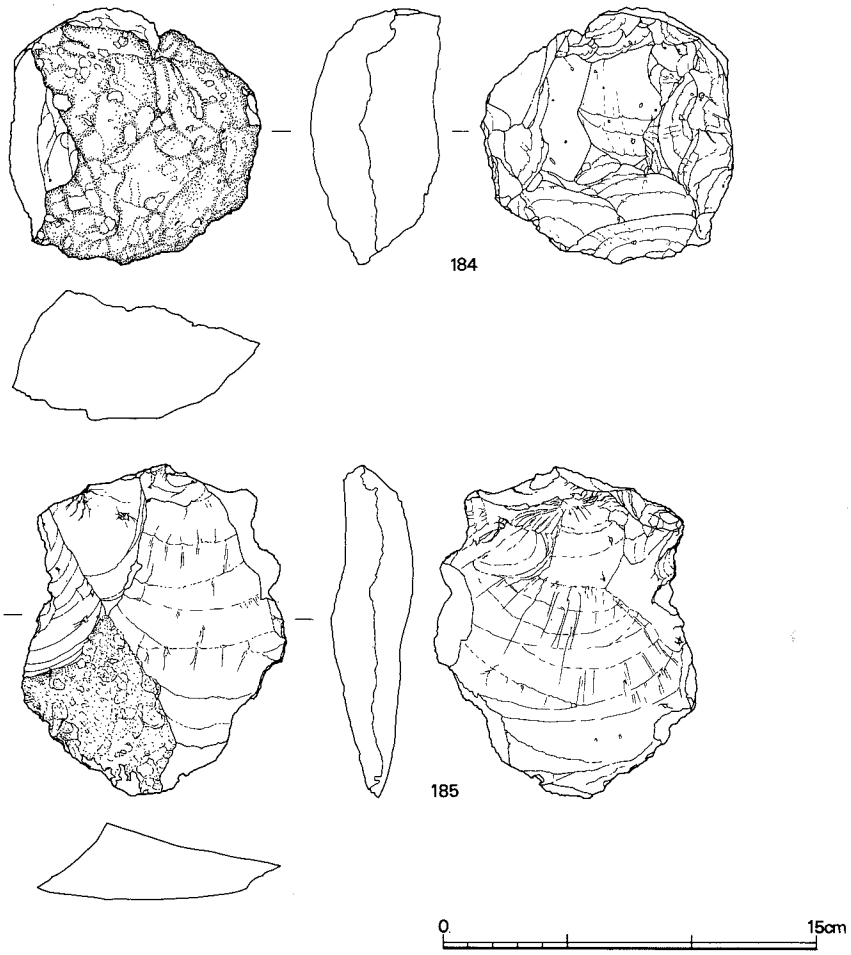
第46図　III層出土の石器①½



第47図　III層出土の石器②⅓



第48図　Ⅳ層及びＫＤⅠ、その他出土の石器　170～182は½　183は⅓



第49図　Ⅰ、Ⅱ層及び表面採集の器⅓

（両極打法）による剝片と思われる。159は安山岩製の比較的大きな彫器である。157，160は石核。162～166，169は磨製石斧である。162と165は在地の安山岩を素材としたと思われるもので，163，164，166，169は貢岩（泥質岩）を使用している。167は扁平な砥石，168は砥石面が凸レンズ状に窪むものである。磨製石斧の刃部を砥ぎ出した可能性もある。

Ⅳ層及びＫＤ１，その他出土の石器

170はⅣ層出土の石鏃で，171～180は，ＫＤ１及びその他出土の石鏃である。181は彫器であるが，残存する黒曜石の原礫面が角礫の状態を示すことから伊万里の腰岳の産と思われる。182は台形石器である。183は長さが18cm程の大型の安山岩製の石核である。184も安山岩製の石核で，185は安山岩製の大型のスクレーパーである。

第3表　石器計測表①

挿図番号	出土区	層位	器種及び石材	破損部位	重さ(g)	大きさ(mm)			抉り(mm)		先端角度
						長さ	幅	厚さ	深さ	幅	
1	11	I	ナイフ形石器・灰青色ｏｂ		1.6	28.5	13	5.5			
2	9	I	石鏃・黒色ｏｂ		1.28	21	17	5			65°
3	9	I	〃・安山岩		3.17	28	21.5	7			60°
4	9	I	〃・〃		2.37	25	18	7			50°
5	12	I	〃・〃	完	1.43	34	19	4	8	8	45°
6	9	I	〃・黒色ｏｂ	C	1.6	30	18	6	9	7	55°
7	9	I	〃・〃	C	0.6	26	11	3.5	9.5		50°
8	11	I	〃・〃	D	0.56	23.5	9.5	3	8.5		45°
9	9	I	〃・〃	C	0.53	19	12	3.5	4		35°
10	9	I	〃・〃	C	0.9	23.5	13	5.5	7		50°
11	11	I	〃・〃	完	0.51	15	16	4	5	7	70°
12	11	I	〃・灰青色ｏｂ	完	0.51	16	16	4	4	8	50°
13	12	I	〃・〃	完	1.4	25	20.5	4	8	7	55°
14	8	I	〃・〃	C	0.7	20	15	4	85	5	50°
15	12	I	〃・黒色ｏｂ	C	1.33	28	19	4.5	9		60°
16	12	I	〃・灰青色ｏｂ	C	0.95	25	16	4	12.5	2	70°
17	6	I	〃・安山岩	完	1.34	30	21	4	7.5	6	50°
18	12	I	〃・灰白色ｏｂ	B	0.98	19.5	16	5.5	3.5	6.5	50°
19	6	I	〃・黒色ｏｂ	D	1.49	25.5	17	5	5		50°
20	2	I	〃・〃	B	0.99	24	15	5	3		50°
21	9	I	〃・〃	B	1.08	29	13	4.5			50°
22	12	I	〃・〃	E	1.08	22.5	15	5	4	6	50°
23	6	I	〃・〃	D	0.99	22	9.5	5			
24	6	I	〃・安山岩	A	1.06	19	23	4	8	12	60°
25	12	I	〃・灰青色ｏｂ	B	1.06	21	20	5			40°
26	11	I	〃・〃	E	1.20		22	4			
27	13	I	〃・黒色ｏｂ	E	0.58	13	16	3			65°
28	9	I	〃・灰青色ｏｂ	D	1.22	25	13	4			
29	2	I	〃・〃	C	1.77	31	13.5	5.5			65°
30	12	I	〃・チャート	C	1.63	26	18	4			
31	18	I	〃・灰白色ｏｂ		3.22	21	20.5	8.5			65°
32	11	I	スクレーパー・チャート		5.39						
33	9	I	〃・黒色ｏｂ		3.74	22.5	25	8			
34	10	I	〃・灰青色ｏｂ		1.82	25.5	19.5	5.5			
35	10	I	〃・黒色ｏｂ		7.40	30	31	12			
36	6	I	〃・灰青色ｏｂ		7.14	27.5	30	11			
37	12	I	剝片・黒色ｏｂ		0.75	25	12	5			
38	14	I	スクレーパー・灰青色ｏｂ		6.71	32	21	10.5			
39	8	I	剝片・〃		9.26	31	35	10			

※破損部位で完；完形　A；先端部破損　B；両脚破損　C；片脚破損　D；先端部片脚破損
E；先端部両脚破損　F；脚部のみ

第 4 表　石器計測表②

挿図番号	出土区	層位	器種及び石材	破損部位	重さ(g)	大きさ(mm) 長さ	幅	厚さ	抉り(mm) 深さ	幅	先端角度
40	6	I	使用痕ある剝片・黒色ｏｂ		2.69	33.5	17	8.5			
41	11	I	剝片・灰青色ｏｂ		5.58	22	45	9.5			
42	12	I	剝片・灰青色ｏｂ		13.28	52	25	13			
43	8	I	〃・黒色ｏｂ		1.99	23	18	6			
44	18	I	石匙・安山岩	——	15.40	41	55	9.5			
45		I	石斧・貢岩	——	74	83	31	20.5			
46	11	I	打製石斧・安山岩	——	69	69	49	19			
47	6	I	石斧・安山岩	——	63	83	38	12.5			
48	14	I	石斧・安山岩	——	110	105	35	21			
49	13	I	石斧・安山岩	——	10	57	12.5	10.5			
50	6	I	スクレーパー・安山岩	——	29	67	41	14			
51	6	I	スクレーパー・安山岩	——	20	59	42	9.5			
52	12	I	スクレーパー・安山岩	——	69	82	49.5	13.5			
53	6	I	スクレーパー・安山岩	——	21	57.5	44	9.5			
54	12	I	スクレーパー・安山岩	——	62	88	66	9			
55	15	I	砥石・砂岩	——	140	65.5	82.5	10.5			
56	15	I	石核・安山岩	——	41.55	43	52	17			
57	8	II	石鏃・灰白色ｏｂ		1.68	36	18	4			60°
58	3	II下	〃・黒色ｏｂ		1.94	20	17	6			60°
59	13	II上	〃・安山岩		2.89	25.5	19	7			85°
60	13	II下	〃・〃	C		22.5	12	5.5	2		60°
61	1	II	〃・黒色ｏｂ		1.59	20.5	20	5			
62	4	II	〃・灰青色ｏｂ	完	1.78	22	20	5	2	13	65°
63	8	II	〃・〃	完	1.12	23	18	5	7	5	55°
64	6	II	〃・〃	A	1.25	21	20	5	7	6.5	55°
65	9	II	〃・〃	C	0.76	22.5	15	4	7.5	7.5	50°
66	6	II下	〃・黒色ｏｂ	C	0.40	21.5	12	2.5	7		40°
67	16	II中	〃・灰青色ｏｂ	完	0.95	25	20	4	8		45°
68	11	II	〃・〃	D	1.11	22	11	5	5		45°
69	11	II	〃・黒色ｏｂ	E	1.03	22	15	5	8	5	45°
70	9	III	〃・〃		0.28	14	11	2.5			75°
71	12	II	〃・灰青色ｏｂ	B	0.79	19	15	5	4.5		65°
72	14	II	〃・安山岩	C	2.01	30	20	5	9		45°
73	13	II下	〃・黒色ｏｂ	C	0.52	22	12	3	8		55°
74	4	II	〃・〃	C	1.53	32	19	4	9		45°
75	9	IIかべ	〃・〃	C	1.5	38	8.5	5	6	5	30°
76	4	II	〃・〃	C	1.92	28	16	6			80°
77	8	II	〃・灰白色ｏｂ	C	1.86	15	17	5.5			80°
78	11	I	〃・黒色ｏｂ	D	0.56	23.5	9.5	3	8.5		45°

※破損部位で完；完形　A；先端部破損　B；両脚破損　C；片脚破損　D；先端部片脚破損
E；先端部両脚破損　F；脚部のみ

第5表　石器計測表③

挿図番号	出土区	層位	器種及び石材	破損部位	重さ(g)	大きさ(mm)			抉り(mm)		先端角度
						長さ	幅	厚さ	深さ	幅	
79	12	II	石鏃・黒色ｏｂ	C	1.52	30	10.5	4.5	11		60°
80	8	II	〃・灰青色ｏｂ	C	1.2	24	18	5	6	5	75°
81	13	II上	〃・黒色ｏｂ	完	1.18	23	20.5	4	9.5	9	75°
82	8	II	〃・〃	完	0.6	17	14	3	6	12	75°
83	9	II	〃・黒色ｏｂ	C	0.8	21.5	12	5	8	3	60°
84	8	II	〃・〃	C	0.64	21	11	4	7.5		55°
85	8	II	〃・灰青色ｏｂ	A	1.25	23	17	5	6.5	7	45°
86	5	II下	〃・黒色ｏｂ	完	1.34	25	21	5.5	9.5	6	60°
87	9	II	〃・安山岩	完	1.0	21.5	21	3	8.5	7	60°
88	14	II	〃・〃	C	1.12	2.6	21.5	4.5	9		65°
89	13	II下	〃・黒色ｏｂ	C	1.74	28	17	6	9.5	6	50°
90	6	II下	石鏃・灰青色ｏｂ	C	(0.80)	20.5	(15)	4	8		45°
91	13	II下	石鏃・灰青色ｏｂ	C	(1.34)	32	(16)	4	8		55°
92	8	II	石鏃・灰青色ｏｂ	C	(1.23)	28.5	(17.5)	4.5	7		45°
93	10	II下	石鏃・黒色ｏｂ	完	1.06	28	16	4	8	6	40°
94	5	II	石鏃・黒色ｏｂ	C	(0.58)	20	(19)	3.5	7.5		60°
95	8	II	石鏃・黒色ｏｂ	B	(2.20)	(36)	(19.5)	5.5	10		60°
96	7	II中	石鏃・黒色ｏｂ	完	0.46	20	13	2.5	4	6	60°
97	6	II下	石鏃・灰白色ｏｂ	D	(1.1)	(25)	(12.5)	4	4	3	40°
98	9	II	石鏃・黒色ｏｂ	C	(0.90)	23	(13)	4.5	4	5	45°
99	13	II上	石鏃・灰青色ｏｂ	C	(1.61)	25	(15)	7	5	7	45°
100	11	II下	石鏃・黒色ｏｂ	C	(3.18)	34	(20)	8	3		45°
101	9	II	石鏃・黒色ｏｂ	C	(0.67)	24	(12)	3.5	5.5		40°
102	6	II下	石鏃・黒色ｏｂ	C	(1.09)	22	(19)	6	5		55°
103	12	II	石鏃・チャート	C	(0.78)	22.5	(13)	3	5.5		45°
104	5	II下	石鏃・黒色ｏｂ	B	(1.19)	(18)	(15)	6			55°
105	12	II	石鏃・黒色ｏｂ	D	(0.80)	(22.5)	(12.5)	4	3.5		65°
106	6	II	石鏃・灰青色ｏｂ	A	(0.95)	(16.5)	20	4	7	7	
107	5	II	石鏃・灰青色ｏｂ	C	(0.41)	(19.5)	(12.5)	3	7.5		55°
108	13	II上	石鏃・黒色ｏｂ	E	(1.26)	(28)	(15)	5			40°
109	11	II	石鏃・黒色ｏｂ	B	(1.17)	(27.5)	(17)	4			70°
110	16	II下	石鏃・灰白色ｏｂ	B	(0.59)	(21.5)	(12)	4			50°
111	13	II	スクレーパー・黒色ｏｂ	——	3.48	23.5	20	9.5			
112	13	II下	スクレーパー・黒色ｏｂ	——	3.23	33	18	6			?
113	12	II	スクレーパー・灰青色ｏｂ	——	2.91	28	21	6.5			75°
114	7	II	スクレーパー・黒色ｏｂ	——	3.20	25.5	21	8			
115	4	II	スクレーパー・黒色ｏｂ	——	2.68	23	23	7			
116	6	II	スクレーパー・黒色ｏｂ	——	2.8	19.5	26	7.5			
117	6	II	スクレーパー・灰青色ｏｂ	——	9.4	25.5	37	10.5			

※破損部位で完；完形　A；先端部破損　B；両脚破損　C；片脚破損　D；先端部片脚破損
E；先端部両脚破損　F；脚部のみ

第6表　石器計測表④

挿図番号	出土区	層位	器種及び石材	破損部位	重さ(g)	大きさ(mm) 長さ	幅	厚さ	抉り(mm) 深さ		先端角度
118	12	II	スクレーパー・灰白色ｏｂ	——	7.98	22	41	11			
119	7	II下	石斧・砂岩	——	168	90	54	24.5			
120	5	II	〃・蛇紋岩	——	119	98	48	21			
121	9	II	不明石器・絹雲母片岩	——	43.99	84	34	11			
122	10	II	石斧・貢岩	——	260	134	41	33			
123	6	II下	〃・〃	——	31	40	44	15			
124	5	II	スクレーパー・安山岩	——	32	70	43.5	12			
125	15	II上	砥石・砂岩	——	61	50	52	11.5			
126	12	II	石核・	——	83	69	36.5	27.5			
127	16	II上	砥石・砂岩	——	43	59	50	12			
128	5	II	スクレーパー・安山岩	——	52	76	52	14			
129	8	II	有溝砥石・〃	——	140	47.5	74	43.5			
130	4	II	石核・〃	——	210	79	61	32			
131	8	II下	砥石・砂岩	——	220	85	70	21.5			
132	5	II	砥石・砂岩	——	120	61	76	18			
133	6	II	ピエス・エスキース・灰青色ｏｂ	——	2.50	28.5	11.5	10.5			
134	7	II中	剝片・黒色ｏｂ	——	1.18	28	11	7.5			
135	11	II	スクレーパー・安山岩	——	6.10	24	41	8.5			
136	9	II	〃・灰青色ｏｂ	——	12.55	25.5	33	15			
137	8	II	石核・黒色ｏｂ	——	17.66	46	25	19			
138	10	II下	石槍・安山岩	——	30	97	32.5	11.5			
139	4	II	スクレーパー・〃	——	25	55	35.5	15			
140	2	III下	石鏃・黒色ｏｂ	C	1.13	22	18	5			
141	15	III上	石鏃・灰青色ｏｂ	完	1.21	28.5	12	5.5	2	11	75°
142	8	III	石鏃・灰青色ｏｂ	A	1.43	23	18	5.5	3.5		50°
143	14	III上	石鏃・黒色ｏｂ	D	0.63	15.5	16	4			65°
144	12	III	石鏃・安山岩	C	1.21	23	16	5	2.5		50°
145	18	カクラン	石鏃・灰黒色ｏｂ	D	0.89	19	15.5	5	4.5	9	55°
146	2	III下	石鏃・チャート	B	0.48	7.5	14	3.5	4.5	6	50°
147	14	III下	石鏃・灰白色ｏｂ	完	0.99	24.5	17.5	4	6	8	60°
148	12	III	石鏃・灰青色ｏｂ	C	0.95	23	16	6	7	7	40°
149	12	III	石鏃・安山岩	完	0.62	18	17	3	6.5	11	60°
150	9	III	石鏃・安山岩	完	0.94	22.5	20	3	7.5	11	45°
151	9	III	石鏃・灰白色ｏｂ	A	1.84	26.5	22	5	7	8	45°
152	12	III下	石鏃・黒色ｏｂ	B	1.84	28	20	5			45°
153	3	III下	トロトロ石器・灰白色ｏｂ	D	1.42	25	18	4	5	6	
154	9	III	スクレーパー・黒色ｏｂ	——	1.10	17.5	17	5			
155	14	III上	〃・安山岩	——	6.23	23	29	10			
156	18	カクラン	〃・黒色ｏｂ	——	6.95	39	21.5	13			

※破損部位で完；完形　A；先端部破損　B；両脚破損　C；片脚破損　D；先端部片脚破損
E；先端部両脚破損　F；脚部のみ

第７表　石器計測表⑤

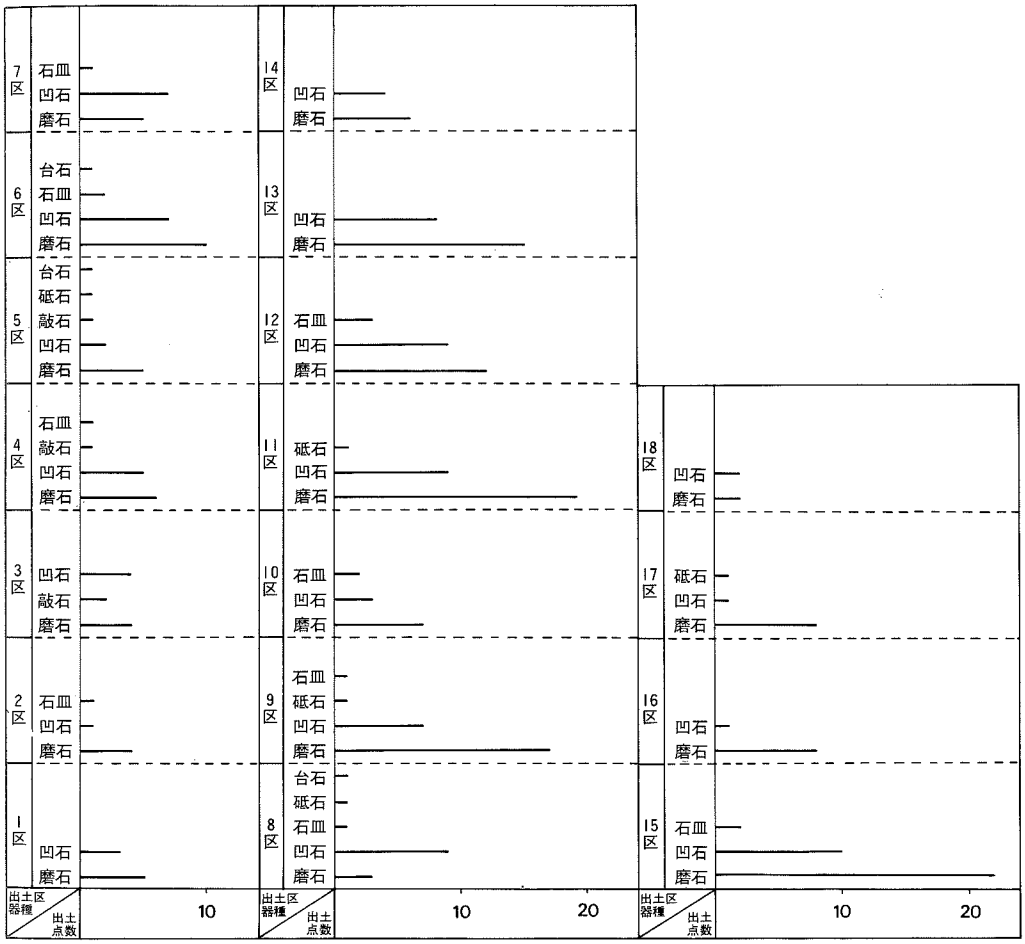
挿図番号	出土区	層位	器種及び石材	破損部位	重さ（g）	大きさ（mm）			抉り（mm）		先端角度
						長さ	幅	厚さ	深さ	幅	
157	14	Ⅲ上	石核・安山岩	——	69	45	59	29			
158	6	Ⅲ	剝片・黒色ｏｂ	——	14	25	33	18			
159	11	Ⅲ	彫器・安山岩	——	22	59	17.5	18			
160	2	Ⅲ下	石核・黒色ｏｂ	——	25.14	55	28	22.5			
161	13	Ⅲ上	スクレーパー・安山岩	——	25	51	34	12.5			
162	〃	Ⅲ	石斧・　〃	——	80	71	41	20			
163	〃	Ⅲ	〃　・貢岩		230	98	66	20			
164	〃	Ⅲ	〃　・　〃	——	108	107	56	12.5			
165	8	Ⅱ	石斧・安山岩	——	80	73	51	13.5			
166	6	Ⅲ	〃　・貢岩	——	48	66	29	17.5			
167	8	Ⅲ	砥石・砂岩	——	110	71	94.5	10.5			
168	11	Ⅲ	〃　・　〃	——	202	91	72	33.5			
169	10	Ⅰ	石斧・貢岩	——	30	55	38	16			
170	8	Ⅳ	石鏃・黒色ｏｂ	D	1.48	26	19	5	11	6	
171	9	KD1	〃　・チャート	完	0.9	23.5	13	5.5			
172	7	〃	〃　・黒色ｏｂ	〃	0.76	21	10.5	3	4.5	8	40°
173	9	〃	〃　・　〃	B	0.62	23	12	4	6	4	40°
174	〃	〃	〃　・　〃	完	1.1	26	16.5	4	7.5	8	45°
175	〃	〃	〃　・灰青色ｏｂ	A	1.08	23	19	4	6	10	45°
176	7	〃	〃　・　〃	D	1.20	38	12.5	4.5	14	—	25°
177	18	カクラン	〃　・黒色	C	1.07	21	18	4	2.5	—	65°
178	H		〃　・　〃	C	0.49	20	12	3	4	—	50°
179	13	Ⅲ上	〃　・　〃	E	1.32	23.5	16	6			35°
180			〃　・　〃	F	1.63	23	13.5	6.5			
181	28	Ⅰ	彫器・　〃		12.47	51.5	20.5	11.5			
182			台形石器・　〃			19	19	7			
183	12	Ⅱ	石核・安山岩		1,030	170	95	64			
184	9	Ⅰ	〃　・　〃		570	102	100	52			
185	H		スクレーパー・　〃		337	132	101	30.5			

※破損部位で完；完形　A；先端部破損　B；両脚破損　C；片脚破損　D；先端部片脚破損
E；先端部両脚破損　F；脚部のみ

b．磨石・凹石・敲石・砥石・石皿・台石

昭和55～57年調査[註1]同様に今回も多量の石器が出土した。遺物総数は，599点，地区別では，1区が11点，2区が22点，3区が28点，4区が26点，5区が21点，6区が39点，7区が24点，8区が23点，9区が62点，10区が28点，11区が57点，12区が57点，13区が45点，14区が17点，15区が50点，16区が19点，17区が18点，18区が10点と表面採集資料42点が出土している。(第50図)

器種別では，磨石177点，凹石99点，石皿17点，砥石4点，敲石9点，台石3点がある。これらについて，代表的な出土資料を図化しているので以下説明を加えたい。



第50図　地区別出土石器

磨石（第51図）

表面が本来丸みを持った自然石であるものが，両面あるいは片面を擦ることによって平たい面が形成されたものと考えられる石器である。形態は，楕円形を呈したものと棒状のものとがある。1の磨石は，正面が自然の丸みをもつが，側面と裏面に擦りによる扁平な面を形成して

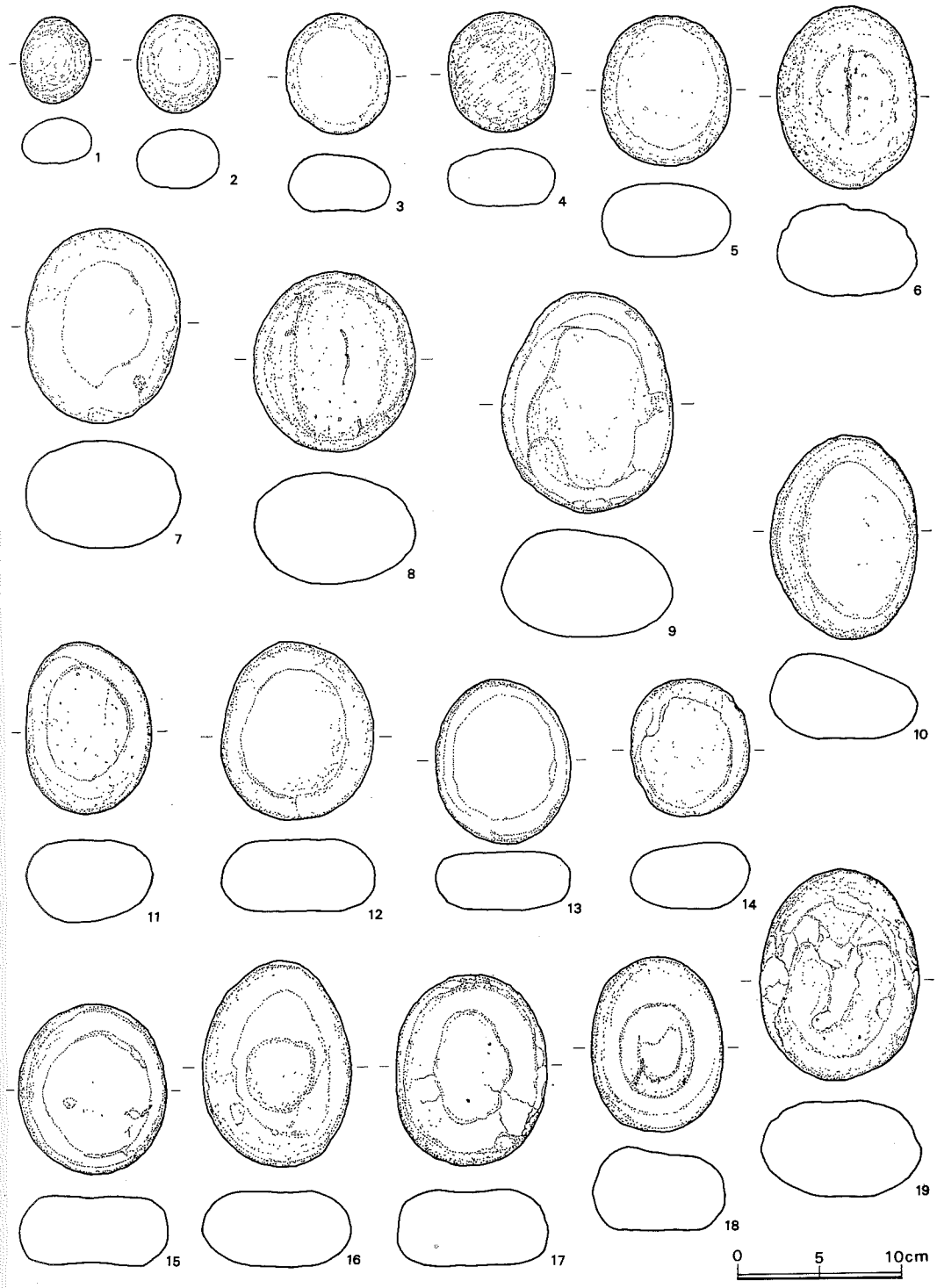
いる。2も1と同様で側面と裏面がやや扁平となっている。3は，正裏面に擦りによる痕跡が認められる。また，中央部がやや凹んだ状態にある。4は，裏面に扁平な面を持つ。5は，ほぼ円形の形状を呈し裏面に平な面を形成している。6は，長丸の形状を呈し，裏面が平坦である。黒い斑晶が入る。7は，正裏面の頂部が平になり側面には部分的に擦れた痕跡が残る。8は，正裏面の中央部から右側にかけて平な擦りの痕跡が認められる。9は，正面頂部の周辺が擦りによって平な面を形成している。10は，正裏面から擦っており，断面でもわかるように中央部から右側面部にかけて傾斜している。11は，正面頂部周辺の7×4.5cm程度が平で裏面は，中央から右側擦りによって傾斜している。12は，正裏面が平に擦りあがり，上部から下部に傾斜している。13は，正裏面ともかなり使用したらしく頂部の丸みがなくなるほどに擦りあげている。14は，正裏面にやや凹んだ状態が認められるが，擦りあげによって正裏面右側辺が平になっている。

凹石（第51～52図）

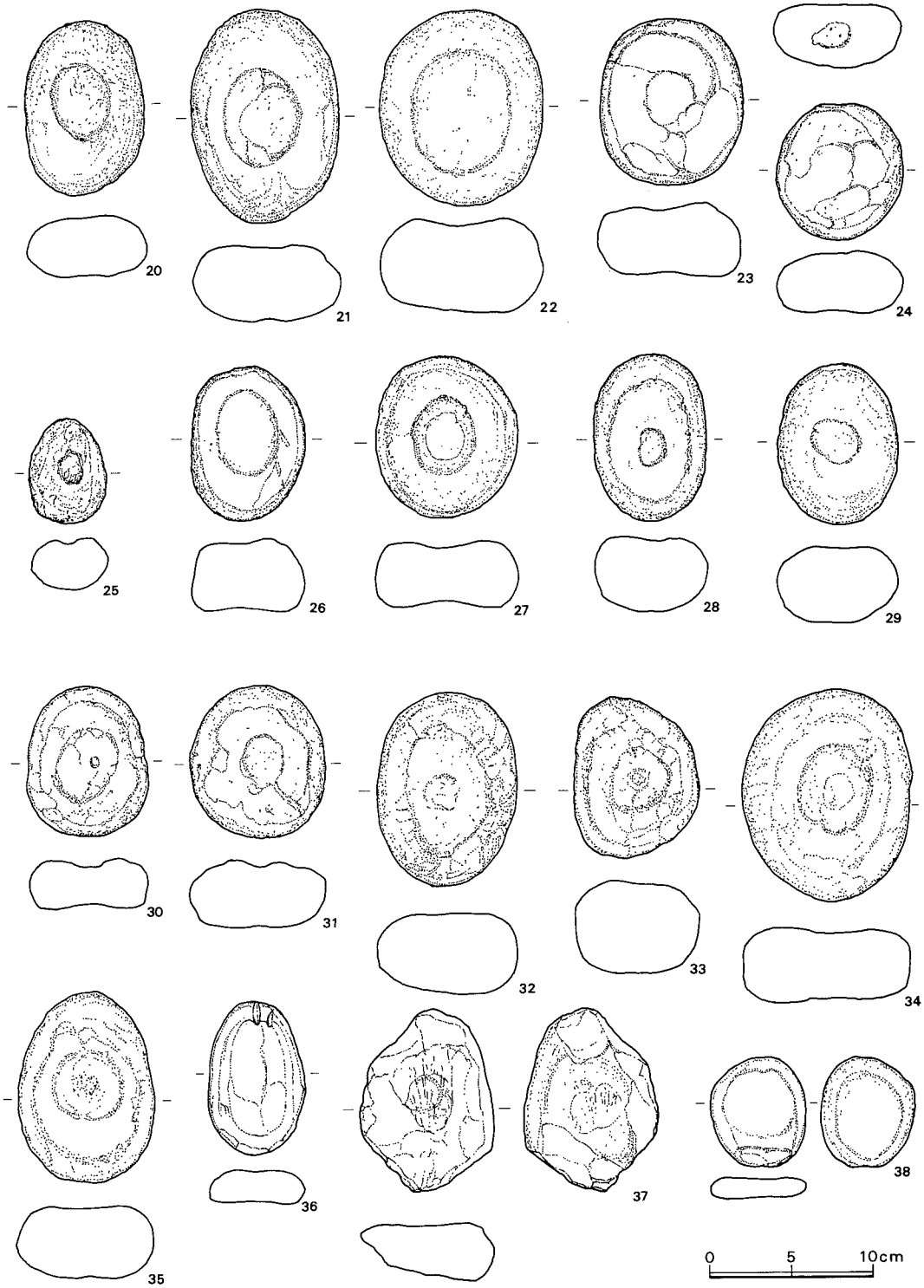
これには，中央部が両面と片面凹むものとがある。

15は，正裏面の稜縁辺まで平らな形状をなし，中央部に凹みを有する。16は，正面中央部に敲打による凹み部があるが，裏面は，中央から稜周辺部にかけ平な面を形成している。17は，正裏面ともに浅い凹み部があり，裏面は上部と下部が擦れて平となっている。18も正裏面に凹みを持つが，正面の凹みがより深く裏面は，擦りによって浅い凹みとなっている。19は，正裏面に浅い凹みが認められる。20は，両面に浅い凹みがみられる。長丸の円礫を用いている。21は，正面に浅い凹みがつき裏面は，敲打したものか凸凹した面が中央部にある。22は，比較的大きな凹みがつき，やや深い。裏面は調査時の傷が入り成形状態が不明である。23は，正裏面ともに凹みがあり，稜周辺部にかけては平な面をなしている。24は，正裏面に浅い凹みが認められ上縁端部には，打撃の痕跡が残る。25は，凹石中もっとも小型のもので，正面にのみ凹みが入る。裏面は，平な面となっている。26は，正裏面に凹みを形成している。裏面の凹みが比較的広く，稜周辺部にまでひろがっている。27は，正裏面ともに凹みを形成し，また，凹みから稜周辺部にかけては平な面をなしている。28は，正面凹み面が中央部にありその周辺は平に形成している。裏面は自然面の状態である。29は，正面中央部に凹みを形成する他は裏面，凹み周辺ともに自然面の状態である。30は，正裏面ともに凹み部を形成し凹み部から稜周辺にかけては，平に擦り削られた状態である。31は，正面に幅3×2.4cmに深さ0.6cm程度の凹みを形成している。裏面は0.9×0.9cm程度の小さな凹みが認められる。32は，正面に浅く広い凹みが残る。裏面は，稜周辺部まで平な面を形成している。33は，正面中央に凹みを形成するが，裏面には凹み部はない。34は，正裏面に凹み部があるが裏面の凹みは浅く広がった状態をなしている。35は，正面中央部に凹みがあり，裏面は打撃による凹みであろうか，いびつな凹みとなっている。

砥石（第52図）



第51図　出土石器（磨石・凹石）



第52図　出土石器（凹石・砥石）

いずれも砂岩を用いている。溝状に凹みがあるものと凹石のように中央に丸い凹みを形成しているものとがある。

36は，正裏面がやや凹み上部に幅0.3cm，長さ1.7cmの溝とその右側に２本の浅いすじ状の溝がある。37は，裏面の中央部が摺鉢状に凹み中央部は，敲打の痕跡がある。また，正面にも敲打の跡が中央部に残る。38は，中央部に浅い凹みがあり縁辺は擦りあげたような稜が入る。

棒状磨石（第53図）

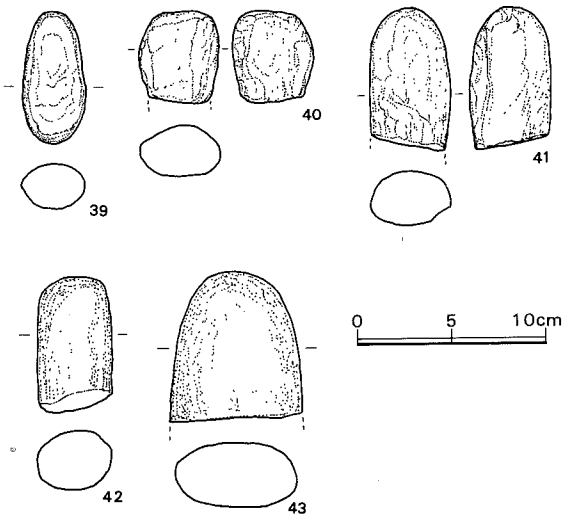
磨石の幅が短く，長軸が長いものである。

39は，上部と右側縁に顕著な擦りあげ痕が残る。40は，裏面を擦りあてて平な面を形作っている。41も，裏面を擦りあてて平な面をなしている。42は，上部に敲打の痕跡らしい跡があるが，風化が著しくはっきりしない。43は，やや幅が広い磨石で右側辺に擦り上げた状態が残る。

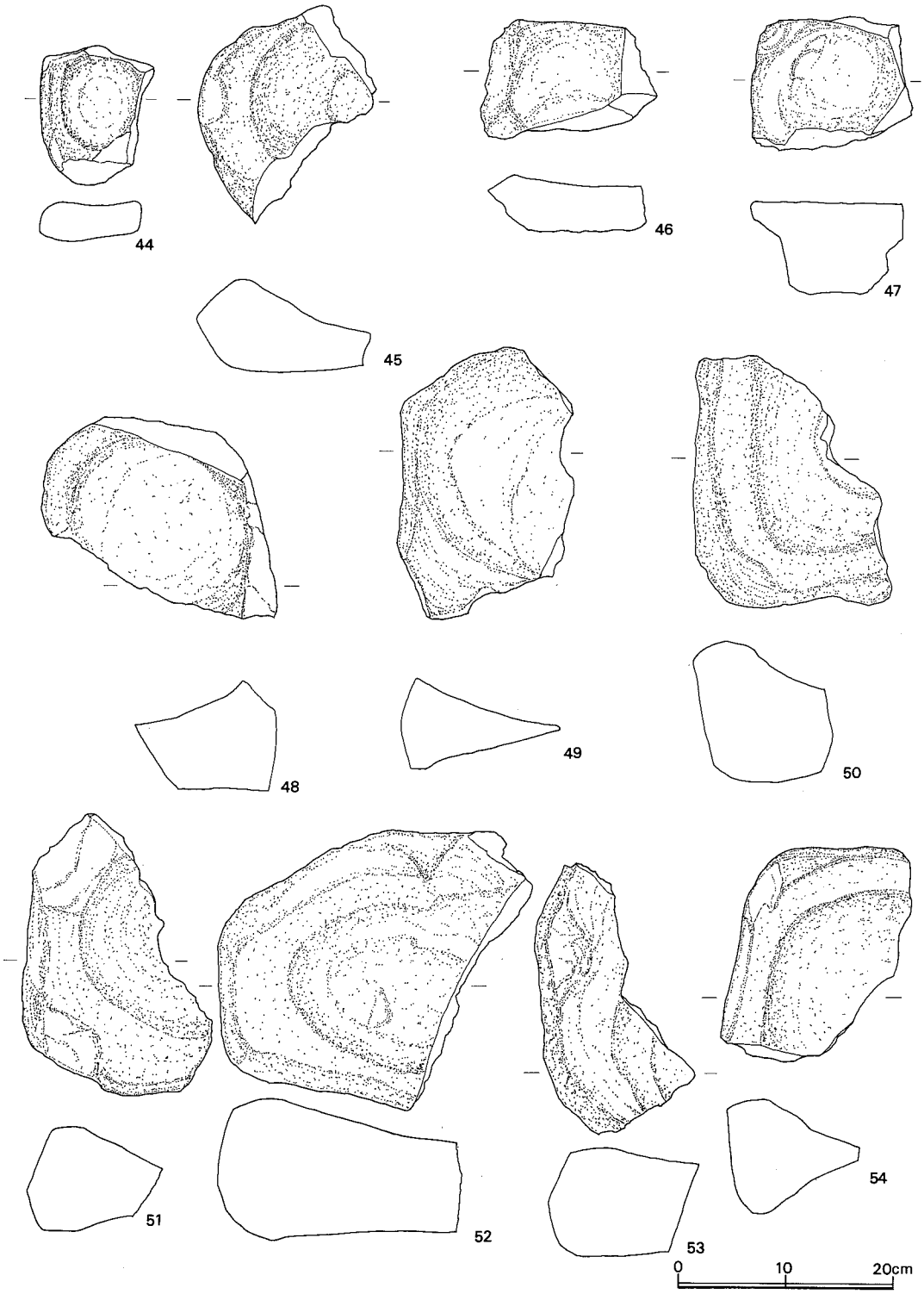
石皿（第54～55図）

中央部が大きく凹むものと，中央部から一端部にかけて細長く凹むものがある。

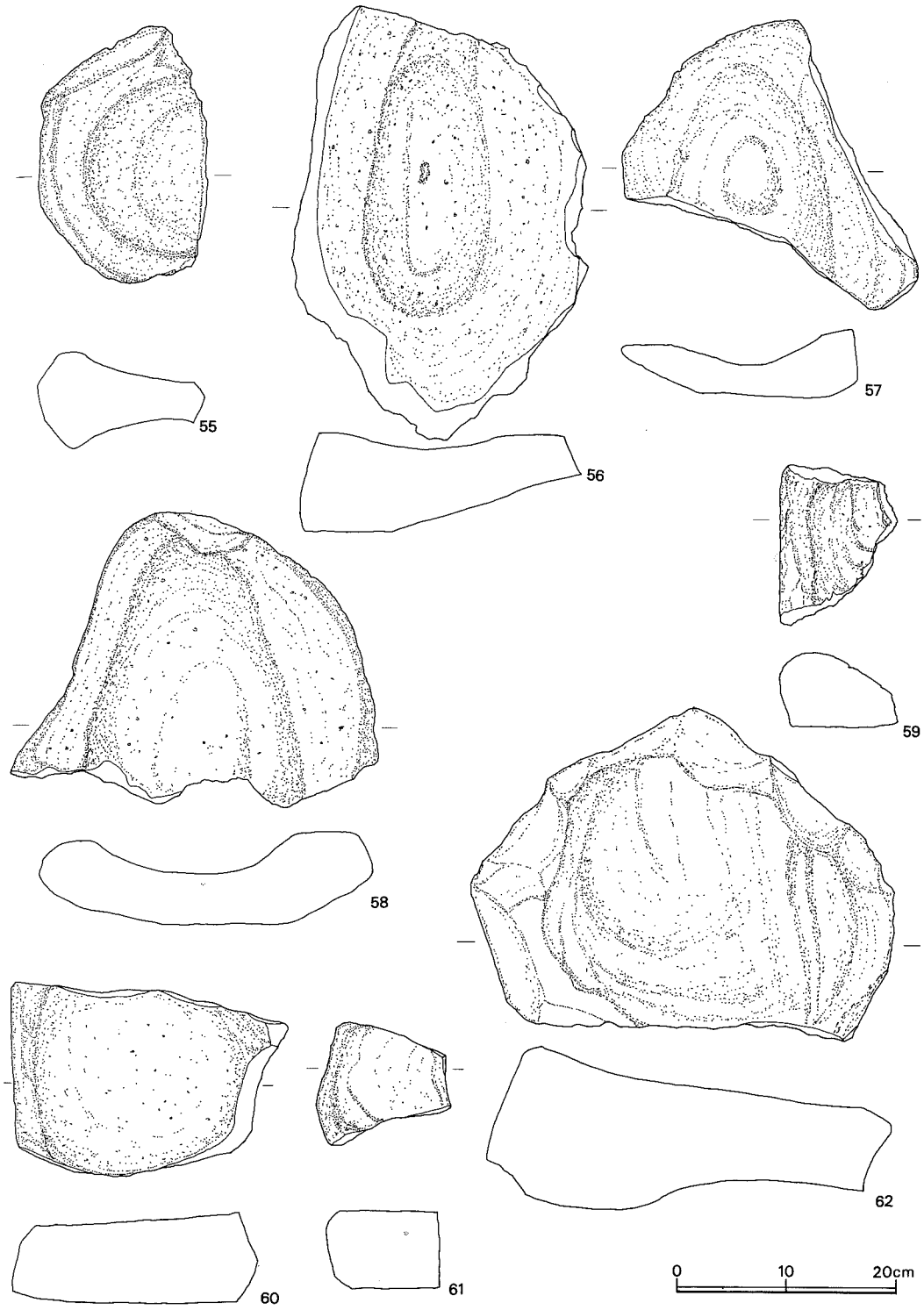
44は，比較的薄手の断面をなす小片である。縁辺から丸みを持ってしだいに凹みが深くなる。裏面は，ほぼ平な状態である。45は，断面の厚さが，縁辺で8.5cm，中央部で３cm程度あり，厚さの差が５cmある。黒い斑晶が混じる。46は，石皿の断片で，縁辺から中央に向かって摺鉢状に凹む。47は，石皿の縁辺部にあたる部分で断面の厚みが最厚で10cmある。48は，中央部の約⅓が残存している。中央部が広く凹みその縁辺は幅４cmほどが平な面をなしている。裏面は自然面の状態で凸凹している。49は，正裏面ともに摺鉢状に凹み，縁辺の断面約10cmに対し，中央部の厚さが0.5cmと非常に薄くなっている。50は，縁辺の断面で約12cmある。縁辺から凹みだす間は，丸みを帯びその幅は約３cm前後ある。裏面は，自然面を残す。51は，両面を利用した石皿である。縁辺から凹みだす間は約４cm前後と比較的広い。52も両面を利用しているが，正面が深く，裏面は浅い。約½を残す。凹み部の形状は長楕円形を呈する。断面の厚さは最厚で約14cm，薄い部分で約８cmある。53は，石皿の縁辺部の残存品で，正面に凹み始める部分が認められるが，裏面は，平な面をなしている。54は，両面ともに利用し，断面最厚部で10.5cm，中央部の薄いところで1.2cmとなっている。火を受けたのか左側辺が黒く変色している。55は，縁辺から凹み始める間の幅が３cm前後で，もっとも厚みのある



第53図　出土石器（棒状磨石）



第54図　出土石器（石皿）



第55図　出土石器（石皿・台石）

縁辺で厚さ9cm，凹みの中央部では厚さ3.2cmある。両面が凹むが，裏面の縁辺は削り取られた状態である。56は，ほぼ完形品に近い石皿で，凹み部の大きさは，縦の長さが26cm，幅10cmほどである。形状は，上部に浅い段があり，これからさらに縁辺に浅い凹みがつく。裏面は自然面のままである。57は，⅓程度が残るもので，上部の縁辺は薄く下部は，5cmほどの厚みがある。凹み中央部で約3cmある。上部の縁がなく，中のものを掃き出しやすいような作りをしている。58は，上部から下部へ扇状に凹みが広がる。裏面は，平坦な自然面である。縁は，右側で6cm，左側で3cmを測る。約½が現存している。59は，石皿の縁辺部である。裏面は，平坦な自然面である。62は，重量のある石皿で正裏面に浅い凹みがあるが，縁辺との段差はほとんど見られない。

台石（第55図）

凹みがなく平坦な厚みのある断面を有し，正裏面が擦れたり打撃痕が残っているものをあつかっている。

60は，縁辺からやや凹みがかるが，ほぼ平坦な面を形成し，正面は滑らかである。裏面は比較的平坦で自然面のままである。61は，60と同様に平坦な面を形成した台石の縁辺部である。裏面は，平坦な自然面をなしている。

以上のような資料の出土があった。

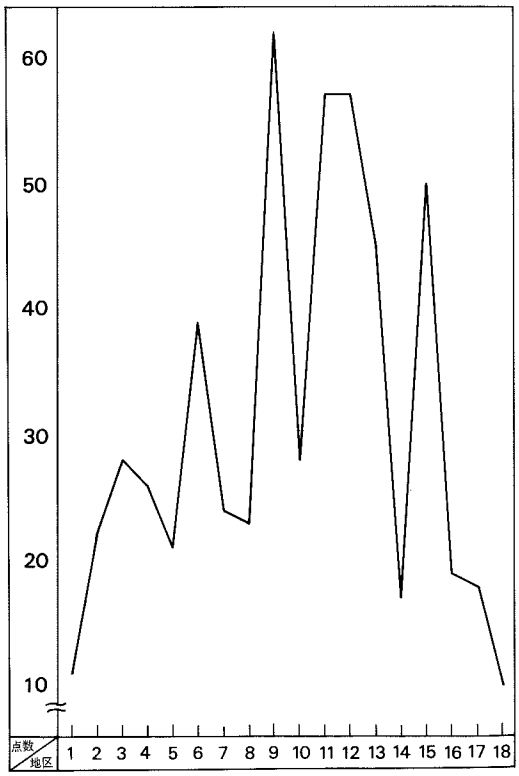
小結

第56図の地区別の石器出土状況から，調査区3・6・9・11・12・15区に石器の集中分布があり，生活の主体がこの地区にあったことが推測される。

また，これら石器に関するセット関係で石皿の出土する地区が，磨石の出土点数で相対的に多い傾向を窺わせている。

磨石と凹石の重量比較では，磨石が100～200gと400～500gに集中する点数が多いのに対し，凹石は500～700gの間に集中している。（第57図）

これらの石器の用途については，主に植物質食料の磨り潰し，粉化という加工・調理を目的とした道具であろうと推定されている。これを考慮すると，約600点（磨石・凹石・石皿）という多量の石器の点数は，定住生活が一時期行われていた状況証拠としてあげられ



第56図　地区別石器出土点数

る。

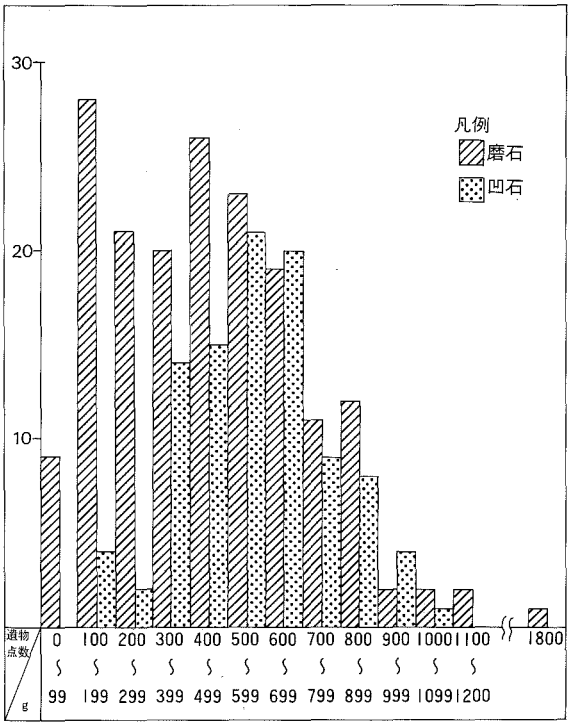
注1　高野晋司編『弘法原遺跡』吾妻町の文化財7長崎県吾妻町教育委員会1983

参考文献

1　安達厚三「石皿」『縄文文化の研究』7道具と技術雄山閣出版株式会社1983

2　鈴木道之助著『石器入門事典』縄文柏書房株式会社1991

3　三輪茂雄『粉の文化史』—石臼からハイテクノロジーまで—新潮選書1986



第57図　重量別　磨石・凹石グラフ

第8表　石器計測表⑥

図番号	出土区	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考	図番号	出土区	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
1	K02-14-Ⅰ	磨石	5.1	4.3	2.7	90	(431)	14	14-Ⅰ	磨石	8.1	7.3	3.8	350	(429)
2	90弘周辺H	磨石	6.6	5.2	3.5	150	(591)	15	3-Ⅱ下	凹石	10.0	9.0	4.0	550	(44)両面
3	K02-14-Ⅰ	磨石	7.1	6.3	3.3	210	(430)	16	12-Ⅱ	凹石	12.2	9.1	4.6	730	(345)片面
4	13-Ⅱ下	磨石	7.1	6.7	3.2	220	(416)	17	14-Ⅰ	凹石	11.4	9.2	4.4	710	(425)片面
5	11-Ⅲ	磨石	8.8	7.8	4.4	450	(308)	18	15-Ⅰ	凹石	10.2	8.0	4.6	630	(446)両面
6	11-Ⅲ	磨石	10.5	8.4	5.3	650	(307)	19	13-Ⅱ上	凹石	12.5	9.7	5.7	880	(405)両面
7	13-Ⅱ上	磨石	11.5	9.5	6.1	860	(404)	20	11-Ⅱ	凹石	10.3	7.5	3.7	380	(287)両面
8	13-Ⅱ上	磨石	10.5	9.9	6.3	980	(407)	21	13-Ⅱ	凹石	12.6	9.2	4.7	730	(402)両面
9	11-Ⅱ	磨石	12.8	10.3	6.3	110	(280)	22	11-H	凹石	11.4	10.2	5.7	970	(266)片面
10	11-Ⅱ	磨石	11.7	9.9	4.2	780	(284)	23	13-Ⅱ	凹石	10.0	9.0	4.5	630	(403)両面
11	11-Ⅱ	磨石	9.9	8.0	5.0	620	(281)	24	15-Ⅱ上	凹石	8.2	7.8	3.7	370	(457)片面
12	11-Ⅱ下	磨石	10.4	9.3	4.5	630	(295)	25	17-Ⅳ上	凹石	6.2	4.8	3.1	110	(515)片面
13	12-Ⅰ	磨石	9.8	8.4	3.3	420	(327)	26	6-Ⅰ	凹石	9.2	6.9	3.6	390	(96)両面

第9表　石器計測表⑦

図番号	出土区	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考	出土区	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
27	8-II	凹石	9.7	8.9	3.9	540	(159)両面	K02-1-I	凹石	12.4	10.3	4.5	810	(1)両面
28	11-II下	凹石	10.0	7.0	4.4	420	(298)片面	1-I	磨石	10.7	8.5	5.0	750	(2)
29	15-II上	凹石	9.6	7.5	4.6	440	(458)片面	1-I中	凹石	9.5	7.1	3.8	390	(543)両面
30	4-II	凹石	9.2	7.5	2.9	260	(63)両面	1-I中	凹石	6.2	5.4	2.4	120	(545)片面
31	8-II	凹石	9.2	8.6	4.0	390	(160)片面	1-I中	磨石	8.3	8.7	6.3	630	(542)
32	11-III	凹石	11.4	8.6	4.2	530	(306)片面	1-I中	磨石	6.9	5.0	4.3	210	(544)
33	12-I	凹石	9.6	7.8	5.7	570	(324)片面	1-III下	磨石	11.3	5.8	5.3	390	(5)
34	12-II	凹石	12.7	10.5	4.6	910	(342)両面	2-I	凹石	12.2	8.8	4.8	600	(6)両面
35	12-II	凹石	11.6	9.0	4.8	630	(341)片面	2-I	磨石	9.3	7.6	4.3	480	(7)
36	17-I	砥石	9.2	6.0	2.0	150	(504)	2-I	磨石	8.6	8.9	5.0	360	(8)
37	K02-5KD4	砥石	10.9	8.3	3.3	380	(93)	2-I	磨石	6.6	5.8	2.5	140	(9)
38	8-II	砥石	6.7	5.9	1.3	90	(164)	2-I	磨石	11.8	9.0	5.4	860	(10)
39	1-I-中	磨石	6.7	3.4	2.4	80	(546)縦長	3-I	磨石	6.8	5.1	3.2	140	(28)
40	2-II中	磨石	5.1	4.0	2.6	70	(21) ½現存・縦長	3-I	磨石	6.1	5.1	3.0	80	(30)
41	13-II下	磨石	7.5	4.5	2.8	150	(420) ½ 〃	3-I	敲石	7.9	6.8	3.6	310	(29)
42	12-II	磨石	6.7	3.7	3.8	120	(358) ½現存・縦長	3-I	敲石	10.7	10.0	5.0	570	(33)
43	14-I	磨石	7.9	7.0	3.2	30	(435) 〃	3-II上	凹石	10.5	9.1	4.6	620	(38)両面
44	6-I	石皿	12.8	10.2	3.8	490	(99)	3-II上	凹石	10.4	5.18	4.0	470	(39)片面
45	4-II	石皿	18.6	14.0	8.5	2410	(533)	3-II上	磨石	9.0	8.7	7.1	840	(40)
46	9-H	石皿	16.5	11.1	5.5	1190	(534)	3-III上	凹石	9.8	7.0	4.2	450	(48)片面
47	8-I	石皿	15.5	12.2	10.0	2100	(175)	3-III上	磨石	7.8	6.3	3.8	250	(50)
48	10-I	石皿	14.8	24.0	12.0	4500	(264)	3KD1-S1	磨石	9.5	7.5	6.0	510	(583)
49	7-II中	石皿	25.2	16.3	9.7	3440	(153)	3KD1-S2	凹石	9.4	8.1	5.7	640	(584)両面
50	10-I	石皿	24.8	18.0	13.0	6000	(265)	3KD1-S3	磨石	11.1	8.7	4.0	550	(585)
51	12-II	石皿	25.4	18.8	10.3	4200	(378)	4-I	磨石	8.1	6.9	4.2	340	(51)
52	H	石皿	31.8	25.1	13.4	11000	(598)	4-II	凹石	10.1	9.2	5.3	800	(57)片面
53	12-II	石皿	25.3	14.1	10.5	3730	(377)	4-II	凹石	9.7	8.7	4.1	500	(61)両面
54	2-III下	石皿	21.6	15.0	12.0	4180	(26)	4-II	凹石	11.8	9.3	5.5	900	(62)片面
55	H	石皿	23.2	15.6	9.5	3770	(597)	4-II	凹石	13.1	7.0	4.6	810	(71)片面
56	6-II	石皿	38.7	27.0	14.0	12000	(129)	4-II	磨石	10.4	9.2	6.2	870	(58)
57	15KD1	石皿	29.3	26.8	6.7	2830	(484)	4-II	磨石	9.3	7.7	4.9	510	(59)
58	15-I	石皿	30.1	28.3	8.8	7000	(483)	4-II	磨石	9.3	6.6	3.5	310	(60)
59	12-II	石皿	14.5	10.7	7.0	4230	(370)	4-II	磨石	6.0	4.1	3.9	130	(64)
60	6-I	台石	25.4	17.4	9.0	6000	(128)	4-II	磨石	9.4	8.3	4.0	470	(72)
61	8-I	台石	15.5	12.2	10.0	2100	(175)	4-II	敲石	6.6	5.5	2.9	150	(67)
62	H	石皿	39.1	29.7	15.0	1700	(599)	5-I	凹石	10.2	7.0	5.1	560	(76)両面

第10表　石器計測表⑧

出土区	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考	出土区	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
K02-5-I	磨石	9.7	9.5	4.0	500	(77)	K02-8-II	凹石	14.0	11.1	5.2	1000	(155)片面
5-II	磨石	9.7	8.1	5.3	580	(78)	8-II	凹石	10.4	8.9	3.6	480	(156)片面
5-II下	凹石	8.9	8.1	3.1	450	(83)両面	8-II	凹石	11.5	8.0	5.9	880	(158)両面
5-II下	磨石	10.5	8.5	4.3	610	(84)	8-II	凹石	11.2	9.2	4.9	720	(161)片面
5-II下	磨石	9.8	7.3	4.5	500	(85)	8-II	凹石	9.0	8.1	5.5	590	(162)両面
5-II下	敲石	8.0	4.5	3.1	150	(86)	8-II	凹石	8.5	7.5	5.2	380	(163)片面
5-III	磨石	10.3	8.7	5.3	690	(92)	8-II	磨石	10.1	8.1	4.2	580	(157)
6-I	凹石	9.4	7.0	3.8	350	(95)両面	8-III	凹石	9.1	7.3	4.6	370	(173)片面
6-I	磨石	9.0	7.6	4.7	440	(94)	8-III	磨石	9.9	7.7	4.8	580	(172)
6-I	磨石	10.6	8.2	3.7	510	(97)	9-I	凹石	10.8	10.2	4.4	640	(181)片面
6-II	凹石	10.0	7.5	4.6	500	(102)片面	9-I	凹石	9.9	9.0	4.5	670	(183)片面
6-II	凹石	9.6	8.5	4.3	560	(104)片面	9-I	凹石	9.1	8.4	6.2	770	(199)片面
6-II	凹石	8.3	7.5	3.9	320	(106)片面	9-I	磨石	10.3	8.8	3.7	520	(177)
6-II	凹石	10.4	7.6	3.5	330	(107)片面	9-I	磨石	11.5	8.9	3.7	600	(178)
6-II	磨石	9.7	8.2	5.9	650	(101)	9-I	磨石	9.6	7.1	4.7	500	(179)
6-II	磨石	5.3	5.0	3.6	130	(103)	9-I	磨石	10.0	8.3	4.5	500	(180)
6-II	磨石	8.0	8.6	5.0	520	(105)	9-I	磨石	8.8	6.1	3.2	250	(182)
6-II	磨石	8.1	4.5	2.6	120	(108)縦長	9-I	磨石	7.1	7.1	4.8	350	(184)
6-II	磨石	12.8	11.6	3.8	820	(118)	9-I	磨石	5.9	3.8	3.0	100	(185)縦長
6-II中	凹石	8.9	8.2	4.5	310	(121)片面	9-I	磨石	6.0	5.6	3.0	140	(186)
6-II中	磨石	8.7	7.2	4.9	460	(120)	9-I	磨石	6.0	5.3	3.0	150	(187)
6-II中	磨石	6.6	5.8	3.0	180	(122)	9-I	磨石	5.2	4.1	3.1	100	(200)
6-III	磨石	8.2	8.1	3.0	280	(127)	9-IKD3	凹石	8.7	8.5	5.5	580	(229)両面
7-I	凹石	10.1	9.2	4.1	620	(130)片面	9-II	凹石	9.6	8.3	4.4	570	(203)両面
7-I	凹石	10.3	7.3	4.2	450	(131)片面	9-II	凹石	9.8	7.3	4.4	480	(205)片面
7-I	凹石	10.1	8.2	3.4	430	(134)両面	9-II	磨石	9.8	8.0	6.5	730	(204)
7-I	凹石	10.8	8.4	3.8	480	(135)両面	9-II	磨石	8.2	6.8	4.7	370	(206)
7-I	磨石	7.6	6.7	4.2	310	(132)	9-II	磨石	8.2	7.2	2.8	270	(207)
7-I	磨石	8.5	7.2	5.3	440	(133)	9-II	磨石	5.6	5.0	3.0	80	(208)
7-I	磨石	11.3	7.6	4.4	490	(136)	9-II	砥石	8.8	7.0	1.5	160	(225)砂岩
7-II	凹石	9.5	9.0	4.3	500	(141)片面	9-II-括	磨石	6.6	6.5	4.1	220	(226)
7-II	磨石	9.2	7.8	4.1	450	(140)	9-IIカベ	磨石	6.0	5.3	3.7	170	(228)
7-II中	凹石	11.4	10.0	4.3	740	(147)片面	9-III	凹石	9.0	8.4	4.3	500	(231)両面
7-II中	凹石	9.0	8.0	5.8	660	(148)両面	10-I	凹石	10.3	8.3	3.4	480	(238)両面
7-II下	磨石	8.4	5.8	4.4	290	(151)	10-I	凹石	10.6	7.3	4.2	500	(239)片面
8-I	磨石	7.4	6.3	3.0	220	(154)	10-I	磨石	8.1	6.0	3.1	220	(240)

第11表　石器計測表⑨

出土区	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考	出土区	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
K02-10-Ⅰ	磨石	6.6	5.5	3.5	150	(241)	K02-12-Ⅱ	磨石	7.4	6.3	4.3	290	(346)
10-Ⅰ	磨石	8.5	7.7	3.5	370	(242)	12-Ⅱ	磨石	5.6	5.2	4.2	180	(347)
10-Ⅰ	磨石	8.9	8.6	3.8	440	(243)	12-Ⅱ	磨石	9.4	8.0	5.3	470	(350)
10-Ⅱ	凹石	10.0	7.5	5.2	430	(250)片面	12-Ⅲ	凹石	9.5	7.0	4.2	370	(372)片面
10-Ⅱ	磨石	9.8	8.1	6.2	700	(247)	12-Ⅲ	磨石	9.2	8.3	4.9	500	(374)
10-Ⅱ	磨石	8.8	7.1	4.8	430	(248)	13-Ⅰ	凹石	10.4	9.3	4.0	680	(381)両面
10-Ⅱ	磨石	5.1	3.4	2.5	80	(249)	13-Ⅰ	凹石	11.4	10.7	4.9	930	(383)両面
11-Ⅰ	磨石	11.9	8.6	5.7	860	(268)	13-Ⅰ	凹石	11.5	9.0	5.0	720	(386)片面
11-Ⅰ	磨石	7.6	8.3	5.1	480	(269)(敲石)	13-Ⅰ	凹石	11.7	10.3	4.5	950	(388)片面
11-Ⅰ	磨石	10.9	7.0	4.7	450	(270)	13-Ⅰ	凹石	10.2	8.4	4.7	630	(389)片面
11-Ⅰ	磨石	5.8	5.8	3.6	180	(271)	13-Ⅰ	磨石	8.6	8.5	5.4	520	(380)
11-Ⅰ	砥石	5.8	3.3	4.7	100	(276)硬質砂岩	13-Ⅰ	磨石	16.1	11.2	7.1	1950	(382)(敲石)
11-Ⅱ	凹石	10.6	8.9	5.8	890	(279)片面	13-Ⅰ	磨石	14.3	12.3	6.8	1800	(384)(敲石)
11-Ⅱ	凹石	9.4	8.6	5.5	670	(282)両面	13-Ⅰ	磨石	10.7	9.1	4.5	660	(385)
11-Ⅱ	凹石	6.2	6.0	3.3	170	(289)両面	13-Ⅰ	磨石	10.3	9.8	6.1	800	(387)
11-Ⅱ	磨石	7.9	6.3	3.5	260	(283)	13-Ⅰ	磨石	9.3	7.9	5.5	410	(390)
11-Ⅱ	磨石	7.6	8.4	5.5	550	(285)	13-Ⅰ	磨石	6.0	5.7	3.9	170	(391)
11-Ⅱ	磨石	5.1	4.5	3.7	130	(286)	13-Ⅱ	凹石	11.2	8.7	4.1	520	(401)片面
11-Ⅱ	磨石	5.9	5.1	3.3	130	(288)	13-Ⅱ上	磨石	9.5	8.2	6.2	680	(406)
11-Ⅱ下	凹石	13.0	9.1	3.6	450	(297)両面	13-Ⅱ下	磨石	11.1	8.1	3.9	530	(415)
11-Ⅱ下	磨石	10.2	9.0	4.8	550	(296)	13-Ⅲ下	磨石	11.5	10.2	4.1	660	(424)
11-Ⅲ	磨石	9.0	6.6	3.7	300	(309)	14-Ⅰ	凹石	8.3	8.0	4.7	450	(427)片面
11-Ⅲ	磨石	7.0	6.6	4.7	300	(310)	14-Ⅰ	凹石	10.0	9.1	4.7	700	(433)片面
11-Ⅲ	磨石	8.5	6.3	5.3	420	(311)	14-Ⅰ	凹石	7.0	7.7	3.4	320	(434)両面
11-Ⅲ	磨石	11.0	10.0	5.0	800	(312)	14-Ⅰ	磨石	9.6	9.7	6.1	820	(426)
11-H	凹石	11.5	8.2	5.3	760	(267)片面	14-Ⅰ	磨石	8.0	7.7	5.2	480	(428)
12-Ⅰ	凹石	11.0	7.5	5.0	510	(326)片面	14-Ⅰ	磨石	7.0	6.8	2.6	160	(432)
12-Ⅰ	磨石	9.8	8.0	4.9	580	(323)	15-Ⅰ	凹石	10.4	7.7	3.4	340	(442)両面
12-Ⅰ	磨石	9.9	7.2	3.8	420	(325)	15-Ⅰ	凹石	12.5	9.2	5.0	800	(443)片面
12-Ⅰ	磨石	7.5	8.2	7.2	630	(328)	15-Ⅰ	凹石	9.6	7.4	4.9	490	(447)片面
12-Ⅰ	磨石	13.4	9.5	5.3	1040	(329)	15-Ⅰ	凹石	9.7	10.0	5.3	800	(448)両面
12-Ⅱ	凹石	9.2	7.5	5.7	430	(348)片面	15-Ⅰ	磨石	9.6	8.8	5.2	600	(444)
12-Ⅱ	凹石	10.2	9.4	4.0	600	(349)(敲石)	15-Ⅰ	磨石	10.8	10.6	6.4	1160	(445)
12-Ⅱ	凹石	11.0	8.6	4.5	650	(379)片面	15-Ⅰ	磨石	10.3	6.3	3.2	280	(449)
12-Ⅱ	磨石	6.4	5.7	3.7	170	(343)	15-Ⅱ上	磨石	9.9	9.2	4.5	650	(453)
12-Ⅱ	磨石	9.6	7.7	5.3	610	(344)	15-Ⅱ上	磨石	9.2	8.1	3.9	470	(454)

第12表　石器計測表⑩

出土区	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考	出土区	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
K02-15-II上	磨石	8.5	6.5	3.2	280	(455)	K02-17-IV上	磨石	6.4	5.8	4.1	180	(516)
15-II上	磨石	7.7	7.0	4.9	400	(456)	18-I	凹石	9.1	7.7	4.2	540	(522)片面
15-II上	磨石	9.5	7.7	4.2	400	(459)	18-II中	凹石	10.7	7.6	5.0	500	(523)両面
15-II上	磨石	7.8	6.9	5.0	330	(460)	18-III上	磨石	9.8	8.4	4.5	560	(526)
15-II上	磨石	6.2	3.4	2.4	80	(461)縦長	18-III下	磨石	12.6	9.7	4.5	720	(527)
15-II中	凹石	9.9	8.0	6.1	680	(464)片面	K02-H	凹石	11.1	9.3	4.4	600	(548)両面
15-II中	凹石	9.8	8.4	5.2	650	(465)両面	H	凹石	10.0	8.1	4.6	590	(551)両面
15-II中	磨石	11.6	9.2	3.7	650	(466)	H	凹石	10.3	8.1	4.5	580	(556)片面
15-II中	磨石	8.7	4.0	3.4	160	(467)縦長	H	凹石	11.0	9.5	4.5	64	(557)片面
15-III上	磨石	5.8	4.1	2.0	60	(474)縦長	H	凹石	8.2	5.9	3.3	190	(560)片面
15-KD1	凹石	10.9	8.9	3.6	580	(478)両面	H	凹石	10.0	7.2	3.5	260	(561)両面
15-KD1	磨石	12.0	9.7	4.0	750	(476)	H	磨石	9.4	7.0	2.7	280	(549)
15-KD1	磨石	10.6	8.6	4.8	720	(477)	H	磨石	10.8	8.1	5.7	710	(550)
15-KD1	磨石	10.5	9.4	4.1	480	(479)	H	磨石	6.2	6.1	4.2	250	(552)
15-KD1	磨石	10.4	7.2	4.6	430	(480)	H	磨石	6.3	3.3	2.2	70	(553)縦長
15-KD1	磨石	10.7	8.6	4.6	710	(535)	H	磨石	7.4	5.8	2.1	120	(554)
15-KD1	磨石	11.0	9.9	4.6	710	(536)	H	磨石	9.5	6.1	2.5	240	(555)
15-KD1	磨石	7.8	8.0	4.7	340	(537)	H	磨石	9.0	7.7	5.4	540	(558)
15-KD1	磨石	5.1	3.4	3.2	80	(538)縦長	H	磨石	7.7	7.2	3.8	300	(559)
15-KD1	磨石	7.1	5.3	2.9	170	(539)	H	磨石	11.7	8.8	4.5	340	(562)
16-I	凹石	10.5	9.1	5.2	660	(486)片面	H	磨石	7.7	6.7	2.9	120	(573)
16-I	磨石	11.2	11.9	6.7	1120	(485)	H	磨石	12.2	8.5	4.9	740	(594)
16-I	磨石	10.6	7.8	4.4	530	(487)	H	磨石	10.4	8.6	4.6	610	(595)
16-II上	磨石	12.0	9.8	5.1	840	(493)	H	磨石	8.0	7.1	5.0	440	(596)
16-II上	磨石	7.6	7.0	3.7	270	(494)	90弘2-2	磨石	11.0	9.7	6.3	980	(586)
16-III下	磨石	8.1	7.0	4.1	340	(500)	5-8	磨石	9.4	7.1	4.4	400	(589)
16-III下	磨石	6.4	6.8	3.7	200	(501)(敲石)	6-2	磨石	13.1	9.2	4.3	800	(590)
16-III下	磨石	9.2	7.2	3.9	400	(502)							
16-III下	磨石	7.1	6.9	4.0	300	(503)							
17-III上	磨石	9.0	7.7	3.2	320	(506)							
17-III上	磨石	9.6	8.4	4.7	540	(507)							
17-IV上	磨石	6.8	5.8	5.0	300	(510)							
17-IV上	磨石	9.0	8.2	5.5	540	(511)							
17-IV上	磨石	9.0	8.2	2.2	250	(512)							
17-IV上	磨石	7.0	7.0	3.3	240	(513)							
17-IV上	磨石	6.6	5.9	3.1	160	(514)							

第3章　考　　察

一　石器群の石材利用について

小稿は石器群の石材について述べるものであるが、本題に先立って石質同定に関する制約と基本的な立場を明確にしておきたい。

まず、同定の方法が肉眼観察によることを断っておかなければならない。さらに対象の性質上、必ずしも新鮮な割れ口での観察が行えなかった点がある。以上の制約に加えて、たとえば安山岩一つを取り上げてみても、鉱物組成やその比率、また冷却温度などの諸条件、さらには生成後の熱水作用等、多くの要因が複雑に絡み合ってさまざまな岩相を示すことも多く、資料の個々について、厳密な岩石名を同定し得なかったものがある。

ここでの主題は「石質の問題は、その石器がどういう石材でつくられているかということと同時に、どこから持ってきたものかということであり、石器と石材の関係、供給地との関係等、当時の人間生活も知る上で是非解決しなければならない問題[註1]」に重点を置いている。それゆえ、もっとも欲したのは原産地に関する情報であった。しかし上述の理由から石質を同定できないものがあり、また石質が明らかであってもそこから原産地を特定することは困難である以上に危険であると考えている。従って石材の産出域については、漠然とした広範囲に及んでいる。また岩石名や分類名称も大雑把なものになっている。過度の情報を岩石学的に追求するよりも、さきに引用した指摘へアプローチすることを重視したからである。

以下、岩石学的分類、地質的環境から見た分類、石器との対応関係から見た分類を試みた後、弘法原遺跡における石材選択の問題を考えてみたい。

石材の種類

【黒曜石】　剝片石器石材の代表的存在で、県内でも針尾島、大崎半島、佐世保市周辺など県北部を中心に十数箇所の原産地が確認されている。産地ごとに外観上の差異があり、本遺跡出土例でも多くのバリエーションが認められることから、その原産地は複数箇所と思われる。ただし、たとえば針尾島産のものであっても数種類の個性が指摘されており[註2]、色調や透明度、夾雑物の有無など外見上の特徴が、必ずしも特定産地に対応するわけではない。

【安山岩】　安山岩には多くの種類があり、きわめて堅緻なものから班晶が大きく粗いものまでを含んでいる。それは石器用材として見た場合、剝片石器の素材になるものと磨石や石皿などの礫石器に利用されるものという、いわば両極に位置づけられるほどの差である。ここでは前者を「サヌカイト質安山岩」、後者を「安山岩」としている。「サヌカイト質安山岩」の中には玄武岩を含んでいる可能性があり、「安山岩」も細分可能である。しかし冒頭に述べた理由と従来の表記を尊重する立場から、上記の名称を用いている。

古銅輝石安山岩などの「サヌカイト質安山岩」は、数箇所の産地が確認されている。しかし

西北九州一帯を広く覆っている松浦玄武岩をはじめ玄武岩〜安山岩質溶岩の分布域であれば、条件によって「サヌカイト質安山岩」が生成されている可能性が考えられるため、産地を限定することは適当でない。ただ地質学的に見て、島原半島域に産出する可能性はきわめて低く、その点から産地は半島外に求めるのが妥当である。ほかの「安山岩」については斜長石や角閃石の大きな班晶が特徴的で、すべてを雲仙岳の噴出物と見て大過ないものと思われる。

【チャート】　広い意味ではさまざまな珪酸鉱物類を含めて用いられることもあるが、ここでは確実に認定できるものに限っている。資料の中には円礫として搬入されているものが多く、乱走状のクラックが顕著である。チャート円礫は段丘礫層や礫岩層などに多量に含まれていることがあり、産地については言及できない。

【珪化岩類】　安山岩などが、珪酸分を含む熱水溶液の珪化作用を受けて変質したと考えられるものを珪化岩類とした。珪化度の強弱で質感が異なるが、いずれも酸化鉄によって着色されており、色調は赤褐色〜暗赤色である。珪化度の強いものは亜貝殻状の断口を呈しており、長崎で鎮懐石[註3]と俗称される鉄石英に酷似する。表皮は風化が著しく泥塊状の厚い被膜に覆われている。火山活動の活発な地域では普遍的に存在するものと考えられるため、産地を特定することはできないが、遺跡周辺でも採取できる可能性が高い。

【砂岩】　砂岩は文字通り砂粒が集結したもので、明らかに認定できるものについては他の堆積岩類と区別して「砂岩」とした。石器として砥石、磨製石斧に利用されている。色調・固結度・粒度・鉱物種・淘汰の度合いなど、岩相は微妙に異なっている。

【泥質岩類（泥岩・頁岩・粘板岩など）】　泥岩・頁岩・粘板岩の区別は、それを構成する粒子（砂粒より小さいシルトや粘土。粒度については岩石学上の基準がある）の固結度の強弱に基づくものであるが、ここでは泥質岩類として一括した。以下の文中では頁岩の名称で代表させる場合もある。砂岩も含めて堆積岩類の分布域は広く、産地については特定できない。

【西彼杵変成岩類】　一般に結晶片岩として報告されるもので、正確には西彼杵変成岩類と呼ばれる。変成時の鉱物組成や配列などから細別されるが、ここでは総称名を用いた。西彼杵半島・長崎半島一帯に広く産出し、大村湾東岸の大崎半島の礫層中にも円礫として存在することが知られている。資料中、小片ながら淡紅色を呈する結晶片岩が2点ある。これは西彼杵郡琴海町松追に産出する、紅簾石を含む絹雲母片岩に類似するもので、産地を特定し得る可能性を秘めているが、鏡下鑑定によるものではないため、結論は留保した。

【蛇紋岩】　磨製石斧の石材として代表的なものであり、外観の特徴から他の石材と誤認する虞はないであろう。全体としての産出範囲は西彼杵変成岩類とほぼ同一である。変成岩類が面的な広がりを示すのに対し、蛇紋岩はそれに貫入しているため局所的に産出することが多い。

「在地石材」と「遠隔地石材」

さきに原産地の特定は困難であり危険であると述べた。しかし推定は可能である。地質構造から見て石材の産出域が限られるものもある。ただ視野の問題がある。地域を拡大すればそれ

だけ危険率を減じることができるが、それは問題の焦点を曖昧にするという二律背反に陥るからである。ここでは一応の区切りとして長崎県内を中心に考えてみたが、遺跡の地理的な位置を考慮して熊本県の一部を含む地域を想定している。これらのことを前提にした場合、石器群の石材を「在地石材」と「遠隔地石材」とに分けて考えることが可能である。この分類は稲田孝司氏の用語[註4]を借用したものであるが、ここでは「遺跡周辺の地質的・地形的環境の中で普遍的に存在する石材群」のことを「在地石材」とし、「在地石材の範囲を越える地域に産出する石材群」を「遠隔地石材」とした。「周辺」については固定数値を尺度とするものではなく、およそ日常生活の中で比較的容易に採取できる範囲、といったほどの意味で用いている。

確実に在地石材といえるものは安山岩である。これは磨石や石皿として大量に使われている。いま一つ珪化岩類がある。これも説明の中で述べた理由から、在地石材に含めてよいだろう。

従って安山岩と珪化岩類以外は、考慮すべき余地を残してはいるが、基本的に遠隔地石材に分類される。黒曜石は典型例である。サヌカイト質安山岩はデリケートな問題を内包している。しかし遺跡周辺に産出する可能性はほとんどないことから、黒曜石と同様に考えておきたい。砂岩・頁岩類は、外観や固結度の感触から第三紀系の堆積岩と考えられる。遺跡からの距離で考えれば小浜周辺、諫早市を中心に大村と長崎市東部を含む地域がもっとも近く、やや離れるが天草産の可能性もある。さらに遠くでは西彼杵・長崎両半島の一部地域、また県北部一帯も考慮しなければならない。産地を特定することは困難だが、遠隔地石材として大過なかろう。西彼杵変成岩類・蛇紋岩の産出地域は先に述べた。蛇紋岩については熊本県天草地方にも産出するが、本遺跡から見て遠隔地石材であることは明かである。

「汎用石材」と「目的石材」

剝片石器群石材の大部分は、黒曜石とサヌカイト質安山岩である。両石材からは、代表的な狩猟具である石鏃・石槍をはじめ掻・削器類、彫刻器、石匙など様々な石器が製作されている。一般に剝片石器の製作工程は、原材料確保→素材生産→調整（加工）→使用（欠損）→廃棄という流れで示され、遺跡から多量に出土する石核・剝片・砕片類は、一連の作業工程の痕跡として理解される。本遺跡でも石器製作の諸工程で生じる資料が多く検出されていることから、遺跡内で剝片石器の製作が行われたことは明かであり、同時にその原材が原礫あるいはそれに近い状態で持ち込まれていることは疑う余地がない。こうした石器製作の在り方は縄文時代に普遍的に認められるが、それは石材自体の汎用性に起因すると見ることもできる。このような石材を、用材適性としての分類から「汎用石材」とする。「剝片石器石材」といってもよく、サヌカイト質安山岩・チャート・珪化岩類も、これに含めることができる。

これらの汎用石材群と対照的なのが蛇紋岩である。蛇紋岩は磨製石斧石材として適しており[註5]、各地の縄文時代遺跡から豊富な出土例がある。県内でも産出域である西彼杵半島・長崎半島に立地する遺跡ではもとより対馬、壱岐、五島列島などからの出土も知られており、その分布は離島を含めた県下全域に及んでいる。そして磨製石斧の石材として最適であるにもかかわらず、

他の剝片石器類にはほとんど利用されない点に、蛇紋岩の特異性がある。[註6] 離島部には蛇紋岩が産出しないことから、島々の縄文人にとって遠隔地石材であったことは確かである。その搬入が交易によるものとは断定できないけれども、可能性を示唆する興味深い事実がある。それは多くの蛇紋岩製磨製石斧を出土する遺跡にあって、製作に際して生じるはずの剝片（砕片）が発見されない点である。[註7] これを調査区域の問題、とする見解があるかもしれない。しかし緊急調査では調査区の設定は原因事業に決定される。それは無秩序であり、遺跡のどの部分が選択されるかは確率的に均等と見るのが妥当である。また汎用石材の石核・剝片・砕片類が多量に出土するにもかかわらず、蛇紋岩剝片のみを集中的に排除した、と解釈するのは不自然である。むしろ「蛇紋岩製磨製石斧の整形作業は遺跡内では行われなかった」と考えた方が説明は容易である。具体的な数値を示そう。長崎市深堀遺跡E地点[註8]の例である。遺跡は長崎半島中央部の浜堤上に位置しており、蛇紋岩を採取するには好都合の環境にある。時期的には縄文時代前期初頭から近世までの複合遺跡だが、縄文時代に限れば前期と晩期に属するものが多い。第2区での検討から4期の文化層が想定されるが、ここでは前期曽畑式土器期の文化層と推定される6層での数量比を取り上げる。蛇紋岩製石器としては磨製石斧3点、同未成品2点があるが、蛇紋岩剝片は1点のみである。対比の参考までに黒曜石の数値を併記しておく。総数328点の内訳は、原石6点、石核35点、剝片116点、使用痕跡を有する剝片55点、砕片83点、となっており、残りの33点が石鏃や掻・削器などの石器である。ここでの磨製石斧未成品は、全面打製と呼べるほどに整形されているが礫面を残すものは認められず、製品でも同様であることから、原材は近郊の露頭で採取された可能性が高い。地質図では遺跡の南方、直線距離で約2kmの位置に蛇紋岩の分布域が記されており、この周辺が考えられる。蛇紋岩の原産地域に近接する遺跡でさえ、こうした在り方を呈していることから「蛇紋岩は原材ではなく、未成品の状態で移動した」とする仮説を提示しておきたい。[註9] 蛇紋岩製磨製石斧未成品は、それが遠隔地石材になる遺跡からの出土例も知られているが、深堀例と同様に剝片を伴わないことが多い。[註10] 蛇紋岩の特異性について前述したが、その汎用性の欠如は、磨製石斧としての適性と表裏をなすものであり、きわめて目的意識の強い石材選択であったことが窺える。蛇紋岩に代表されるこのような石材を「目的石材」とする。汎用石材と目的石材とは相対するものだが、一面で「消耗品」と「耐久消費財」との相違といってもよい。磨製石斧は、その製作に手数がかかるだけに、耐久性を高めるための素材の吟味を、入念に行わなければならなかったはずである。それは原産地で行うのがもっとも効率的であり、加撃整形時の失敗を容易に補える利点もある。結果的には厳選された素材を最小限度の重量で移動させることが可能になろう。さきの仮説は、こうした仮想製作址遺跡の存在を前提にしている。「目的石材」に分類される石材は蛇紋岩に限らない。砂岩はその多くが砥石として利用されており、石質的には多様な岩相を示している。一例としてだが、よく淘汰された石英粒と白雲母を主成分とする花崗岩起源の砂岩と思われるものは、周囲が整形された扁平砥石に用いられており、粒子がやや粗く固結度の劣るものは、有溝

砥石に用いられている。石質的には仕上げ砥石、荒砥石の差といえよう。扁平砥石と有溝砥石が、仕上げ砥石と荒砥石とに対応しているわけではないが、研磨対象物や作業工程による使い分けがあったことは確かであろう。このような微妙な石質差にも石材選択の目的性が反映されていたと見ることができる。堆積岩類は、磨製石斧に利用されている例が多い。この適性は実験考古学的に指摘されている[註11]が、本遺跡も例外ではなく磨製石斧の多くは頁岩を採用している。変成岩類は搬入目的が定かではない[註12]。消極的理由ながら「石質が汎用石材とは思えない」ことをもって目的石材に含めておく。在地石材である安山岩は、ほとんど全てが磨石と石皿に利用されている。その搬入が目的的であることは明白であろう。

弘法原遺跡における石材選択

さて石器石材について視点を移しながら分類を試みた。そこから明らかになった事実をもとに、いくつかの推測を交えながら弘法原遺跡での石材選択の在り方をイメージしてみたい。

黒曜石は、食料獲得活動をはじめ様々な日常生活に必要な道具の素材として不可欠であった。それは数箇所の原産地から原石として搬入された。いささか乱暴とも思える素材生産作業から得られた剝片類は、形状や法量的規制の枠内でそれぞれの石器に加工された[註13]。黒曜石が不適な器種にはサヌカイト質安山岩が用いられた。それは鋭利さにおいて黒曜石に及ばないまでも、ほぼ同様の切れ味が得られるものであり、何よりも大型厚手の素材を得ることが可能であった。石槍や粗雑な大型掻・削器類に多用される傾向は、こうした事情を反映しているのであろう。これらの汎用石材から生産される剝片石器群は、概して消耗度の高いものであり、原石の供給は恒常的に行われたものと思われる。黒曜石に限れば、原産地を複数箇所に求めているあたり、安定確保を維持する一つの戦略だったのかも知れない。彼らは遠隔地石材を大量に確保できたにもかかわらず、ほかの類似石材にも興味を示した。珪化岩類は日常の領域活動のなかで発見したものであろうか。チャートについては定かではない。いずれも積極的に使われるには至らなかった。黒曜石やサヌカイト質安山岩と比べての劣質は、明白だったろう。数量的に見てもわずかであり、客体的存在といってよい。イメージとしては「試用」と表現した方が適切か。

一方、磨製石斧や砥石などの工具類には、それぞれの用途に応じて最適の石材が選ばれた。この選択は、原産地までの距離よりも適性が優先している点で、主体的な汎用石材と同レベルであったといえよう。しかし搬入形態は大きく異なっていた可能性が高い。それは整形段階で生じる剝片（砕片）の利用価値がないことと相まって、おそらく原材（岩塊）として持ち込まれることは少なかったであろう。蛇紋岩が未成品の状態で搬入されたという仮説は、前述の通りである。蛇紋岩と同一視することはできないけれども、磨製石斧の主用石材である頁岩類についても同様の事情を想定しておきたい。砥石類については、原材確保の時点で適切な粒度と形状が選択されていた可能性が高い。さらに憶測の域ではあるけれども、用途から考えれば、磨製石斧未成品とセットで搬入された可能性を想定することも許されようか。

一般に植物性資源の処理具とされる磨石・石皿類の石材選択は、他の石器群とは異質なもの

であった。これらの大型石器群に用いられている雲仙岳の安山岩は、班晶が粗大で風化に弱い。磨石や叩石としての用材適性を重視すれば、もっと緻密な石材が適していたはずである。それは遠隔地に出かければ入手可能であった。しかし弘法原の縄文人はそれをしなかった。いや、できなかったというべきであろう。遺跡周辺の地質的環境で理想を求めることは遠征に等しい。その運搬重量から考えて、つまりは彼らの攻略限界点を越えたところに存在するものであった。礫石器群の石材選択については「手頃な円礫を入手し……」と述べられることが多い。確かに海岸部や川原に近接する遺跡で、多種多様な岩石が混在していれば最適なものを抽出することが可能であったろう。しかし彼らには、ほぼ全域が雲仙火山の噴出物で覆われている島原半島に立地したがゆえに、粗悪な安山岩以外の選択肢はなかった。在地石材とはいえ、円磨された礫をもとめる以上、海岸近くまで降りて行かなければ入手できなかったはずである。この個体重量の大きな石材の搬入に費やした労働量は、相当なものであったろう。とても適材とは思えない雲仙火山の安山岩が採用されていることは、その運搬に要する労働量と用材適性という、相反する要素の妥協点での選択であったと理解したい。磨石類の、本遺跡での膨大な出土量は、消耗品ではなかったかと思えるほどである。量の多さは、むろんそれを必要とする活動の活発さを示しているのであろうが、同時に石材自体の質的弱点を、量で補わなければならなかった事情を物語っているかのようである。

以上、石材選択の在り方を、3つの類型に分けて考えてみた。もちろん石材選択の合理性や合目的性については、すでに多くの先学によって指摘されてきたこと[註14]であり、小稿は一遺跡例としてそれを再確認したに過ぎない。こうした石材利用の在り方は、先土器時代以来の普遍的事象のようにも思えるが、なにより当時の彼らが、その環境の中で石材とどのように関わってきたか、という問題であるだけに、各遺跡での様態把握が必須となろう。それには個々の石材に対する正確な認識と、遺跡の占地条件および地質的環境についての精密な情報蓄積が不可欠であるが、そうした基礎作業が進展するなかで、石器石材の移動をめぐる問題を論議する環境も醸成されるであろう。とりわけ蛇紋岩は、外観の特徴から同定が容易であることに加えて、出土分布が広域に及んでいること、産出域がある程度限定されることなど、物流を考える上で好条件を具備しているように思われる。従来、原産地の問題が取り上げられることの多かった黒曜石などの汎用石材とともに、交易や集団帰属など遺跡間関係を指向した分析を試みる際の、ひとつの有力な指標になり得るのではないかと考えている。

（追記）　石質の同定に際しては、長崎県地学会の荒木真寿男先生から多くの御指導、御助言を賜った。文末に失礼とは存じながら深甚なる謝意を表し、厚く御礼を申し上げる次第である。なお各石材の産出地域については「長崎県鉱物誌」及び「長崎県の地学」に負うところが大きいが、標本を実見していないため、いくつかの過誤を犯しているかも知れない。その他、事実誤認や理解不足、表現の不適切についても、筆者の責であることを明記しておく。

また掲載した文献のほかに、いくつかの論文・報告書からは有益な示唆や情報を得ることができたが、紙数の都合上、割愛せざるを得なかった。お許しを乞う次第である。(渡辺康行)

註1　稲富裕和　1980　「石器」の補足説明より引用。『黒丸遺跡』大村市黒丸遺跡調査会

註2　朝日山遺跡（参考文献5）報告書中での高野晋司氏の指摘による。

註3　名称は神功皇后にまつわる伝説に由来する。古くは安永2（1773）年から享和元（1801）年にかけて刊行された木内重暁（石亭）の雲根志にも登場しており（長崎県鉱物誌)、当時から長崎の珍石・奇石であったことが知られる。

註4　稲田孝司　1984　「旧石器時代武蔵野台地における石器石材の選択と入手過程」考古学研究第30巻　第4号　考古学研究会

註5　橋本　正　1975　「石器の機能と技術」『日本の旧石器文化』第一巻　雄山閣

註6　玦状耳飾に用いられる例は多いが、装飾品であるため除外した。剝片石器としては有喜貝塚（参考文献6）で石錐・スクレーパーなどの例がある。ここでは蛇紋岩原石も報告されており、本文中の仮説が成立しない様相を呈している。

註7　皆無というわけではない。製作工程を想像した時あまりにも少ないという意味である。また縄文晩期の扁平打製石斧だが、同様の事実が注意されている（稲富　註1文献)。

註8　長崎市教育委員会　1984　長崎市立深堀小学校校舎増築に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書

註9　胎土に滑石粉末を混入することで著名な曽畑式土器の出現とともに、西北九州での蛇紋岩の利用は縄文前期以降に多い。蛇紋岩と滑石が隣接して産出することから考えても、両者の活用は同時期であった可能性が強く、本遺跡の蛇紋岩製石斧を早期の所産と断じることはできない。むしろ少量ながら縄文晩期の土器が検出されていることから、該期の所産である可能性を考慮する必要があろう（高野晋司氏の御教示による)。

註10　朝日山遺跡（参考文献5）など。高野晋司氏の御教示による。

註11　楠本政助　1973　「石斧」『仙台湾周辺における先史狩漁文化』矢本町史第一巻別冊

註12　粉砕して土器混和材にする可能性を考えたが、胎土の観察では認められなかった。註9に関連して晩期に特徴的な十字型石器あるいは打製石斧の素材になる可能性もあろう。

註13　田中英司　1977　「縄文時代における剝片石器の製作について」『埼玉考古』第16号

註14　たとえば、藤森栄一　1968　「石器」『新版考古学講座』第1巻　通論〈上〉　雄山閣

参考文献

1．早川正一　1983　「磨製石斧」『縄文文化の研究』第7巻　道具と技術　雄山閣

2．安達厚三　1983　「石皿」『縄文文化の研究』第7巻　道具と技術　雄山閣

3．岡本要八郎編　1958　『長崎県鉱物誌』

4．長崎県地学会編　1971　『長崎県の地学』

5．長崎県小浜町教育委員会　1981　『朝日山遺跡』小浜町文化財調査報告書　第1集

6．諫早市教育委員会　1984　『有喜貝塚』諫早市文化財調査報告書　第5集

7．長崎県教育委員会　1980　『針尾人崎遺跡』長崎県文化財調査報告書　第60集

二　まとめ

今回の調査で出土した遺物は、土器約6,000点、石器3,224点であった。時代的には縄文時代早期の押型文土器（67%）、無文土器（33%）を主体とし他に撚糸文土器、晩期の土器も僅かに出土する。押型文土器の時期でも尖底土器は出土せず平底土器しか出土しないので、松永幸男氏編年のIII期[註1]に該当し、押型文土器の終末の時期を主体としている。なお石器の組成をみても、佐世保市の岩下洞穴のV層においては尖底の押型文土器を主体[註2]とし、石槍や局部磨製鏃を出土するのに対して、当遺跡においては石槍は1点のみの出土であり、局部磨製鏃の出土は皆無で、また、すり石の大量の出土など石器組成の違いも認められ[註3]、岩下遺跡V層の文化層が当遺跡の押型文の文化層より先行することが考えられる。

遺跡の範囲は、昭和55～57年の第1～3次調査と今次調査の調査結果から、東西100m、南北170m、面積としては17,000m²の広さが考えられる。ただ、遺構の検出状況としては、今次調査の場合でも、1～17区の調査範囲のうち例えばIII層上面では真中の8～11区の空白部分が認められ、1～7区の部分と12～17区の部分とに限定されそうなので、部分的に有意なまとまりをもって遺構が形成されていることが考えられる。出土石器の内、磨石、敲石、石鏃などが特に多い事実や、遺跡東端直下に求められる豊富な湧水点の存在は、地理的にも採集・狩猟などの経済活動にとっても極めて安定した好条件を備えていたものと解される。

石器群を構成する器種としてまとめてみると。

1）狩猟具系列の石器（石鏃、石槍）

2）労働用具系列の石器（スクレーパー、磨製石斧、敲石、磨石）

3）工具系列の石器（板状砥石、砥石[註4]、有溝砥石[註5]）

となり、豊富な内容をもっているところから、17,000m²という広大な占有面積と遺構の形成状況等を考え合わせれば、ある程度恒常的に使用された拠点的遺跡（ホームベース）としての性格を想定することも可能であろう。

遺構としては、IV層上面において土壙を3区と6区で検出し、15区で集石土壙を、III層上面とIV層上面の両層上面において柱穴を検出している。II層中面では2区において焼土及び炭化物の集中部を検出している。なお、上述したIII層上面における8～11区の遺構の空白部分に対応するII層のフレークとチップの出土状況は第23図にみるごとく8、9、12区に多く出土するという状況があるし、IV層上面における空白部分7～10区の遺構の空白部分に対応するIII層のフレークとチップの出土状況は8、9、11区に多く出土し、いずれも遺構の空白部分にフレークとチップが多く出土するという結果となった[註6]。この出土状況の解釈としては、このフレークとチップが多く出土する場所で石器製作を行った事も考えられるが、石核の出土状況は，第23図をみてもわかるように、特にこのフレークとチップの出土状況とは関係がなく、4～10、12区等で出土しており、特に石器製作の現場の状況を示すとは考えにくい。すると、石器製作の

時に出たフレークとチップをこの遺構の空白部分である８、９、11、12区に廃棄したととらえる方が妥当性があるように思われる[註7]。考えてみれば、その当時の縄文人は裸足で生活していたであろうから、シャープなエッヂをもつ黒曜石のフレークやチップは、ケガをしないように日常の生活の場所から遠ざけるように仕末したと推測される。よって、この黒曜石のフレークとチップの日常生活における有害性という事を考えれば、フレークとチップの出土が少なく、遺構が多く検出された１～３区、13～16区等が、居住・生活の場所としての可能性が出てくる訳で、これまで該期における住居跡の検出の困難さ[註8]を指摘される状況の中にあって、ネガティブな形ながら、ひとつの足がかりになるものかもしれない。

遺物の出土状況は、II層より70％、III層より30％で、今次調査と昭和55～57年の第１～３次調査でもほぼ同じ傾向をもっている。但し遺構の検出状況をみるとIV層上面で検出した遺構の数の方がIII層上面で検出した遺構の数より多いので、III層からの出土の割合が30％というのは少なすぎる感じは否めないが、現時点ではその理由はわからない。

昭和55～57年の第１～３次調査の調査報告書から、参考として土器の熱ルミネッセンス測定結果と、花粉分析の結果を再録すると以下のようになる。

土器の熱ルミネッセンス測定結果によると、B. P 7,700年という数値が示されている。但し、当該地附近の算出基礎となるデーターが不十分という事であり、将来的な課題が残されている。

花粉分析の結果から古環境及び古気候について復原してみると（第13表）。

No.1　II層（黄褐色土）

樹木花粉は針葉樹、広葉樹を合わせて25.5％であり、草本花粉と羊歯類胞子の合計の64.0％に比較して少ない。

従って、樹木類は森林を形成するほど多く繁茂していなかったものと考えられ、かなり林地の間が開いていた林地と考えられる。又、樹木の間の空地には、イネ科、ヨモギ属等の草本類と羊歯類が生育していたものと言えよう。

林地を形成していた樹木は主として落葉広葉樹のコナラ亜属と常緑広葉樹（照葉樹）のアカガシ亜属とクリカシ属及び常緑つる性の樹木であるサカキカズラ属である。

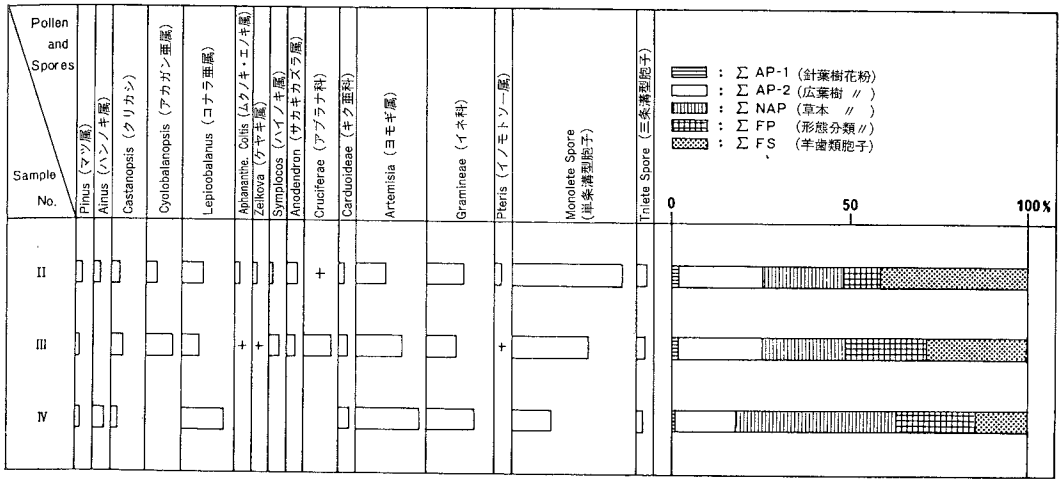
No.2　III層（黒色土）

草本花粉と羊歯類胞子の合計が51.5％であり、No.1試料よりも若干減少するもののまだ樹木花粉より多い。又、樹木花粉は25.5％とNo.1試料と全く同じである。

従って、No.1試料と同様な古環境と考えられる。しかし、樹木構成は多少異なり、落葉型のコナラ亜属より常緑型のアカガシ亜属の方が多くなり、クリカシ属も増加する。この事よりNo.1試料よりもアカガシ亜属、クリカシ属等の常緑樹が多く生育していたものと考えられる。

No.3　IV層（黄褐色ローム）

草本花粉と羊歯類胞子の合計が60.0％を占め、草地の環境を示している。一方樹木花粉は全体の18.0％であり、コナラ亜属が12.0％と多いものの、検出される樹種がNo.1、２と較べて極端



第13表　主要花粉胞子化石ダイヤグラム（註８文献より）

に少ない。

従って、ヨモギ属、イネ科、アブラナ科、及び羊歯類が繁茂した草地と考えられ、樹木はコナラ亜属が付近に林地を形成していたか、又は草地の内外に散在して生育していたものと考えられる。

古気候については、検出された樹木花粉の構成から推定すると、最下層の№３は落葉広葉樹のコナラ亜属が多く常緑広葉樹はクリカシ属が検出されただけで少ない。

従って、№３の古気候は温帯に相当するものの照葉樹林を形成するほどは暖かではなかったものと言えよう。

№２になると、常緑広葉樹のアカガシ亜属が最も多くなり、クリカシ属、サカキカズラ属等の常緑樹が見られる。落葉広葉樹のコナラ亜属、ムクノキ属、エノキ属、ケヤキ属等も検出される。

従って、照葉樹林帯に近い温帯から暖温帯に相当すると推定される。

№１も№２と同じ様に温帯から暖温帯に相当すると思われるが、常緑広葉樹よりも落葉広葉樹の方が多くなり、№２よりも若干気温が低下していたものと考えられる。

なお、第13表をみて気付く事はⅣ層に比べて、Ⅱ、Ⅲ層でその割合が増える広葉樹花粉と、Ⅳ、Ⅲ、Ⅱと上層にいくに従いその割合が増えるヒカゲノカズラ科、ゼンマイ科、ウラボシ科、ハナヤスリ属等の羊歯類胞子の存在で、このことは恐らく、広葉樹の木の実や羊歯類等の根茎等を加工したと推定されるすり石、石皿等の大量の出土関係があるものだろう。また、Ⅳ層において草本花粉が47％を占め草地の環境を示していることと、旧石器時代のナイフ形石器や台形石器がわずかながら出土していることも、環境と生業のあり方を示唆するものだろう。

註1　松永幸男『押型文土器にみられる様相の変化について』古文化談叢第13集　1984．4．九州古文化研究会。

註2　麻生　優『岩下洞穴の発掘記録』、佐世保市教育委員会。

註3　石器組成から推察すれば、岩下遺跡Ⅴ層の文化層は狩猟を主体とする文化。弘法原遺跡の場合は採集がやや重きをなし、狩猟も行う文化ととらえることもできるであろう。同じ押型文土器の文化において、その生業形態にかなりの違いが認められるが、岩下遺跡Ⅴ層の尖底土器から、弘法原遺跡の平底土器への底部の変化は、それ位の生業の変化をあらわしているものかもしれない。

註4　砥石面が凸レンズ状に窪むものは、磨製石斧の刃部を砥ぎ出した可能性をもっている。

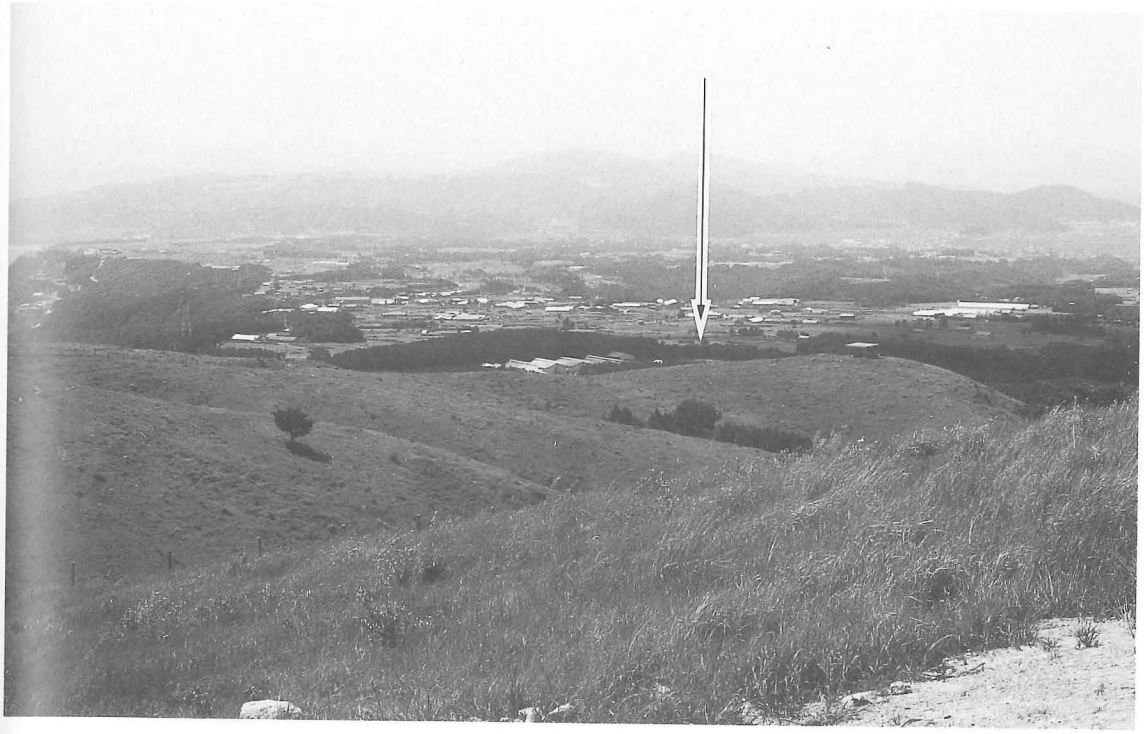
註5　宮下健司氏により、有溝砥石は骨角器を作った可能性が高いといわれている。岩下洞穴Ⅴ層では、実際に骨槍と思しき骨角器が出土している。

註6　土器でも同様な傾向がある。

註7　やや、主観的・感覚的すぎるきらいはあるが、岩下洞穴Ⅴ層の場合も、遺物の出土が洞穴西部に限定されることから、ただ単に洞穴内の落盤の多少により、利用面積が限られただけではないようである。との指摘もある。

註8　概して島原半島に於ける住居址検出例は少なく、特に明瞭な竪穴式住居の例は殆どなく、平地式などの形態も考慮に入れる必要性が指摘されている。高野晋司『弘法原遺跡』、吾妻町の文化財7、1983　長崎県吾妻町教育委員会。p. p. 150

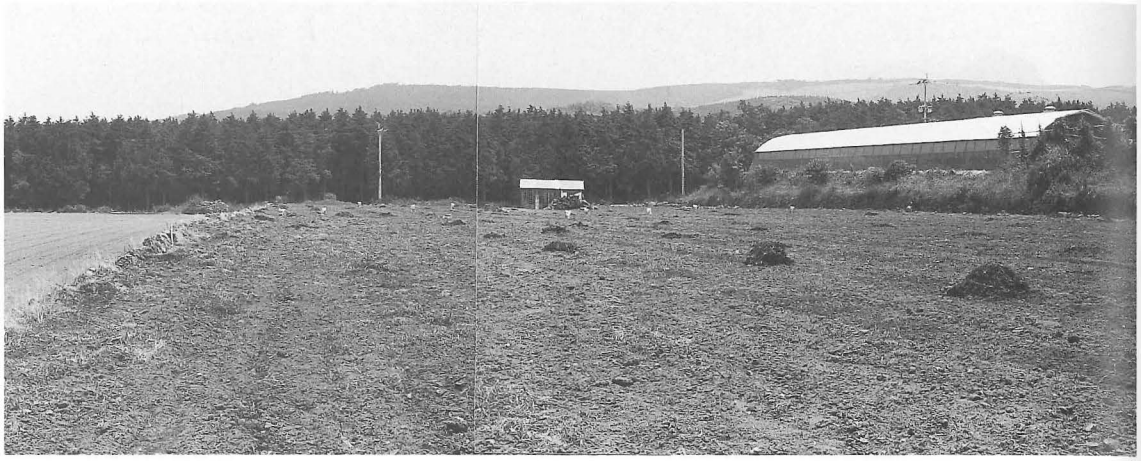
図　　版



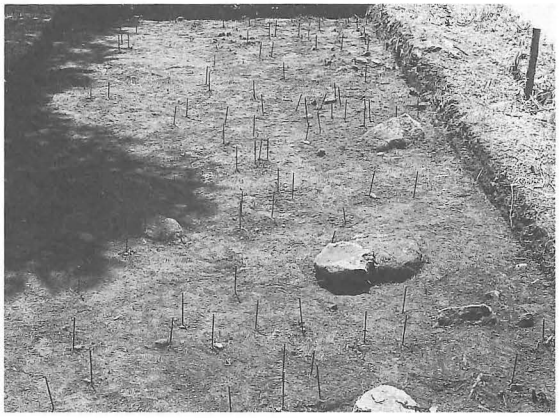
遺 跡 遠 景

調査前の状況

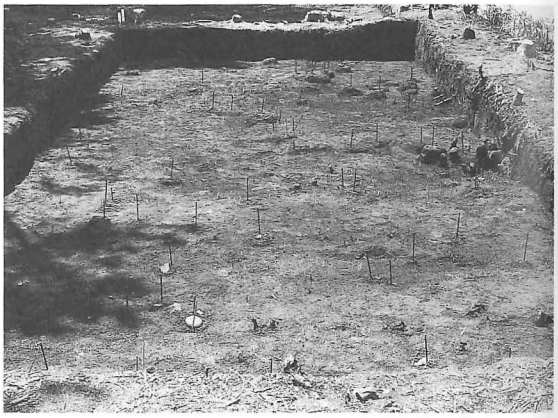
図版 2



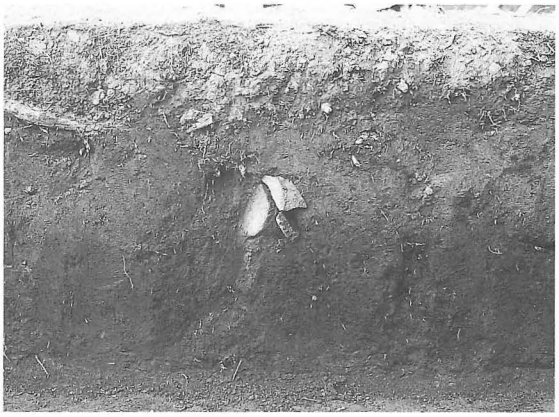
調査地を西側から撮影



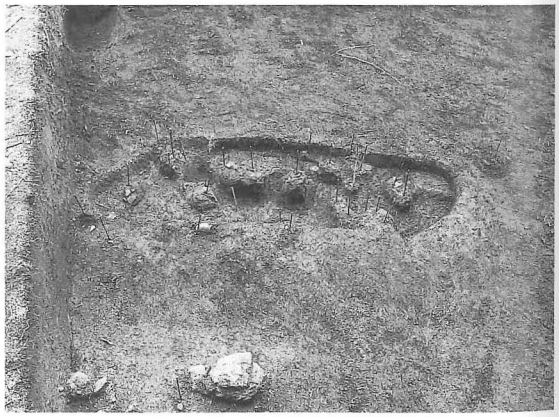
遺物出土状況



遺物出土状況



遺物出土状況

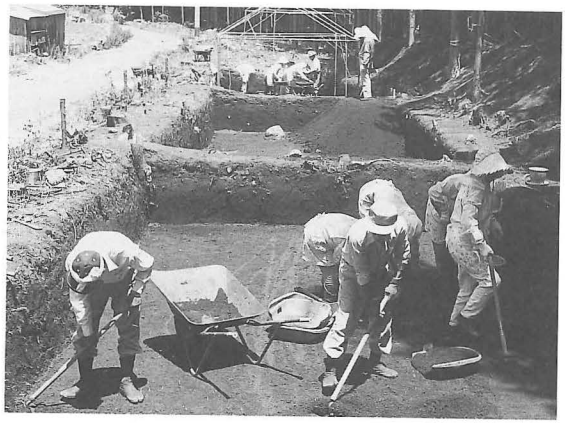


遺物出土状況

調 査 風 景

調 査 風 景

同　上



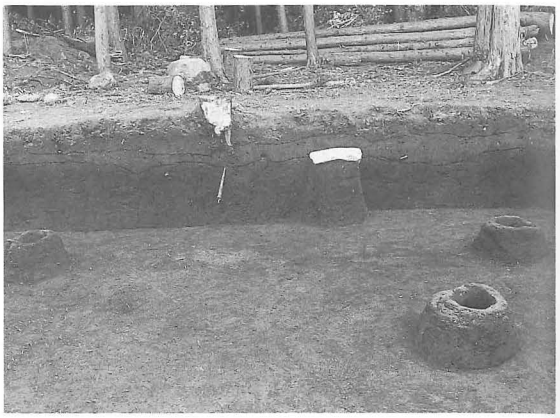
同　上

同　上

同　上

図版 4

2 区東壁土層



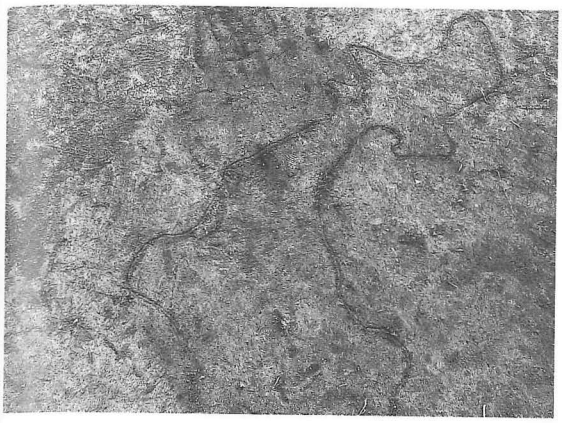
6 区東壁土層

5 区北壁土層

4 区東壁土層

12区北壁土層

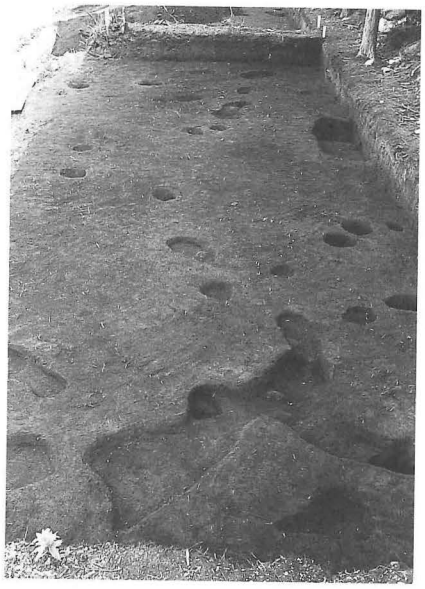
17区東壁土層



2 区II層中面焼土及び炭化物集中部

3 区IV層上面遺構検出状況

6 区 3 層上面遺構検出状況

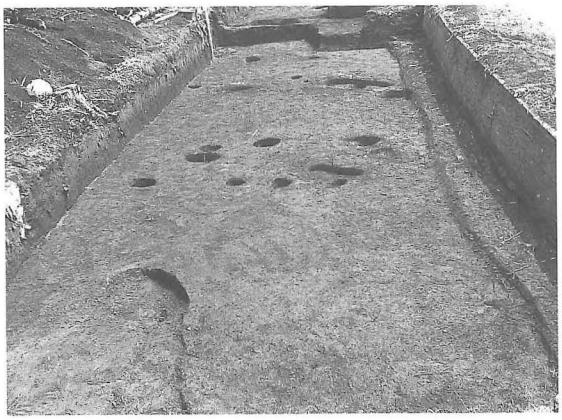


3 区III層上面遺構検出状況

7 区III層上面遺構検出状況

12区III層上面遺構検出状況

図版 6

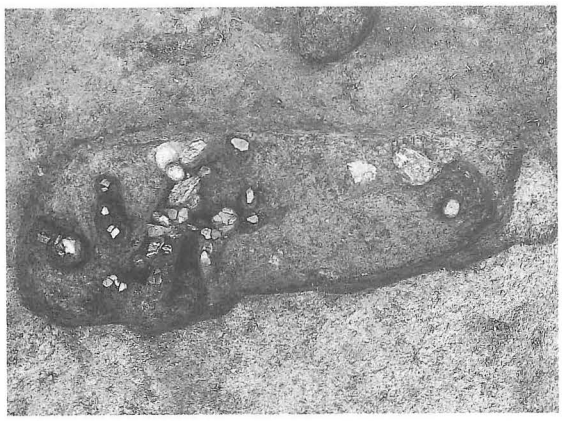


14区Ⅲ層上面遺構検出状況

4 区Ⅲ層中面遺構検出状況

1・2 区Ⅳ層上面遺構検出状況

3 区Ⅳ層上面遺構検出状況



1 号土壙(ＫＤ１)

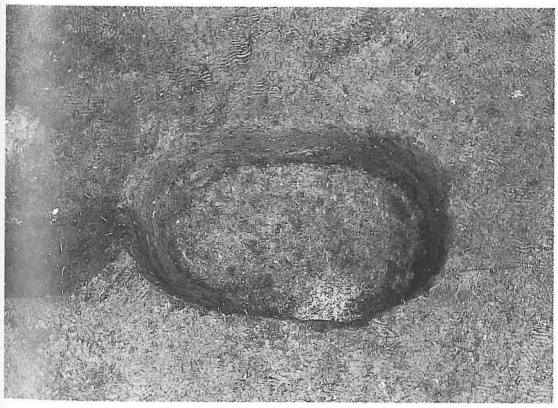
左に同じ　完掘状況

15区IV層上面遺構検出状況

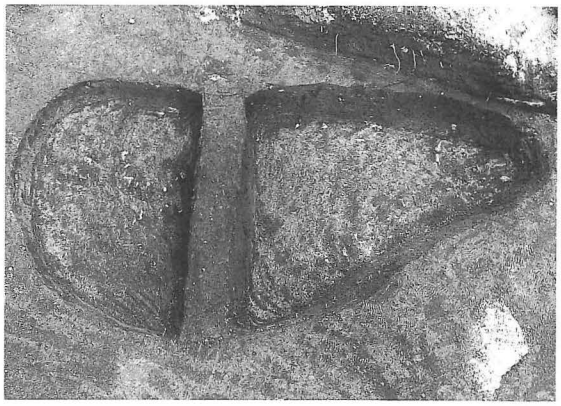
16・17区IV層上面遺構検出状況

2号土壙完掘状況

2号土壙からの土器出土状況

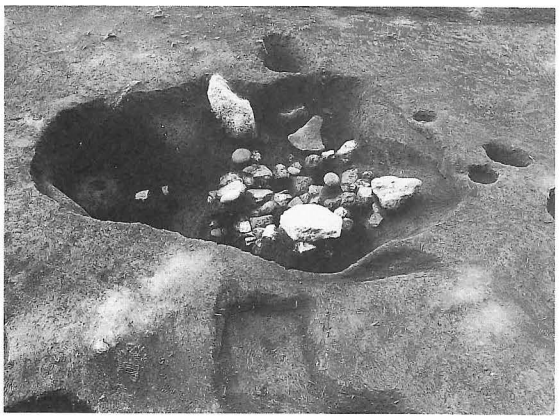


KD2



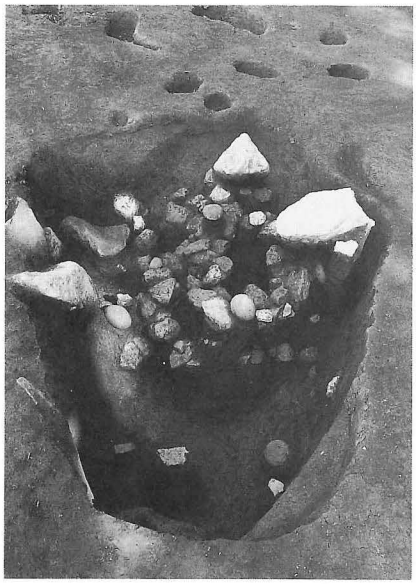
11区　KD1

図版 8



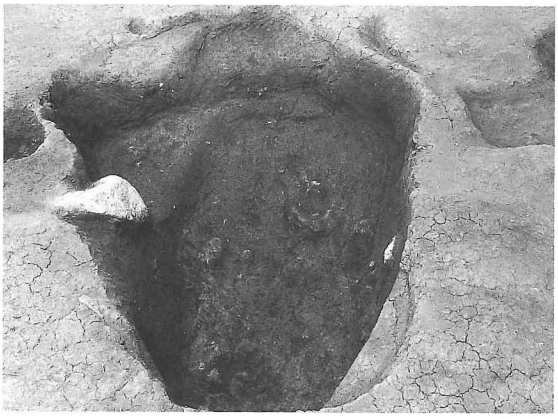
東側から

北側から



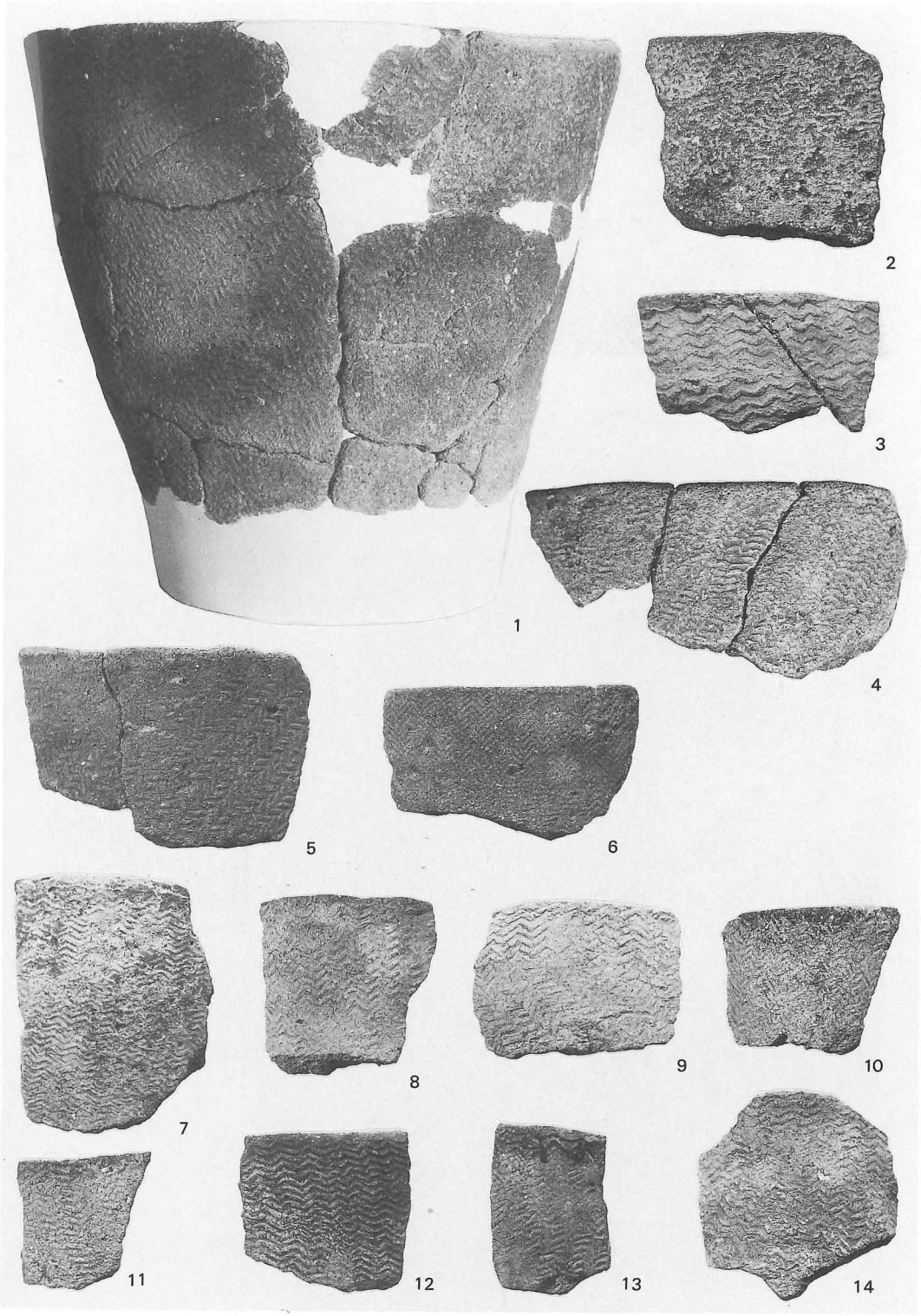
南側から

西側から近接撮影



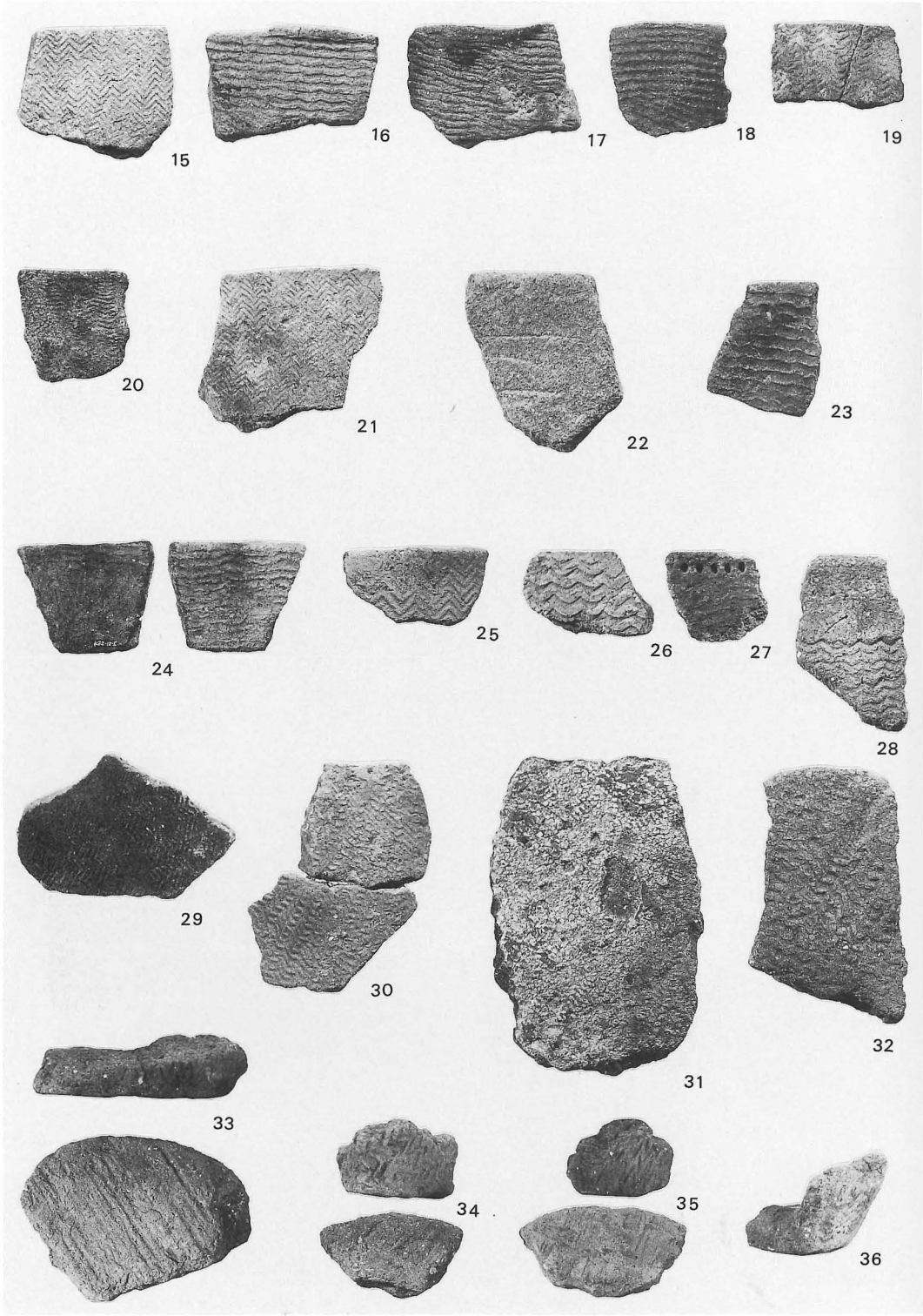
南側から

16区集石土壙

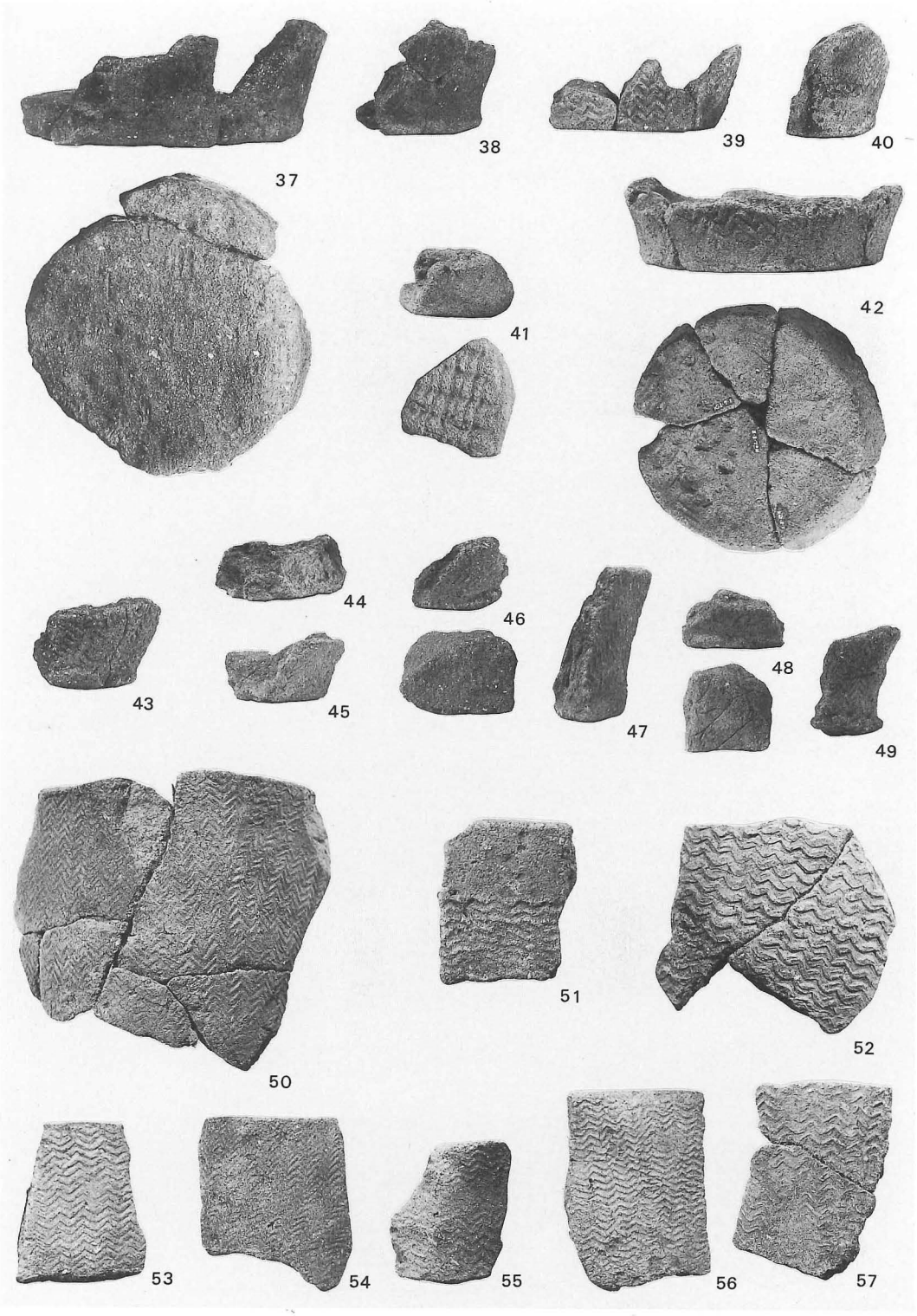


出土土器①

図版10

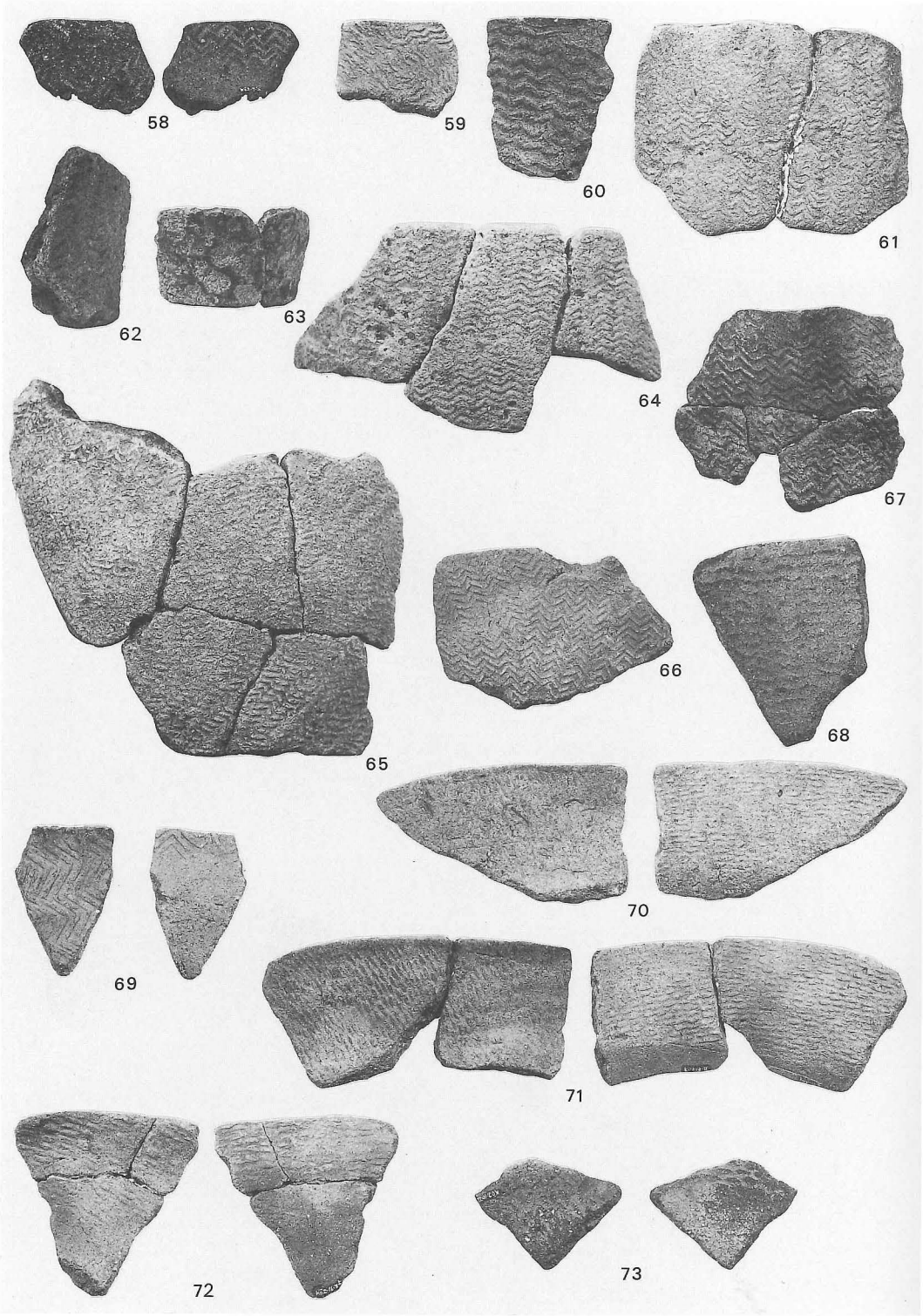


出土土器②

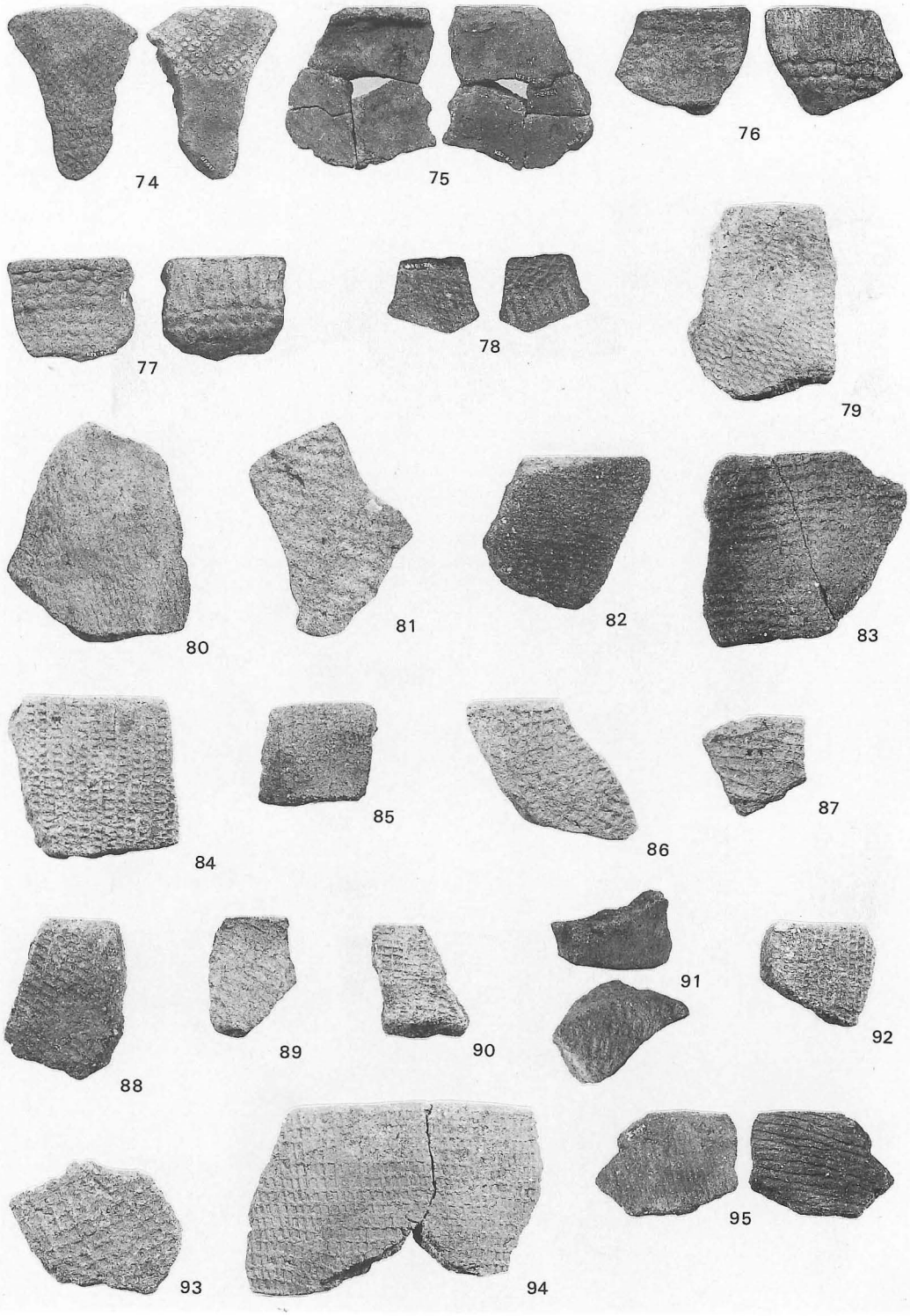


出土土器③

図版12

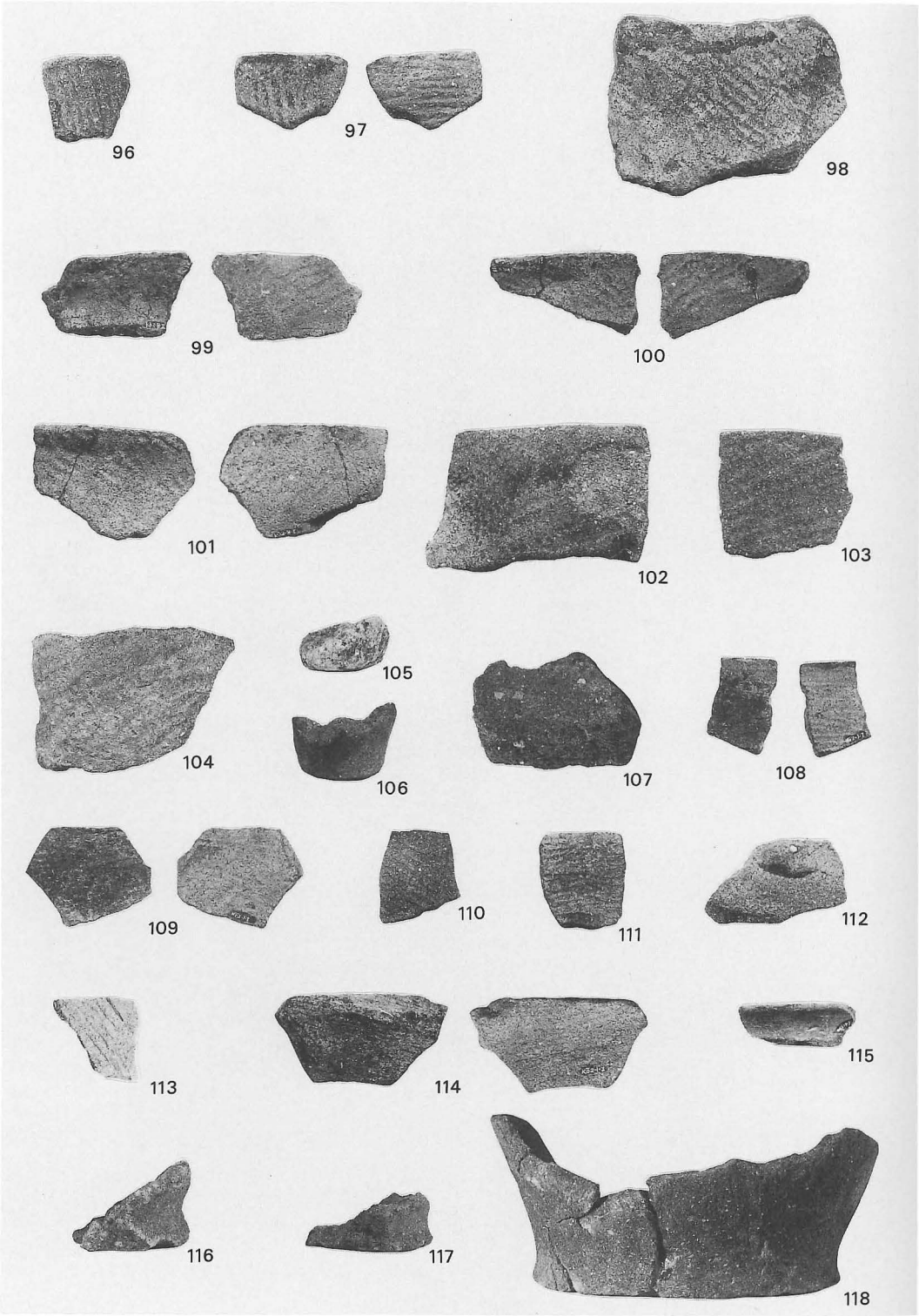


出土土器④

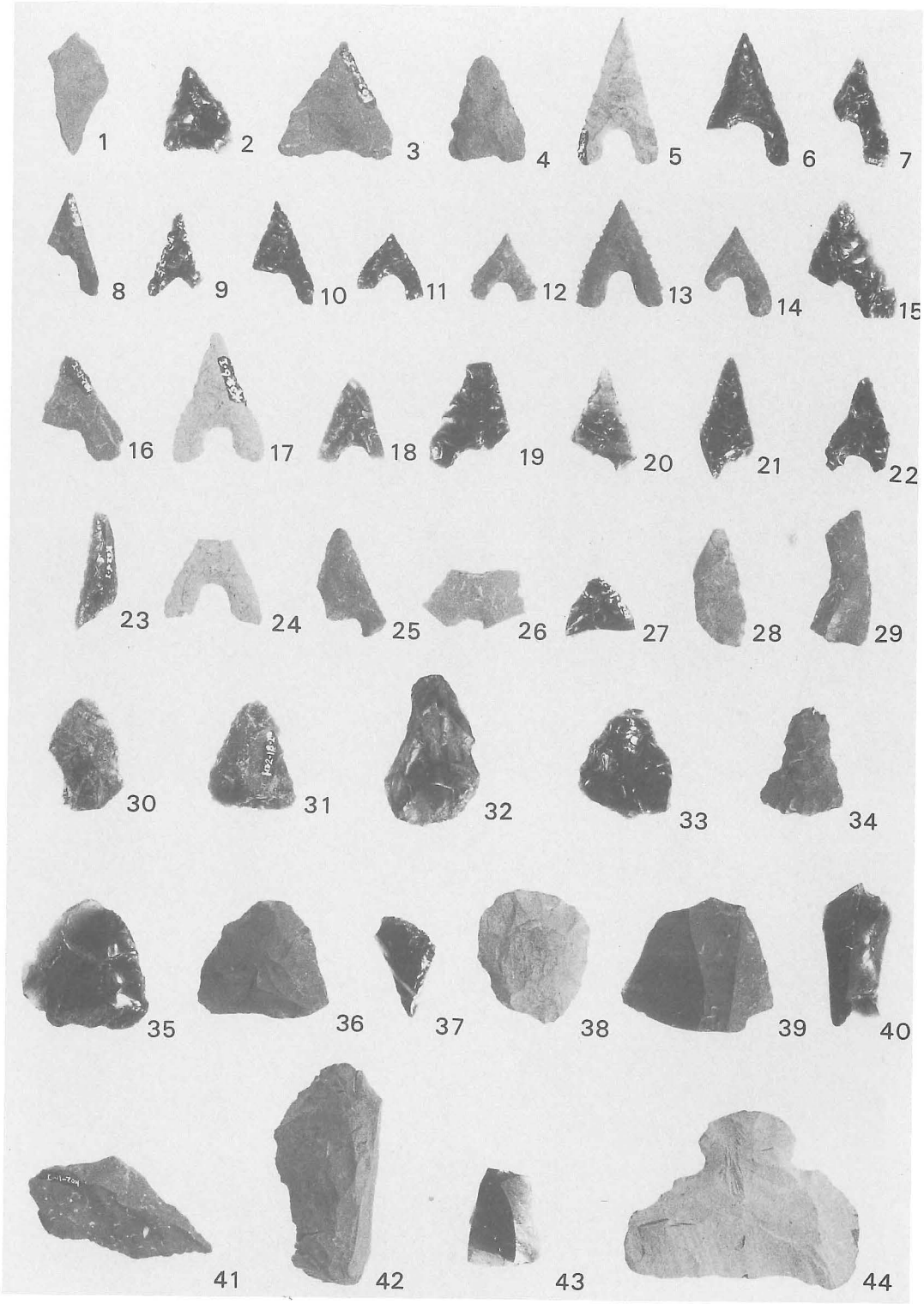


出土土器⑤

図版14

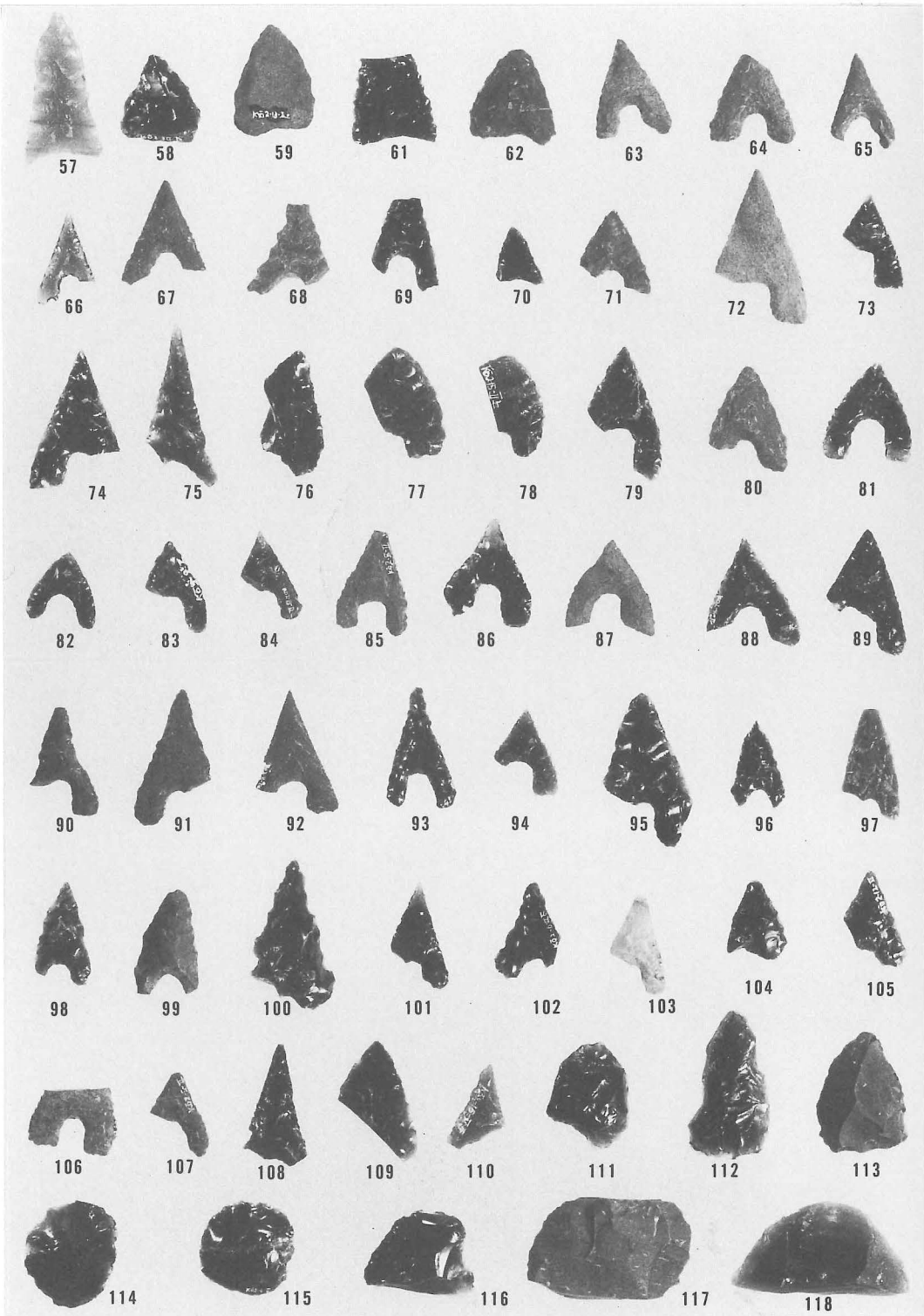

96
97
98
99
100
101
102
103
104
105
106
107
108
109
110
111
112
113
114
115
116
117
118

出土土器⑥

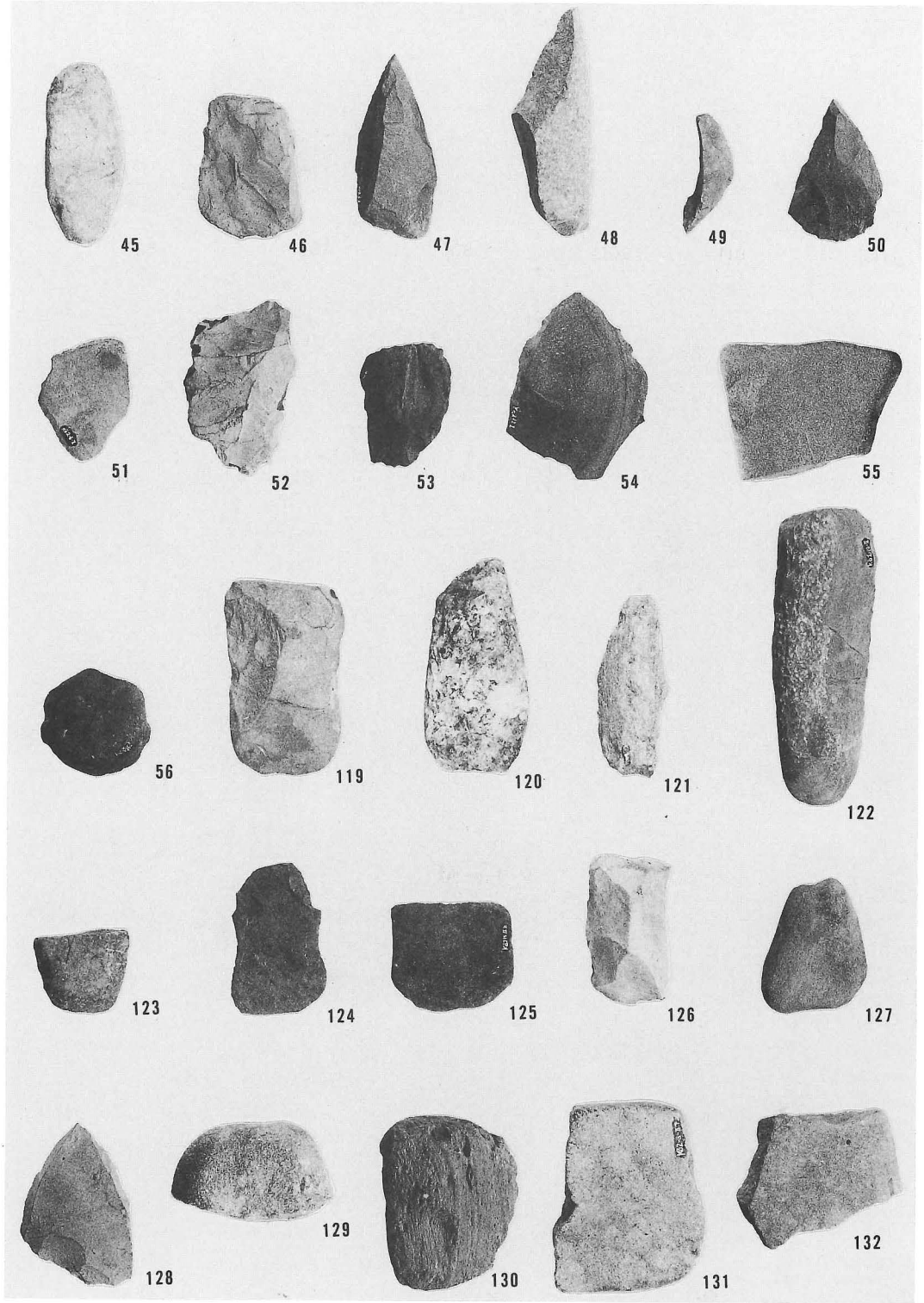

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44

出土石器①

図版16

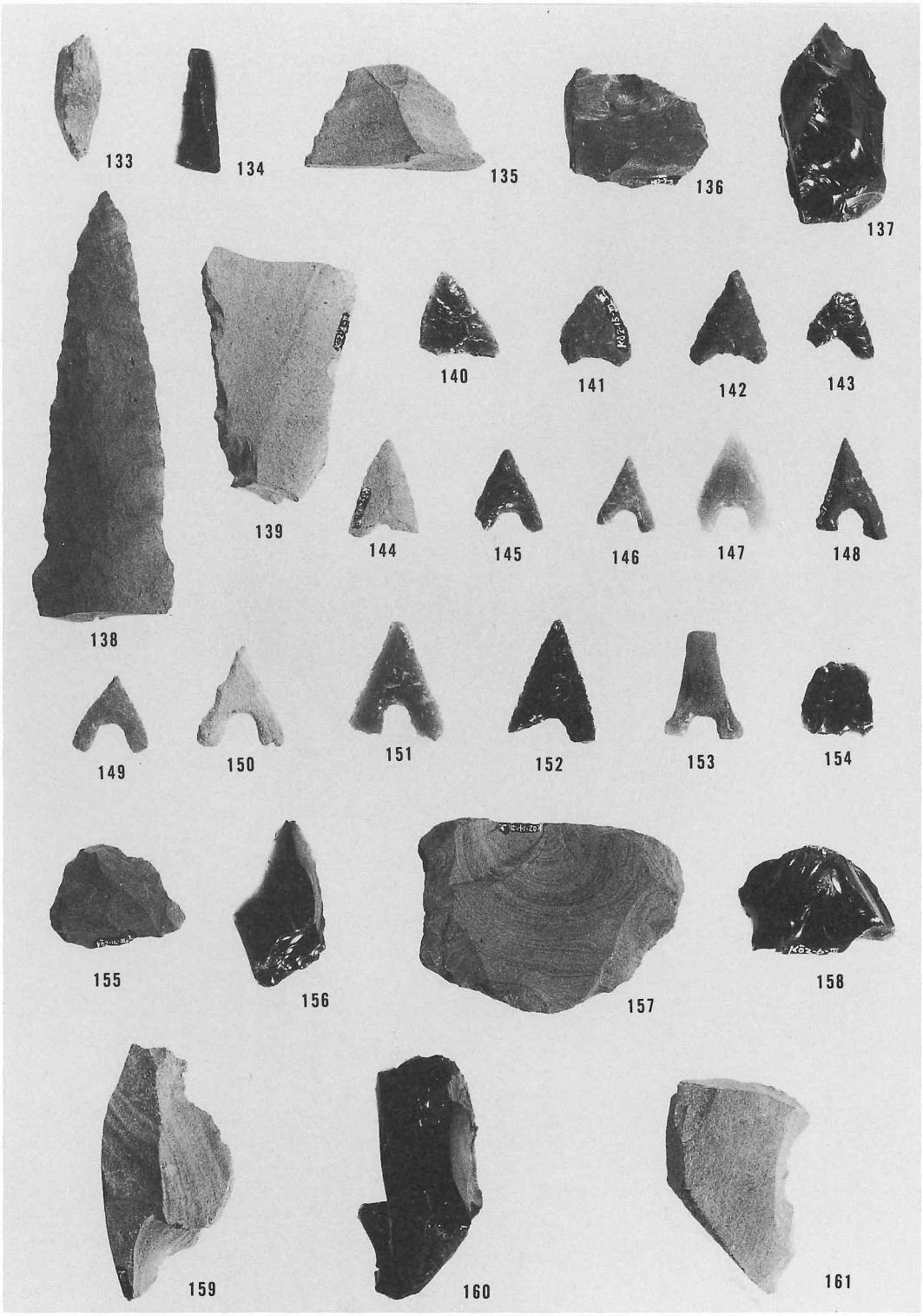

57
58
59
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76
77
78
79
80
81
82
83
84
85
86
87
88
89
90
91
92
93
94
95
96
97
98
99
100
101
102
103
104
105
106
107
108
109
110
111
112
113
114
115
116
117
118

出土石器②

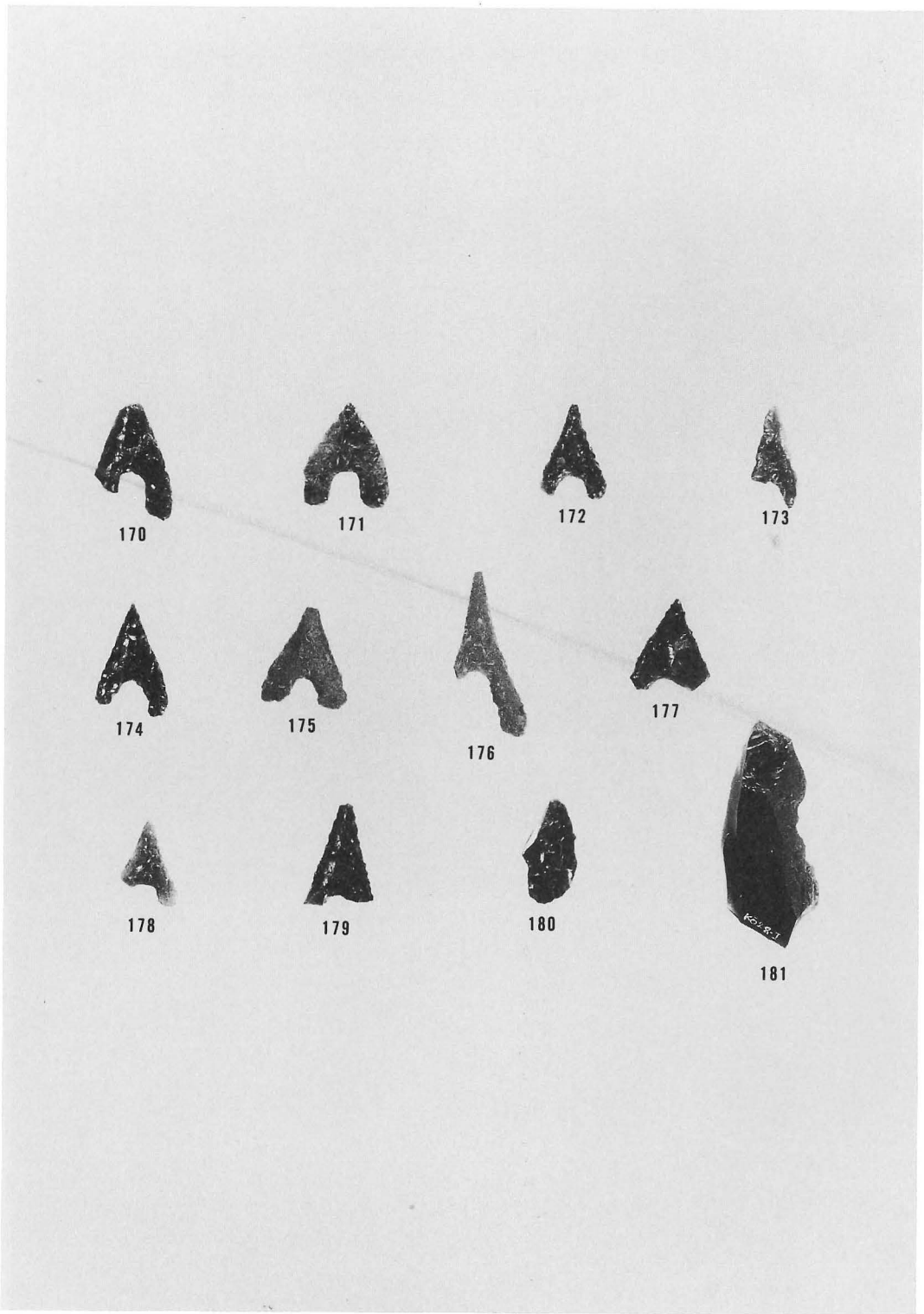

45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
119
120
121
122
123
124
125
126
127
128
129
130
131
132

出土石器③

図版18

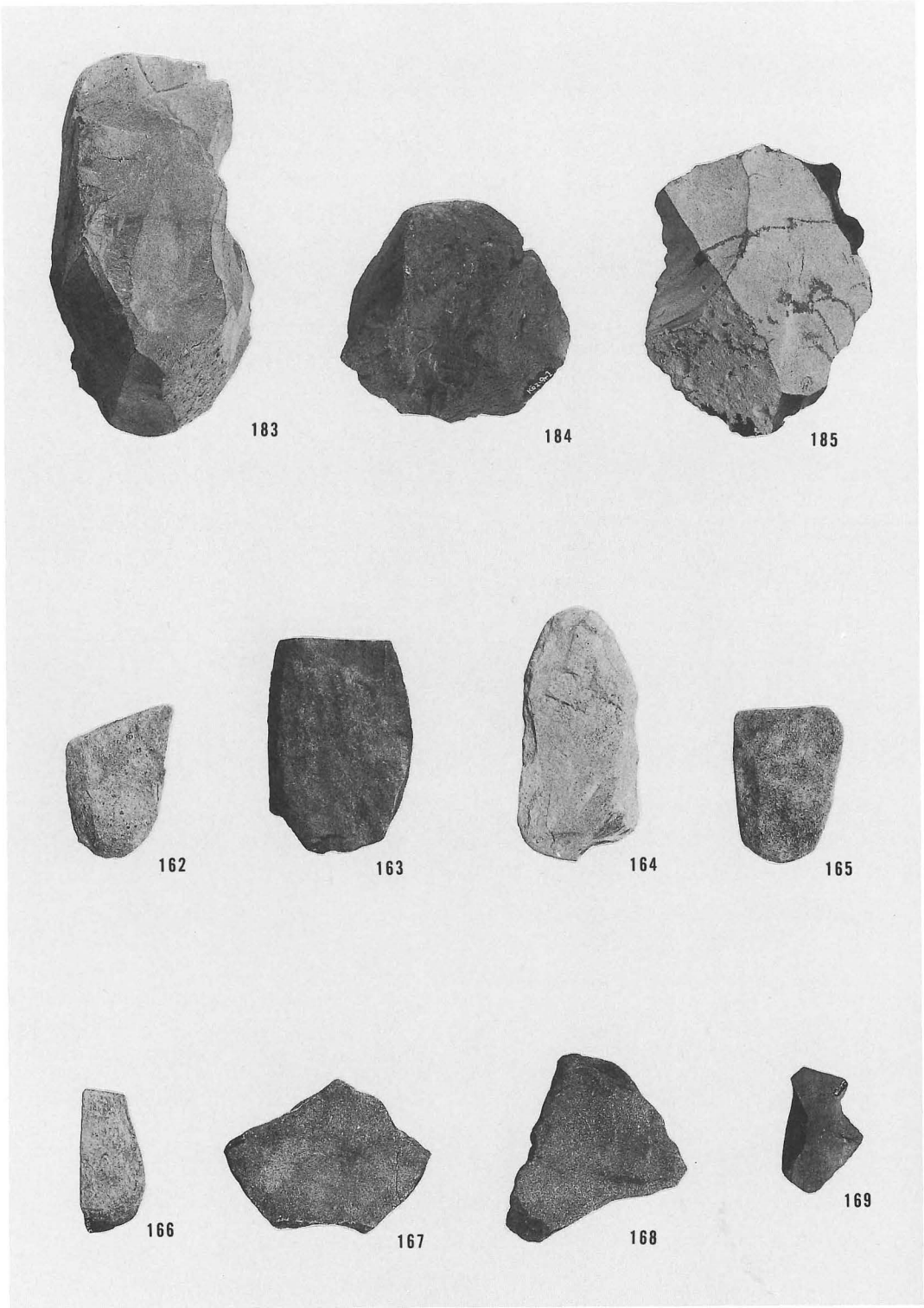

133
134
135
136
137
138
139
140
141
142
143
144
145
146
147
148
149
150
151
152
153
154
155
156
157
158
159
160
161

出土石器④



出土石器⑤

図版20

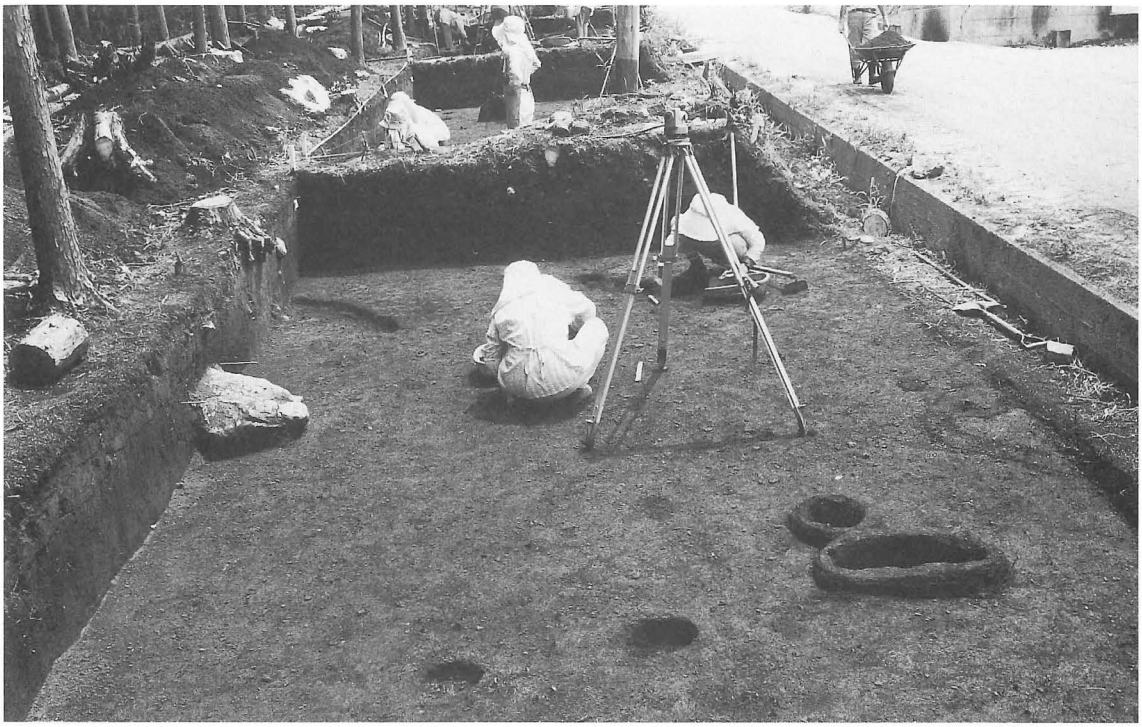


出土石器⑥

出土石器（磨石・凹石）⑦

図版22

出土石器（石皿）⑧



調査スナップ及び記念写真

吾妻町の文化財　13

弘　法　原　遺　跡

1992

発　行　長崎県吾妻町教育委員会
南高来郡吾妻町大木場名

印　刷　株式会社　昭和堂印刷
諫早市長野町1007